

平城貝塚

平城貝塚第Ⅴ次発掘調査報告書

1996

愛媛県御荘町教育委員会

平 城 貝 塚

平城貝塚第Ⅴ次発掘調査報告書

1 9 9 6

愛媛県御荘町教育委員会

巻頭図版



ウチヤマトマツバキ製の貝笛 (B4グリット出土)

序 文

御荘町には、ご承知のように遠く古より祖先の残したいくつかの埋蔵文化財が点在しております。その中の一つに県下では数少ない「平城貝塚」があります。この一帯は民家や商店が建てられており、その全容を一度には発掘公開ができないのが実情でございます。今回の第5次発掘調査も民家の改築工事が実施されるにあたっての学術調査でありました。

その間、調査がスムーズに運びましたことは、地権者であります岡田一男氏の調査に対するご理解をはじめ、多くの関係者のご協力のたまものと感謝致しております。

この度の発掘調査におきましては、貴重な多くの出土物とともに、日本では出土例がないと評価されております「貝笛」の発見という快挙を成し遂げられました。これ等によって、当時の生活を知る上に、新たな1ページが加えられ、縄文人の生活を生き生きと伝える上での、良き遺物だと思われまます。

本調査にあたりましては、終始学究的態度で積極的にご指導いただき、調査に当たられました日本考古学協会員大飼徹夫調査指導主任、また直接にご助言を受けました愛媛大学文学部下條信行教授・愛媛考古学協会森光晴会長・愛媛県教育委員会文化財保護課渡辺豊専門員・なお考古学関係の各位にはご指導とご協力をいただき、心からお礼申し上げます。専門分野毎の専門分析につきお願い致しました名古屋大学文学部渡辺誠教授・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター松井章主任研究官・大分市立博物館木村幾太郎館長・東京パリオ・サーヴェイKKの各玉稿は資料として活用させていただきます。

ご承知のように埋蔵文化財は、それぞれの地域の自然、社会環境の中で祖先の残した生活の直接的な証であります。更にこれは、地域固有の貴重な文化遺産でございます。私たちは古き歴史に誇りを持ち、文化財の保護、保存に努め、地域の活性化に生かしていきたいと存じます。

本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、さらには教育活動、文化振興に寄与できれば幸いです。

本調査に当り、発掘・遺物の整理等にご尽力いただきました愛媛県埋文センター・高知県埋文センター・愛媛大学・別府大学・地元の調査員・調査補助員の皆様には多大なるご協力、ご支援を賜りましたことに対しまして、ここに厚くお礼申し上げます。

平成8年3月31日

御荘町教育委員会教育長 西 平 六 郎

例 言

- (1) 本書は、御荘町教育委員会生涯学習課が平成7年10月17日から同年10月31日までの間、御荘町平城2055番地の平城貝塚埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は、土地所有者である岡田一男氏より古家屋の取り壊し後、宅地として整地したい旨の申し出により、平成7年度国宝重要文化財等整備費補助を受け、御荘町教育委員会が実施した。
- (3) 調査組織
実施主体 御荘町教育委員会
顧問 山口繁喜 御荘町町長
調査団長 西平六郎 御荘町教育委員会教育長
同副団長 本田南城 御荘町文化財保護審議会委員長
調査指導主任 犬飼徹夫 日本考古学協会会長
調査指導員 森 光晴 愛媛考古学協会会長
調査指導員 下條信行 愛媛大学法文学部教授
以下下記のとおり
- (4) 発掘調査は下記の者が担当した。
主任 犬飼徹夫
本田南城 中岡修也 藤田儲三 間口昭三 石川 裕 今田秀樹 久保克己 山平忠重
高橋利重 徳永満男 辻内 功 幸泉満夫 小谷桂太郎 林 潤也 成城喜代一 楠本富男
- (5) 発掘調査にあたり森光晴、下條信行、愛媛県教育委員会文化財保護課渡辺豊各氏の助言を受けた。
- (6) 本報告書を作成するにあたり、土器については家根祥多（立命館大学）千葉豊（京都大学）の両氏、石器については橋昌信（別府大学）福元明美（別府大学学生）の両氏、貝製品については、奈良国立文化財研究所埋文センターの松井章氏のご指導、ご協力を賜った。自然科学的な調査ではバリノ・サーヴェイKKの協力をいただいた。
- (7) 本報告書では、貝塚層については幸泉満夫（愛媛大学学生）、石器は小谷桂太郎（別府大学学生）、貝類は石川裕（県立吉田高校教諭）、土器その他の部分は犬飼徹夫が担当した。その他、編集全般については中岡修也、写真撮影現場は藤田儲三、遺物幸崎信正が当たった。
- (8) 渡辺誠氏、木村幾太郎氏の玉稿は、平成8年度に出版する報告書続編（仮称）に採録する。
- (9) 事務局 御荘町教育委員会生涯学習課
幸崎信正 生涯学習課課長
坂尾英治 生涯学習課係長
- (10) 遣り方測量、土地標高の測量については浜田測量事務所の協力を受け、機材提供は、高知県埋蔵文化財センター、久保建設に協力をいただいた。

本文目次

巻頭図版

序文

例言

第1章 調査のあらましと経過	1
1 遺跡の立地と歴史的環境	1
2 平城貝塚と周辺の遺跡	3
3 平城貝塚研究履歴	6
(1) 発掘調査歴	6
(2) 発掘調査場所歴	7
4 今次の調査に至る経過	8
5 発掘調査体制	8
6 発掘の方法	9
7 発掘調査の経過	11
第2章 発掘の成果	14
1 層序	14
2 出土土器	17
(1) Aブロックからの出土土器	19
(2) Bブロックからの出土土器	36
(3) Cブロックからの出土土器	50
(4) Dブロックからの出土土器	65
(5) その他ブロックからの出土土器	78
3 出土石器	81
(1) 石斧	81
(2) 石錘	81
(3) スクレイパー	82
(4) 石鏃	82
(5) 磨石	82
(6) 敲石	82
(7) 凹石	82
(8) 二次加工剥片	82

(9) 石 核	83
(10) 剥 片	83
(11) 若干の考察	84
4 出土貝類	101
(1) 出土した貝類	101
(2) 非食料貝	101
(3) 食料貝	101
(4) 当時の海岸の様子	102
(5) 絶滅した貝	103
(6) 陸産貝	103
(7) ま と め	103
5 貝製品	107
(1) 貝 笛	108
第3章 自然科学的な調査	109
1 テフラ分析	109
2 種実遺体同定	109
3 総 括	110

挿 図 目 次

<p>挿図1 平城貝塚と周辺の遺跡位置図……3</p> <p>挿図2 発掘調査歴……6</p> <p>挿図3 発掘調査場所歴……7</p> <p>挿図4 調査区のグリット配置平面図……10</p> <p>挿図5 A～D区東西土層断面図……15</p> <p>挿図6 A～D区南北土層断面図……16</p> <p>挿図7 A-0グリット出土土器実測図(1)…28</p> <p>挿図8 A-0グリット出土土器実測図(2)…29</p> <p>挿図9 A-0グリット出土土器実測図(3)…30</p> <p>挿図10 A-1グリット出土土器実測図(1)…31</p> <p>挿図11 A-1グリット出土土器実測図(2)…32</p> <p>挿図12 A-1グリット出土土器実測図(3)…33</p> <p>挿図13 A-2グリット出土土器実測図(1)…34</p> <p>挿図14 A-2・A-3グリット出土土器実測図(2)…35</p> <p>挿図15 B-0グリット出土土器実測図(1)…44</p> <p>挿図16 B-0グリット出土土器実測図(2)…45</p> <p>挿図17 $\frac{B-1}{(179-184)} \cdot \frac{B-2}{(185-195)}$グリット出土土器実測図…46</p> <p>挿図18 B-4グリット出土土器実測図(1)…47</p> <p>挿図19 B-4グリット出土土器実測図(2)…48</p> <p>挿図20 B-4グリット出土土器実測図(3)…49</p> <p>挿図21 C-0・C-1グリット出土土器実測図…57</p> <p>挿図22 C-2グリット出土土器実測図…58</p> <p>挿図23 C-2・C-3グリット出土土器実測図…59</p> <p>挿図24 C-4グリット出土土器実測図(1)…60</p> <p>挿図25 C-4グリット出土土器実測図(2)…61</p>	<p>挿図26 C-4グリット出土土器実測図(3)…62</p> <p>挿図27 C-4グリット出土土器実測図(4)…63</p> <p>挿図28 C-4グリット出土土器実測図(5)…64</p> <p>挿図29 D-0グリット出土土器実測図…71</p> <p>挿図30 D-1グリット出土土器実測図…72</p> <p>挿図31 D-2グリット出土土器実測図(1)…73</p> <p>挿図32 D-2グリット出土土器実測図(2)…74</p> <p>挿図33 D-3グリット出土土器実測図…75</p> <p>挿図34 D-4グリット出土土器実測図(1)…76</p> <p>挿図35 D-4グリット出土土器実測図(2)…77</p> <p>挿図36 F-1・F-2グリット出土土器実測図…79</p> <p>挿図37 F-3・i-1グリット出土土器実測図…80</p> <p>挿図38 石器実測図……85</p> <p>挿図39 石器実測図……86</p> <p>挿図40 石器実測図……87</p> <p>挿図41 石器実測図……88</p> <p>挿図42 石器実測図……89</p> <p>挿図43 石器実測図……90</p> <p>挿図44 石器実測図……91</p> <p>挿図45 石器実測図……92</p> <p>挿図46 石器実測図……93</p> <p>挿図47 石器実測図……94</p> <p>挿図48 貝筥実測図 ……108</p> <p>挿図49 新聞記事「最古の貝筥出土」 ……108</p>
---	--

表 目 次

第1表 平城貝塚周辺の遺跡一覧表…………… 5	第25表 C-4グリット出土土器観察表(3)…55
第2表 A-0グリット出土土器観察表(1)…19	第26表 C-4グリット出土土器観察表(4)…56
第3表 A-0グリット出土土器観察表(2)…20	第27表 D-0グリット出土土器観察表…65
第4表 A-0グリット出土土器観察表(3)…21	第28表 D-1グリット出土土器観察表…66
第5表 A-1グリット出土土器観察表(1)…22	第29表 D-2グリット出土土器観察表(1)…67
第6表 A-1グリット出土土器観察表(2)…23	第30表 D-2グリット出土土器観察表(2)…68
第7表 A-1グリット出土土器観察表(3)…24	第31表 D-3グリット出土土器観察表…69
第8表 A-2・A-3グリット出土土器観察表(1)…25	第32表 D-4グリット出土土器観察表…70
第9表 A-2・A-3グリット出土土器観察表(2)…26	第33表 F-1・F-2・F-3・i-1グリット出土土器観察表…78
第10表 A-2・A-3グリット出土土器観察表(3)…27	第34表 石斧観察表……………95
第11表 B-0グリット出土土器観察表(1)…36	第35表 石錘観察表……………96
第12表 B-0グリット出土土器観察表(2)…37	第36表 スクレイパー観察表……………96
第13表 B-0グリット出土土器観察表(3)…38	第37表 石鏃観察表……………96
第14表 B-1・B-2グリット出土土器観察表…39	第38表 磨石観察表……………96
第15表 B-4グリット出土土器観察表(1)…40	第39表 凹石観察表……………96
第16表 B-4グリット出土土器観察表(2)…41	第40表 敲石観察表……………97
第17表 B-4グリット出土土器観察表(3)…42	第41表 二次加工剥片観察表……………97
第18表 B-4グリット出土土器観察表(4)…43	第42表 石核観察表……………97
第19表 C-0・C-1グリット出土土器観察表(1)…50	第43表 剥片観察表……………98
第20表 C-0・C-1グリット出土土器観察表(2)…51	第44表 石器組成表 ……………100
第21表 C-2・C-3グリット出土土器観察表(1)…51	第45表 出土貝類一覧表 ……………104
第22表 C-2・C-3グリット出土土器観察表(2)…52	第46表 試掘第2トレンチの貝 ……………105
第23表 C-4グリット出土土器観察表(1)…53	第47表 D-2グリット出土の貝 ……………106
第24表 C-4グリット出土土器観察表(2)…54	

図 版 目 次

巻頭図版	平城貝塚出土ウチヤマクマツノ峠製の貝笛		
図版 1-1	遺り方測量の設定……………9		
図版 1-2	完掘終了時の発掘メンバー…13		
図版 2	試料中の火山ガラス ……………113	図版 7	縄文土器 平城貝塚出土土器部分図(1) 117
図版 3	航空写真 遺跡周辺の航空写真 113	図版 8	縄文土器 平城貝塚出土土器部分図(2) 118
図版 4	発掘状況 ……………114	図版 9	縄文土器 平城貝塚出土土器部分図(3) 119
	1. 発掘作業風景 ……………114	図版10	土器 平城貝塚出土土器(1・2・3) 120
	2. B-4グリット発掘前 ……114	図版11	土器 平城貝塚出土土器(4・5・6) 121
	3. B-4グリット完掘 ……114	図版12	土器 平城貝塚出土土器(7・8・9) 122
図版 5	出土遺物 ……………115	図版13	土器 平城貝塚出土土器(10・11・12) 123
	1. A-1グリットからの出土土器 115	図版14	土器 平城貝塚出土土器(13・14・15) 124
	2. B-0グリットからの出土土器 115	図版15	石器 平城貝塚出土石器(1・2・3) 125
	3. A-1グリットからの出土土器 115	図版16	貝 類 ……………126
図版 6	貝層と獣骨 ……………116		
			1. C-4グリット東面の貝層 116
			2. C-4グリットからの獣骨 116
			3. C-4グリットからの獣骨 116



第1章 調査のあらましと経過

1. 遺跡の立地と歴史的環境

平城貝塚第5次調査は、愛媛県南宇和郡御荘町平城2055番地、岡田一男氏の私有地235m²を対象とするものであった。老朽化した氏の家屋の改築に際しての調査である。

さて、この対象区は、鎌木義昌・西田栄氏による第1次調査(1954)で提示されていた「貝塚推定地域」の西南端部となるが、この推定は、今回の第5次調査を通してかなり正確であることが判明した。(挿図3を参照)

即ち、貝塚中心部での従来の知見では、表土層(I層)下に混貝土層(IIa層)、次に混土貝層(IIb層)さらにその下部に純貝層(IIc層)とつづき、基層にローム層的な火山灰層となるのが標式的なものとして示されていたが、今次の調査においても、より中心部に近い4区(B4・C4・D4・A4)は旧家屋によって破壊)では従来の知見とほぼ同様な層序を示した。しかし、末端部に近い0区(A0・B0・C0・D0)、1区(A1・B1・C1・D1)では、貝層(II層)と暗茶褐色砂質シルト(IV層)との間に(III層)として黒褐色粘質土層をはさむ様相が観取された(「層序」の項の挿図4を参照)。この黒褐色粘質土層は、貝塚中心部の形成が始まる頃は、海辺または河口に接し、アシなどの植物が生育しており、御荘湾頭や僧都川の沖積が進行するなかで陸地化し、海辺の植物が黒ボク的な土層が火山灰層面上に形成されたなかで、貝塚の拡大によって、III層面上に貝塚が造成されたと考えられる。その部分の貝層の層厚は比較的薄く、一見して貝塚端部の様相を示すものとなっていた。また、旧家屋の中心部で、その建築及び取り壊し時にほとんど破壊されたと推定されるE区(E1・E2・E3・E4)の様相はしばらくおくとしても、F区、G区、H区、I区においては、貝層は極めて稀薄で、遺物もまた弱少であった。ここが貝塚末端部となるものと考えられた。

従って、本貝塚は、東側、即ち和口橋側からゆるやかに上りつめて頂部(8.35m)が形成され、ここが貝塚の中心部となる。かつて中尾氏の醸造場のあった場所である。貝塚は道路(旧国道56号)を越えて北側に一部伸びており、住居跡等の存在が予察されているものの、貝塚の主体は南及び西側にあり、その西南端部分が、今次の調査の対象区となる。

さて、本貝塚の立地は、すでに第1次調査の西田栄氏、第4次調査の木村剛朗氏によって言及されているところであり、以下簡潔に述べる。即ち、この地方での主峰を成す観音岳(782m)が、南部に展がる御荘湾へと複雑な地形をなして裾を広げるその先端部、舌状台地をなして南面して延びる低位の洪積段丘上に位置している。その南側前面には、観音岳の東斜面に始流を持つ僧都川が西流し、その東側は、同じく観音岳の南斜面を源流として南下する和口川が近接して南流する。和口川は貝塚の東側部分で僧都川とほぼ直交する形で合流する。また住時の西側は、前述した如く、本貝塚に近接して御荘湾が現平城小学校近辺まで深く湾入しており、八幡野から延びる低位の舌状台地と並列する形状で、御荘湾頭に突出していたものと想定される。

いずれにせよ、僧都川が御荘湾へと注ぐあたり、舌状台地の先端部に形成されていた本貝塚

遺跡の住人は、鹹水性、汽水性の魚貝類を食料資源の対象としたことは、多言を要しないところであろう。

つぎに、やや巨視的な視点で述べておこう。まず広く知られている中村地溝帯を形成したE-W系の断層運動と同系列として扱えられる僧都川中・下流部に残存する地溝部分（城辺低地…亀の串-太場-三島-平城-平山）は、その後の（金山-高月山-観音岳-篠山）N-S系の強力な造山運動によって攪乱、変貌した様相として扱えられる。観音岳の東斜面に始流を持つ僧都川は上流部においては南流するものの、城辺低地に注ぐあたりで、地溝方向（N-S）に沿って、極端に流れを緩やかにしつつ西流する。ここには自然堤防州の微高地が形成され、良好な先史遺跡が存在する。一方、観音岳の南斜面に始源を持つ小河川（西柳川、長月川、和口川）は、御荘湾へと直接注ぐことなく、地溝帯部分に向けて南流し、西流する僧都川へと合流する。この形状は、僧都川河口部の様相をかなり複雑にしたことは想像に難しくなく、生物相もまた変化に富んだものとしたものと考えられる。

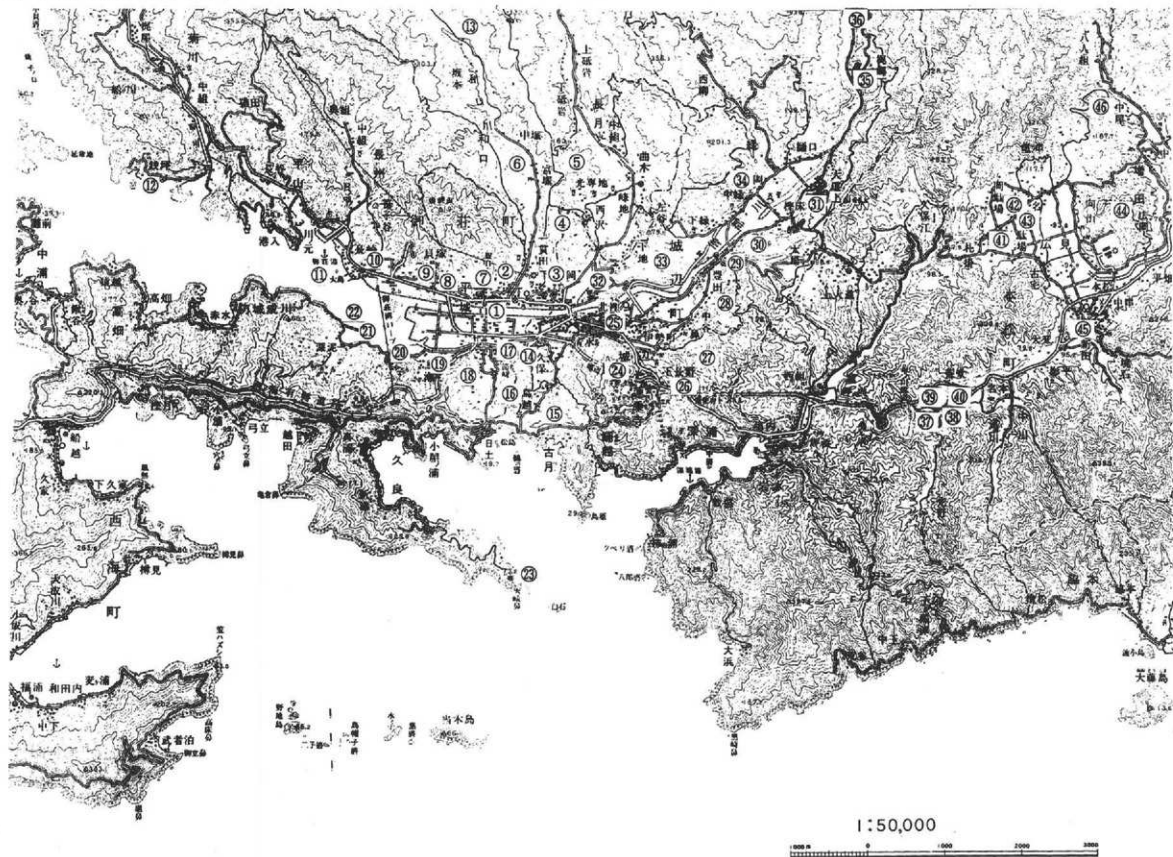
またこれらの河川は、平城貝塚などを面上に乗せる低位砂礫台地（5~20m±）を除き、水系中流部の中位砂礫台地（25~40m±）及び上位砂礫台地（45~80m±）を殆ど浸食し、かつ細かく分断し、細く鳥趾状にやせた丘頂平坦面のかたちで分布させるものとなっている。これらの台地面は30/1000前後の勾配でおおむね南落ちするものが多く、多分に開析扇状地の性格をもち、ここにも良好な旧石器、縄文期の立地を提供している。なお、これらの丘陵地と台地の構成物質は、ほぼ同質の第四系（更新世前期-後期）堆積物であり、更新世後期のそれは、沖積層下の谷底部を成していると考えられる。

以上言及した遺跡の立地状況をもとに、先史・古代遺跡として現在までに確認されているものを図示する。（挿図1、第1表）

（註）

- ① 鎌木義昌、西田栄『伊予平城貝塚』愛媛県御荘町教委1957のP. 3に図示されている。
- ② 註①P. 3
- ③ 註①P. 2
- ④ 木村剛明『平城貝塚、第IV次発掘調査報告書』1982

2. 平城貝塚と周辺の遺跡



挿図1 平城貝塚と周辺の遺跡位置図

第1表 平城貝塚周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主要遺物	番号	遺跡名	主要遺物
1	平城貝塚	縄文式土器、貝層、人骨、骨角器	24	大森城	中世城跡
2	法華寺	縄文式土器、弥生式土器、土師器	25	常盤城	中世城跡
3	永の岡	弥生式土器	26	枝城	中世城跡
4	源駄馬	弥生式土器	27	一夜城	中世城跡
5	永月城	中世城跡	28	不老池	弥生式土器
6	和口	国府型ナイフ形石器・翼状剥片・石核(旧石器)	29	敷城	中世城跡
7	東猪之尻	弥生式土器	30	緑当時	局部磨製石器
8	八幡野	縄文式土器、姫島産黒曜石	31	大道下	縄文式土器
9	貝塚	縄文式土器、貝層	32	三島ヶ岡	土師器・弥生式土器
10	長崎	縄文式土器	33	御陣山城	中世城跡
11	大島	縄文式土器、姫島産黒曜石	34	緑城	中世城跡
12	銭坪	縄文式土器、姫島産黒曜石	35	梶郷駄馬	縄文式土器、石斧、石鏃、石錘、姫島産黒曜石
13	坂本	尖頭器、翼状剥片(旧石器)	36	アナガイチ	縄文式土器、姫島産黒曜石
14	久保	縄文式土器	37	踊駄馬II	縄文式土器、十字形石器
15	鷹ノ巣城	中世城跡	38	踊駄馬I	縄文式土器、石斧、姫島産黒曜石
16	鳥越	縄文式土器、弥生式土器	39	茶堂II	縄文式土器、石斧、石鏃、石錘、姫島産黒曜石
17	節崎II	縄文式土器、石斧、姫島産黒曜石(1kg原石)	40	茶堂I	縄文式土器、姫島産黒曜石
18	節崎I	縄文式土器、姫島産黒曜石	41	札掛	縄文式土器、石鏃
19	馬瀬	縄文式土器、姫島産黒曜石	42	岡駄馬	縄文式土器、姫島産黒曜石
20	仙磐鼻	石斧、姫島産黒曜石	43	広見	縄文式土器、石鏃、姫島産黒曜石
21	深泥I	国府型ナイフ形石器、局部磨製石斧、縄文式土器、姫島産黒曜石搬入遺跡(?)	44	猿越城	中世城跡
22	深泥II	縄文式土器、姫島産黒曜石	45	大又	縄文式土器、姫島産黒曜石
23	天嶋鼻	縄文式土器、姫島産黒曜石	46	中屋	ナイフ形石器(旧石器)、縄文式土器、石鏃、石斧

〔文献〕

- (1. 平城貝塚) 省略
- (2. 法華寺) 犬飼徹夫「法華寺遺跡」『愛媛県史資料編考古』愛媛県1986
- (6. 和口) 稲田・十亀・猪石「愛媛県御荘町和口遺跡第4地点の試掘調査概要」和口遺跡調査団1989
- (21. 深泥I) 木村剛朗「愛媛県深泥縄文遺跡と遺物」『西国第2号』1968
- (25. 常盤城) 森光晴「常盤城」『愛媛県中世城館跡』愛媛県教委1987
- (35. 梶郷駄馬) 吉本 弘「梶郷駄馬遺跡調査報告書」愛媛県教委1983
- (39. 茶堂II) 中岡・犬飼・猪石「茶堂II遺跡発掘調査報告書」一本松町教委1994
- (43. 広見) 木村剛朗「愛媛県南宇和郡広見の縄文遺物」『古代文化24-6』1972
- (44. 猿越城) 今井信太郎「猿越城」『愛媛県中世城館跡』愛媛県教委1987

3. 平城貝塚研究履歴

(1) 発掘調査歴

年・月・日	発掘担当者	発掘対称区	発掘面積	特記事項
昭和29年(1954) 2/20~2/25 3/9~3/11 4/7~4/9	西田 栄 鎌木 義昌	A・B・C区 ○中尾醤油醸造場他 を取りこわし、四 国銀行支店建築に 伴う調査	126㎡	○第1次調査とする。 ○出土土器を6類に分類する。 ○人骨数体を採集する。 ○ハマグリなど14種の鹹水産 の貝を確認。 ○マグロなど外海的な大型の 魚骨を確認。 ○鹿・猪の獣骨のほか小型の 馬の歯を検出。 ○サルボウに加工した貝輪、 骨針を検出。
昭和37年(1962) 10/28~10/30	野平 啓真	D区 ○前田家改築に伴い 人骨発見による、 緊急調査	14㎡	○第2次調査とする。 ○カワナなど淡水産貝を確認。 ○人骨2体を採集する。 ○ハマグリ、サルボウの貝輪 を検出。
昭和47年(1972) 10/21~10/25	草地 性自	E区 ○旧工藤めがね店 (四国銀行が買取) 跡の調査	91㎡	○第3次調査とする。 ○良好な平城第2類土器を検 出。 ○骨針(3)、サルボウ製貝輪、 磨製鹿角(4)を検出。
昭和56年(1981) 9/25~10/5	木村 剛朗	F区 ○四国銀行の東隣に 駐車場を設置する ことに伴う調査	153㎡	○第4次調査とする。 ○平城第2類土器を中心とす る遺構(住居址)を検出。 ○人骨3体を採集する。 ○ヤスと刺突具とみられる骨 角器を検出する。
平成7年(1995) 10/17~11/4	犬飼 徹夫	G区 ○岡田家改築に伴う 学術調査	235㎡	○第5次調査とする。

挿図2 発掘調査歴

(発掘調査報告書)

- 第1次調査 西田栄・鎌木義昌「伊予平城貝塚」御荘町教育委員会1957
ほぼ同様の内容が『瀬戸内考古学1』1957に記載されている。
- 第2次調査 発掘担当者である野平啓真氏により『御荘町史』の中に、その一部が記録に留められている。
- 第3次調査 草地性自「平城貝塚第3次発掘調査概報」『愛媛の文化13』1973
- 第4次調査 木村剛朗「平城貝塚-愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚第IV次発掘調査報告書」御荘町教育委員会
1982
- その他 第1次調査での「馬歯」について、直良信夫「日本および東アジア発見の馬歯・馬骨」『古代遺跡の家
畜遺体』日本中央競馬会弘済会1972、その他、民家の改築時の間隙を縫っての調査として、尾関清子氏の「平
城貝塚出土の織物」(1961, 8金子浩昌氏採集)、犬飼徹夫「平城上層式土器について」『古代文化231』1978な
どが挙げられる。



7.21m

廣自在寺

旧国道56号線



発掘区域地図

A B C S.29 発掘地点
 D S.37 発掘地点
 E S.47 発掘地点
 F S.56 発掘地点
 G H.7 発掘地点
 X 人骨出土地点

0 30m

博都川

挿図3 発掘調査場所歴 (H.8. 3. 1現在)

4. 今次の調査に至る経過

愛媛県南宇和郡御荘町上町に所在する平城貝塚は、その発見を古く明治23年(1890)に置き、発見者の寺石正路の論稿を始め数多くの研究者によって、随時、報告が成されてきたものの、本遺跡についての関心や調査は、第二次大戦後のことであった。県・史跡となったのは昭和26年(1951)である。この時の貝塚の分布範囲は東西約60m、南北90mと推察されたものの、家屋密集地であったため、史跡指定地は極めて狭小な地域となっている。従って、発掘調査もまた、史跡周辺の住民の理解と協力によって、家屋の改修、改築という、限られた機会を捉えたものであったことは、前項において述べたところである。

この間、御荘町及び御荘町教育委員会は、機会をとらえ、本遺跡の保護と学術的調査の必要性を、広く町民はもとより、遺跡周辺の住民に呼びかけてきたところであった。今回の調査も、第1次～第4次調査同様に、この呼びかけに答えた史跡指定地周辺の住民の協力と理解によるところが大きかった。

御荘町平城2055番地に居住する岡田一男氏が、老朽化し危険度が増した家屋を取り壊し、若干の土地造成を行い、家屋新築を予定したのは、平成6年の春であった。従来の知見から、貝層の存在を知る氏から、町教育委員会に知らされたのは平成6年の夏のこととなる。

町教委は、県・史跡周辺であることや、推察されている貝塚分布範囲内であることから、平成6年10月20日、岡田氏の所有地、平成2055番地、235㎡を対象に発掘調査の実施を計画。同日、岡田一男氏より、法第57条第2第1項にもとづき、埋蔵文化財発掘届出書を文化庁長官に提出された。一方、町教委は対象区の試掘を計画し、平成6年11月11日～11月14日にわたり、調査担当者、幸崎信正、楠本富男、犬飼徹夫、立会者、本田南城他4名で実施した。この試掘では、標準層厚約30cm程度の混貝土層の存在を確認し、発掘調査の必要性を強固なものとした。

平成6年12月19日、平成7年度文化財補助事業計画書の提出。平成7年6月12日文化財関係国庫補助内示を受け、平成7年6月26日、平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書を提出、同年7月6日発掘調査体制を決定(次項)、同年10月9日、各関係者に発掘調査実施通知書を発送した。同年10月11日(水)、発掘区域のグリット設定、杭打実施。(浜田測量事務所、立会者、愛媛県教委文化財保護課渡辺豊氏)、同年10月17日(火)発掘の開始となる。

5. 発掘調査体制

顧問	山口 繁喜	御荘町町長					
調査団長	西平 六郎	御荘町教育委員会教育長					
調査団副団長	本田 南城	御荘町文化保護審議会委員長					
調査指導主任	犬飼 徹夫	日本考古学協会会員					
調査指導員	森 光晴	愛媛考古学協会会長					
	下條 信行	愛媛大学法文学部教授					
調査員	中岡 修也	藤田 儲三	間口 昭三	石川 裕	今田 秀樹		
調査補助員	久保 克己	山平 忠重	高橋 利重	徳永 満男	辻内 功		

石野 瑞木 幸泉 満夫 林 潤也 古谷桂太郎 成城喜代一
楠本 富男 宮本 幸枝 山口三千代 布山 信子

事務局 御荘町教育委員会、生涯学習課

幸崎 信正 課長

坂尾 英治 係長

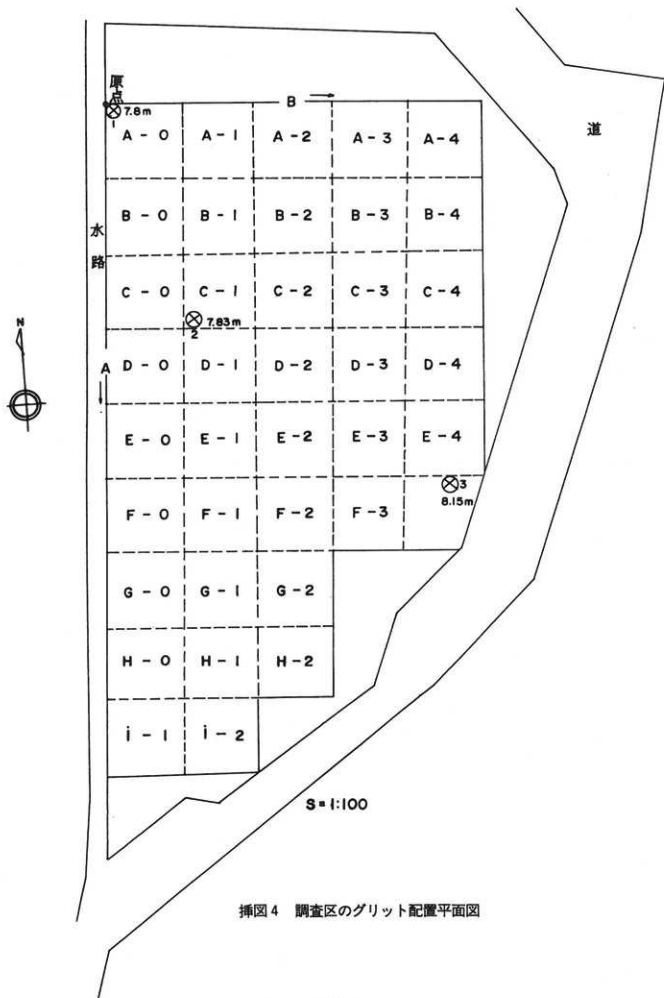
6. 発掘の方法

発掘対象区の北西隅に原点を設置し、グリット(2m×2m)をA方向(発掘区の長軸)に9、B方向に5を設置した。これにより、挿図4に示す如く37個のグリットが設置された。また、発掘対象区は西方向に緩やかに傾斜するもの(海水準1地点7.8m、2地点7.83m、3地点8.15m)、発掘方法のスピード化を図るため、遣り方測量の方法を採用することとし、遣り方を設置した(図版1)。遣り方の水準高は、0区～3区では8m、4区では8.5mとした。なお、貝層が全く攪乱されず、プライマリーの状態が確認されるグリットにおいては、10cmずつの分層発掘の手法を採用することとした。この場合でも、層位の変化にも留意し、貝層の変化にしたがった遺物の採集にあたることとした。

以上述べた如く、分層発掘によらない遺物のそれぞれは、レベルが測定されているものの、遣り方水準高からの距離であり、あくまでも表土面からの深さを示すものではない。表土面が西方向に緩やかに傾斜を保っているため、このレベル数値が、全てのグリットの遺物の新旧差を示す上で、いかにの正当性を持つかは疑問である。少なくとも各グリット内での新旧の対比は可能となろう。しかし、建造物の建築時及び取り壊し時の攪乱の激しかった西部部分でのレベル対比は、慎重であらねばならない。出土土器のレベルはすべて計測したものの、あくまでも参考とする域を出るものでない。なお、分層発掘による方法は、貝塚中心部に接近したB4、C4グリットに留った。



図版1-1 遣り方測量の設定



挿図4 調査区のグリッド配置平面図

7. 発掘調査の経過

平成7年10月17日(火) 晴

発掘対象区(235m²)表土面上の精査な遺物採集を調査員全員で実施する。次いで、家屋取り壊しの跡のため、上層部が攪乱しており、重機により表土剥ぎを行う。その後、調査区に2m×2mのグリッドを設定し、遣り方による発掘方法を採るための杭打ち、水糸張りを行う。

10月18日(水) 晴

A0-A2区のそれぞれに人員を配置し、10cm程度ずつ下部へと掘り下げる。しかし純貝層はほとんど認められず、ほとんど攪乱を受けた混貝土層である。その混貝土層の下部は、黒褐色粘土層が存在することを確認する。A0区より黒色研磨、連弧文を付す滋賀里Ⅱ式土器の口縁部の採集を始め、多量の伊吹町式土器(西平系)や平城上層式土器(片粕系)を検出する。

10月19日(木) 晴

B0-B2区のそれぞれに人員を配置し、掘り下げを実施する。黒褐色粘土層が貝層の下部に存在し、その下部は暗茶褐色砂質シルト、さらに黄色のローム層と続くことを確認。黄色ローム層のサンプリングを採る。B0グリッドから復元可能な伊吹町式土器を検出する。またこのグリッドからは、口縁部がやや外反する古閑式土器片の採集を始め、多量の平城上層式土器(片粕系)、石器類を検出する。

10月20日(金) 晴

A2区の土坑状遺構を完掘する。遺構内より平城上層式土器(片粕系)72点を検出する。

B3区、C0-C3区にそれぞれ人員を配置し、掘り下げを実施する。B3区は旧家屋によって完全に破壊されていることを確認する。C0区は遺物が弱少であった。C1グリッドから御手洗C式土器(市来系)、C3グリッドからは平城Ⅱ式土器、西瀬戸内系の中津式土器、石器類を検出する。初日からの石川調査員による貝類の検出・調査が続く。

10月21日(土) 快晴

この日は快晴で、また多くの人達の応援を受ける。愛媛埋文センターの中野良一氏・多田仁氏、県立歴史博物館の兵頭氏、また高知果埋文センターからは前田光雄氏を始め5名のセンター員の応援を受ける。純貝層の存在するC4グリッド及びD0-D4グリッドと作業が進行した。C4グリッドでは慎重に分層発掘の手法を採る。獣骨・魚骨・土器類を検出する。C4グリッド黄色のローム層より、縄文中期土器を採集する。またD2グリッドから平城Ⅰ式土器を検出するなど成果が挙がった。

10月22日(日) 晴

一泊してもらった前田氏ら高知埋文センターの方々の応援を引き続きあずかる。C4グリッド東壁から貝層のサンプリングを採る。名古屋大学渡辺誠氏宛にて送付する。作業にはEグリッドへと拡大したが、このグリッドは全く破壊されており、Dグリッドの作業を進める。午後1時より現地報告会を実施する。県教委文化財保

護課より渡辺豊氏、佐伯氏来訪される。

10月24日(火) 雨

御荘町中央公民館で、土器など出土品の水洗い、乾燥した遺物の記名作業を行う。ボランティアとして、宮本幸枝、布山信子、山口三千代の諸氏の協力を受ける。

10月25日(水) 晴

土層層序の図面どりをを行う。D-0・2区の北壁、A-0区南壁、A2区東壁などを対象場所に選定する。また、A0・1グリット、B0・1グリットで混貝土層の剥き取りを行う。(8ケース分) 午後、松山市埋蔵文化財センター梅木謙一氏の来訪を受ける。

10月26日(木) 晴

C0・C1グリット、D0・D1グリットの混土貝層8ケースをウォーターセパレイションによって洗浄する。5mm目、2.5mm目、1mm目によって、沈殿層の4分類に収納し乾燥する。昼前に、愛媛大学下條信行教授来訪。これまでの発掘状況を報告するとともに、今後の進め方について指導を受ける。

10月27日(金) 晴

F0-F3グリットの掘り下げを実施する。貝層はほとんど認められず、遺物も弱少であった。土器類は32点の検出に留った。ほとんど平城上層式土器(片柏系)であった。

10月28日(土) 晴

観察などによって、全調査員で土層の確認を行うとともに、森光晴調査指導員を中心として、C3グリット東壁の貝層保存の剥き取りのための、ふきつけ作業を実施する。合成樹脂(トマックNS-10)を使用する。

10月29日(日) 晴

この日は快晴で、また多くの人達の応援を受ける。早朝より京都大学埋文センターの千葉豊氏、午後は、愛媛大学学生(考古学専攻)8名、高知県埋文センターの曾我貴行氏の来訪を受ける。千葉氏には出土土器について細かく指導にあずかった。また愛媛大学生には、Gグリット、Hグリット、iグリットの発掘を進めていただいた。ほとんど貝層は認められず、遺物も弱少であったものの、幸泉調査補助員の指導のもと、熱心に作業を進めていただいた。

10月30日(月) 晴

30日前に実施したC3グリットの処置作業を行う。保存貝層の固定台(木枠)に、とりつけ作業を行う。一後日、学習会・展示資料として活用する。分層発掘グリット(B4グリット)のみを残して、発掘完掘区の埋め戻し作業を重機にて行う。

10月31日(火) 晴

埋め戻し作業の残りの手作業分の作業を行う。B4グリットについては、犬飼調査指導主任と幸泉調査補助員により、分層発掘を実施する。このグリットは、旧家屋の庭部分で全く攪乱されておらず、純貝層に近い状態が確認されている。多量の動物遺体、石器類のほか、表土下のIIb層から伊吹町式土器(西平系)、彦崎KII式土器を検出し、IIc層から平城上層式(片粕系)の土器のほか、ウチヤマタマツバキガイ製で2孔を貝腹部に穿つ貝笛を発見した。II d層からは、鐘崎II式土器、平城II式土器、犬のものと思われる糞石〔統纏〕にて報告する予定)、IV層から機状把手(破損)を持つ平城I式土器などの検出をみるなど、貴重な成果を挙げた。

11月1日(水)～11月5日(日)

幸泉調査補助員によって、B4グリットの掘り下げを続ける。VII a～c層は、暗黄褐粘質シルト層で、アカホヤ火山灰ガラスの可能性のある微粒を確認し、VIII層は、1～3mm程度の小円礫、1～5mm程度の小角礫を含む明黄褐色シルト層となることなど、貝層下の状態を確認する。

11月6日(月)～11月15日(水)

幸泉調査補助員、宮本幸枝・布山信子・山口三千代・楠本富男の諸氏によって遺物の整理、記帳を進める。この作業には、高知理文センター中村支所の小野由香、岡村明美の両氏の積極的な協力をいただいた。またこの間、犬飼主任は11月11日(土)～13日(月)開催の日本考古学協会1995年度大会(茨城県ひたちなか市)に出席し、茨城県立歴史館で平城貝塚B4グリット出土の貝製品が貝笛であることを、古代笛の研究者美濃晋平氏によって確認する。

11月17日(金)晴

今次調査で採集した平城貝塚の動物遺体一括を、大分市立博物館の木村幾太郎館長に送付し、鑑定を依頼する。



図版 1-2 完掘終了時の発掘メンバー

第2章 発掘の成果

1. 層 序

平城貝塚第5次調査区では、A～D区において縄文時代の遺物包含層が確認された。ここでは、A～D区の土層堆積状況について層位ごとに説明する。(挿図5・6)

I層；近現代の宅地造成にともなう、客土層(I a・I c～I g層)および攪乱層(I b・I f・I h層)を全てI層として扱った。特に調査区の北西側(A・B 0～3区、C 0～1区、D 0区)では、IV層の一部にまで本層が及んでいる。

II層；I層下に検出された貝層をII層とする。II層は、以下に示すII a～II d層に分層できる。

II a層；黒褐色混貝土層。II層の最上層にあたり、特に貝層の端部に顕著に認められた(D 0区北半～D 2区南半)。縄文時代後期後半の遺物(西平系伊吹町式土器など)と、破片となった貝殻、骨類を含み厚さ約2～15cmを測る。

II b層；黒褐色混土貝層。主に調査区の中央から東端(B 4、C・D 2～4区)にかけて、本層の広がりを確認できた。特に東端のB 4～D 4区では、約20～30cmと厚く堆積している。本層の下部からは、後期中葉に属する土器片(平城I式・鐘崎式など)が出土している。

II c層；純貝層。B・C区において認められた。厚さ約10～15cmを測る。貝層内は全くといってよほど土を介在せず、依存状況も極めて良好である。B 4区からは平城I式・鐘崎式土器などとともに、笛と考えられる貝製品が出土している。

II d層；黒褐色土層。B 4区において認められた。本層は獣・魚骨を主体とし、若干の貝と後期中葉の遺物も包含する。厚さ2～5cm程度の薄い層である。

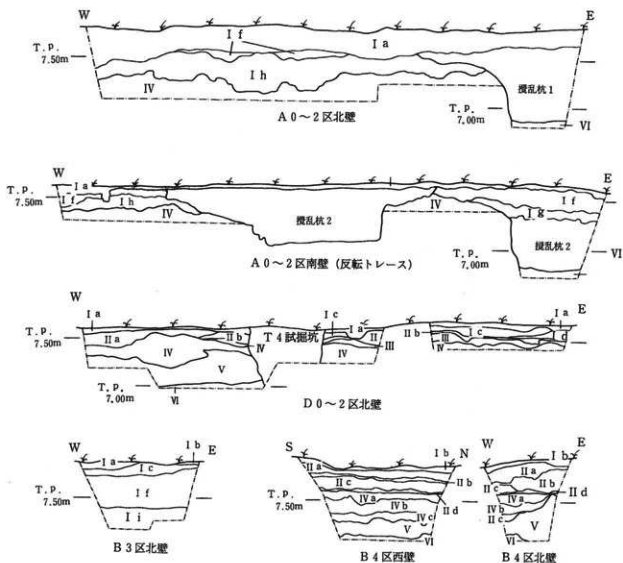
III層；黒色粘質土層。本層は、II層とIV層の間に1～10cm程度堆積する薄い層で、D 2区北半において特に顕著に認められた。B 4区のII d層に対応する可能性もあるが、本層では貝・骨類をほとんど含まないことから、両者を区別して扱った。

IV層；赤褐色の砂質シルト層をIV層とする。IV層は、以下に示すIV a～IV c層に分層できる。

IV a層；赤褐色混貝砂質シルト層。厚さ約7～15cmを測る。依存状況の悪い貝・骨類とともに、後期中葉に属する遺物が少量出土している。調査区外からの貝層の流入によって形成された二次堆積土層と考えられる。なおIV層の上面は、西側に向かって緩やかに傾斜しながら比較的フラットな面を形成しており(挿図5-B 4区北壁、挿図6-C～D 3区東壁など)、土器・石器のほか、特に炭化物の出土量が多かった。

IV b層；赤褐色砂質シルト層。厚さ約10～15cmを測る。この層以下は、貝・骨類を含まなくなる。土質はIV a層とほとんど変化しないが、やや色調が明るくなり粘性も増す。また同層の下部からは、小円礫を若干含むようになる。遺物量は極めて少ないが、B 4区では平城I式の小土器片が数点出土している。

IV c層；明褐色砂質シルト層。V層との漸移層である。B 4区では厚さ10cmを測った。V層の小ブロックを含み、粘性も強くなる。B 4区からは、縄文前期前葉の小土器片(246)が1点出土している。

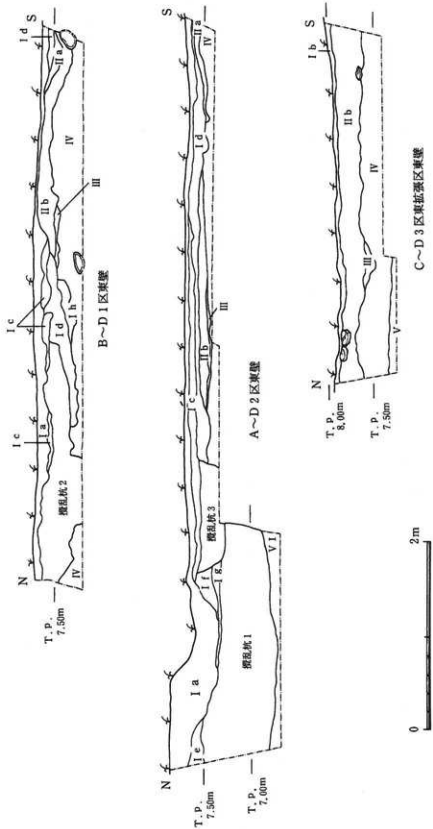


- I a 赤褐色客土
- I b 黒褐色耕作土
- I c 明黄褐色客土
- I d オリーブ黒色砂壤
- I e 褐灰色砂質
- I f 黒褐色混貝土
- I g 明黄褐色客土
- I h 黒色土
- I i 黒色混貝土
- II a 黒褐色混貝土
- II b 黒褐色混貝土
- II c 純貝
- II d 黒褐色混土骨

- III 黒色粘質土
- IV a 赤褐色混貝砂質シルト
- IV b 赤褐色砂質シルト
- IV c 明褐色砂質シルト
- V 黄褐色粘質シルト
- VI 明黄褐色シルト



挿図5 A~D区東西土層断面図 縮尺1/40



挿図6 A~D区南北土層断面図 縮尺1/40

V層：黄褐色粘質シルト層。B4・C3・D0～1区で深掘りを行い、この層を確認した。厚さ約15～40cmを測る。粘性が強く湿り気を帯び、1～5mm程度の小礫を含む。また、同層内からは火山灰ガラスも少量確認できた。なお、D0区北壁沿いからは、厚手の無文土器が1点出土している。

VI層：明黄褐色シルト層。A2・B4区深掘り部分で本層を確認した。本層は小礫を多く含むシルト層で、粘性も少ない。無遺物層であった。

2. 出土土器

本報告書においては、従来しばしば用いられた如き該当遺跡における重要視さるべき土器をピックアップし、分類別、または編年的に図示し、解説を加えるという手法を排することとした。即ち、各グリットごとに図示し得るものをすべて拓図として示した。一見、饒舌に過ぎるとの批判もあろうが、しばしば報告者の思惟によって、出土土器の性格や遺跡相が左右されるのではないかという心配や弊害を除く上の配慮であったとして了解されたい。また平城貝塚出土遺物については、最近、土器型式編年上、多くの研究者の注目を浴びているところであり、正確にありのままを報告したいという気持ちが強かったことにも拠る。

各グリットの「拓図」について若干の補説を以下加えておきたい。

まず拓図の掲示の順は、出土レベルの上部から示している。しかし「発掘の方法」の項で述べた如く、貝層の安定していたB4、C4グリットを除くと、家屋の建築及び取り壊しの際の攪乱を受け、レベルによってにわかには土器の新旧を断定し得るところではないと考察される。

また、本報告書においては、時間的な制約を受け、出土土器についての報告のみに留めている。出土土器の「総括・考察」は、平成八年度に出版予定の『続編（仮称—以下同じ）』に委ねるとの方針にある。そこでその欠をいくらかでも補うため、今回は、「所見」の欄を生かすこととした。土器考察の上で活用してほしいと願うところである。

次いで、その「所見」の欄において用いた土器型式名について、以下極めて概説的に若干の補説を試みておきたい。

「素縄文土器」としたものは「全縄文土器」とも呼称されるもので、縄文施文が口縁部の外面及び内面と胴部に付される土器を指す。器種として深鉢・鉢形の2種がある。

「宿毛式土器」は、高知県宿毛市宿毛貝塚出土の後期前葉の土器を標式とするもので1966年（昭41）岡本健児氏によって型式設定されたものである。最近、前田光雄氏によって分類がなされている。そのうち1群7類とされたものは、南九州指宿式土器のある一群と相関しており、今後に究明さるべき課題を残している。

「平城I式土器」としたものは、1957（昭32）の鎌木義昌・西田栄両氏の「報告」^⑤で、ほぼ第1類土器及びそれに伴う土器を指し、「平城II式土器」としたものは、「報告」での、ほぼ第2類土器とそれに伴う土器を指す。このI・II式の呼称は、1976年（昭51）犬飼徹夫の論考^⑥によって成されたものとなるが、両氏の第1類土器、第2類土器に関わって、犬飼はこの時、この呼称で対象とする土器は、量的にも少ない搬入されたと考えられたものやまたそれに準ずると考えられるものを除き、あくまでも在地の土器のみを指すことを論旨の伏線として強調し

ている。その上にとって平城Ⅰ式→Ⅱ式を提示したものの、1990(平2)の西脇対名夫氏による平城Ⅱ→Ⅰ(平城式逆転編年論)は、この伏線の部分にほとんど配慮されなかったという経緯を持つ。この点について、犬飼は西脇論文への反論として、平城Ⅱ式土器の内容を提示した。^⑤「この津雲A式土器の在地化土器こそ、片粕式土器(平城上層式土器)へと発展する。」と論及している。この点については、あらためて平成八年度の「統編」において言及したい。

「平城上層式土器」としたものは、高知県土佐清水市片粕遺跡出土土器を標式とし、1975(昭50)岡本健児・木村剛朗の両氏によって設定され、西南四国ではほぼ定着した型式名とし得る片粕式土器に準じるものである。1978(昭53)犬飼徹夫は、この土器が平城貝塚にいても平城Ⅱ式土器に継ぐ土器として出土することから、「平城上層式土器」の名を採用した。^⑥今次の発掘においても同様の様相が観取されたことから、本貝塚出土土器のみこの名称を使用することとした。許容いただきたい。

「広瀬上層式土器」は、片粕式土器と伊吹町式土器とを繋ぐ土器型式として、木村剛朗氏によって、高知県幡多郡十和村広瀬遺跡出土土器を標式として設定されたものである。^⑦深鉢口縁部では、祖型の持つ波状文は消失して直線化し、胴部の横帯状の三角形、逆三角形文は細く変容し、また傾斜角も緩むなどの諸特徴を持つものである。

「伊吹町式土器」は、1957(昭32)西田栄氏によって調査された愛媛県宇和島市伊吹町遺跡出土土器を標式とする。西平式土器に比し、ナデによる調整が優先することや、暗赤褐色を呈する色調や金雲母を多量に含む胎土。また施文における沈線間や沈線内の列点の多用、磨消縄文の少なさ、器形における上げ底など、西南四国での在地性が強い土器である。^⑧

以上の土器における器種構成や復元図の提示については、他日を期して考察することとする。

(註)

- ① 岡本健児「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」『高知県小津高校研究誌5』1966
- ② 前田光雄「宿毛式、その特質」『高知県埋文センター研究紀要1』1994
- ③ 鎌木義昌・西田栄「伊予平城貝塚」御荘町教育委員会 1957
- ④ 犬飼徹夫「愛媛県平城貝塚の再評価」『考古学ジャーナル№129』1976
- ⑤ 犬飼徹夫「平城貝塚出土Ⅱ式土器の再検討」『古代吉備№15』1993
- ⑥ 柳澤清一「日本縄文後期前葉～中葉編年の再検討」『先史考古研究№5』1995のP. 23に「平城式土器逆転説、非逆転説も平城Ⅰ・Ⅱ式が実在していなければ成り立たない。問題の核心は、その序列ではなく「平城式」の内容をどう捉えるかにある」と述べられておられる。正しい指摘である。研究者によって平城Ⅰ・Ⅱの扱え方が違っては、論議に方向性を持つこととならない。平城Ⅱ式を比較的狭く扱っている筆者にとっては、なおさら氏の指摘に同感する。
- ⑦ 犬飼徹夫「平城上層式土器について」『古代文化№231』1978
- ⑧ 木村剛朗「広瀬遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』1987
- ⑨ 犬飼徹夫「西南四国の縄文土器型式研究の現状と問題点」-「伊吹町式土器」『遺跡№34』1993

(1) Aブロック (A-0、A-1、A-2、A-3グリット) からの出土土器

① A-0グリットからの出土土器 (1)

このグリットからの出土土器の点数は205を数えた。この内、拓図として図示し得るものが50点である。主体となるものは伊吹町式土器となるが、上層部から出土した図番号1の土器などが注目されよう。

第2表 A-0グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
1	浅口鉢縁	研磨、鋭利な沈線施文(連弧文)黒色	ナデの後横位条痕 灰黒色	石英粒	縄文晩期遊賀里2式併行。 その施文には、より東の手法(三叉文系)も観取され、今後の究明が必要。
2	深鉢波状口縁	口縁部RL縄文黒褐色	口縁部RL縄文縦位の短直線赤褐色	多量の金雲母	土器番号48と同系列の波状を成す素縄文土器の口縁で、波頂部に2列の縦位の短直線を付す。平城上層式の波状口縁素縄文土器
3	深鉢口縁	条痕赤褐色	条痕赤褐色	石英粒 金雲母	口縁端に左傾の短直線を付している。今回の発掘では類例が少ない。 図番号(430)参照
4	深口鉢縁	素縄文(RL)土器褐色	ナデ褐色	多量の金雲母	素縄文土器の口縁部
5	深口鉢縁	素縄文(LR)土器赤褐色	磨き赤褐色	金雲母	素縄文土器の口縁部
6	無文深鉢口縁	ヘラ磨薄黄色	磨き薄黄色	極細砂粒 長石粒	無文の平城上層式土器の口縁部
7	深胴胴部	ナデの地文に若干斜位の沈線褐色	ナデ褐色	多量の金雲母	鐘崎式土器深鉢の胴部片
8	無文深鉢口縁	ヘラ磨赤褐色	ヘラ磨赤褐色	石英粒	外反する口縁を成す無文の伊吹町式土器の口縁部
9	鉢胴部	ナデ地に沈線黒褐色	ナデ茶褐色	少量の金雲母 長石粒	伊吹町式土器の胴部
10	鉢口縁	LR縄文ナデ地に沈線明るい赤褐色	ナデ明るい赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
11	深鉢口縁	LR縄文ナデ地に沈線黒褐色	丁寧なナデ明るい赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
12	鉢波状口縁	LR縄文ナデ地に沈線黒褐色	丁寧なナデ明るい赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
13	深鉢口縁	LR縄文ナデ赤褐色	ナデ赤褐色	長石粒 石英粒	伊吹町式土器の口縁部
14	深鉢口縁	4mmの穴(貫通)ヘラ磨、RL縄文暗褐色	ヘラ磨暗褐色	少量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
15	深鉢口縁	LR縄文丁寧なナデ赤褐色	丁寧なナデ赤褐色	少量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
16	深鉢口縁	LR縄文ナデ赤褐色	ナデ赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の口縁部

第3表 A-0グリット出土土器観察表 (2)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
17	深口鉢縁	ナデ LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母	沈線の末端を折る様相が窺える。 伊吹町式土器の口縁部
18	深口鉢縁	ナデ LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
19	深口鉢縁	ナデ LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	少量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
20	深口鉢縁	ナデ LR縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の口縁部
21	無文深鉢口縁	ヘラ磨 黒褐色	ヘラ磨 黒褐色	少量の金雲母 石英粒	無文の伊吹町式土器の口縁部
22	深口鉢縁	ナデ RL縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母	沈線の末端を折る様相が窺える 伊吹町式土器の口縁部
23	無文深鉢口縁	ナデ 暗褐色	ナデ 暗褐色	多量の石英粒 金雲母 長石粒	内折する口縁部(伊吹町式土器)
24	深口鉢縁	頸部ヘラ磨 RL縄文 赤褐色	ナデ 暗褐色	金雲母	横位平行沈線間に波状沈線を挟むのは、 平城上層式のひとつの特徴であるが、伊 吹町式にも一部継承される。
25	浅腹鉢部	羽状縄文 橙褐色	ヘラ磨 橙褐色	金雲母	不鮮明で荒い羽状縄文であるが、この期 までこの様相が認められる。
26	深胴鉢部	LR縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の上腹部
27	無文深鉢口縁	下半部貝尾部に よる条痕上部そ の上をヘラ磨 橙褐色	磨き 暗褐色	多量の金雲母	口縁端部が三角形に調整された、平城 上層式の無文土器
28	深腹鉢部	磨消縄文 (LR) 黒褐色	磨き 暗褐色	金雲母 石英粒	比率的には極めて少ないものの、磨消縄 文となる伊吹町式土器
29	深口鉢縁	LR縄文 橙褐色	ヘラ磨 橙褐色	金雲母	口縁端に帯状粘土を付加せず、内折し口 縁端を丸く調整しており、平城上層式の 範疇で捉える
30	深口鉢縁	LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母	平城上層式土器の口縁部
31	深口鉢縁	LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母 石英粒	拓図には明示し得ぬが、上から3本目平 行沈線内に列点が付され、典型的な伊吹 町式土器として得る
32	深腹鉢部	LR縄文 黒褐色	ナデ 赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の胴腹部

第4表 A-0グリット出土土器観察表 (3)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
33	深鉢 上腹部	ナデ 沈線と列点 赤褐色	ナデ 赤褐色	金雲母	少破片ながら、伊吹町式土器の頸部から腹部へと移る屈折部の列点が観取される
34	底部	凸凹が多く荒い 調整 黒褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母	若干の上げ底を呈し、伊吹町式土器乃至、平城上層式土器の底部とし得る
35	底部	ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の底部
36	底部	ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の底部
37	深鉢 下腹部	L R縄文 黒褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の下腹部
38	深鉢 口縁部	L R縄文 明るい赤褐色	円滑なナデ 明るい赤褐色	金雲母 石英粒	伊吹町式土器の腹部施文で、平行直線の末端を下に折る手法が簡略化、単純化されている。
39	深鉢 口縁部	R L縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	多量の金雲母 石英粒	平城上層式土器の口縁部
40	深鉢 口縁部	R L縄文 黒褐色	磨き 黒褐色	金雲母	平城上層式土器の口縁部
41	深鉢 口縁部	L R縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	金雲母	伊吹町式土器の口縁部
42	深鉢 上腹部	ナデ L R縄文 赤褐色	磨き 暗褐色	金雲母 石英粒	伊吹町式土器の頸部と上腹部
43	深鉢 口縁部	ナデ L R縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	金雲母 石英粒	伊吹町式土器の口縁部
44	浅鉢 口縁部	ナデ 硬いR L縄文 褐色	ナデ 褐色	金雲母	平城式土器に伴う素縄文土器の口縁部
45	深胴 鉢部	羽状縄文 赤褐色	ヘラ磨 赤褐色	金雲母	羽状縄文を胴部を持つ素縄文土器
46	深鉢 上腹部	L R縄文 赤褐色	ヘラ磨 赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の上腹部
47	深鉢 上腹部	L R縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の上腹部
48	深鉢 波状口縁部	口縁部L R縄文 橙色	ナデ 橙色	多量の石英粒 金雲母	土器番号2と同系列の波状を成す素縄文の口縁で、波頂部頂面に径1cmの盲孔を付す
49	深鉢 下腹部	L R縄文 黒褐色	ナデ 橙色	多量の金雲母	伊吹町式土器の下腹部
50	深胴 鉢部	R L縄文 灰褐色	ナデ 灰褐色	多量の石英粒 金雲母	素縄文土器の胴部

② A-1グリットからの出土土器

このグリットからの出土土器の点数は153点を数えた。この内、拓図として図示し得るものが42点である。

第5表 A-1グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
51	鉢 口縁 上腹部	ヘラ磨(頸部) LR縄文 暗褐色	ヘラ磨 赤褐色	金 雲 母 石 英 粒	平縁の鉢形土器(口縁直径48cm)口縁2 條沈線を付す平縁の西平式土器、腹部の 一施文が特徴
52	無文深鉢 口縁	ヘラ磨痕を残す 橙色	ヘラ磨 赤褐色	多量の金雲母	口縁部が内折し、端部が丸味をもつよう に調整された平城Ⅲ式土器の無文土器
53	無文深鉢 口縁	擦痕を残す 茶褐色	ナデ 茶褐色	金 雲 母 石 英 粒	外反する口縁となる平城Ⅲ式の無文土器
54	無文深鉢 口縁	器上部は擦痕、 下部は凸凹が激 しい 暗褐色	ナデ 橙色	金 雲 母 石 英 粒	外反する口縁、端部を丸く調整。 平城上層式の無文土器
55	深鉢 口縁	ヘラ磨 茶褐色	ナデ 茶褐色	金 雲 母	伊吹町式土器の口縁部
56	深胴 鉢部	LR縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	石 英 粒	伊吹町式土器の胴部
57	無文深鉢 口縁	磨き 茶褐色	ヘラ磨 茶褐色	石 英 粒	断面三角形の口縁端部をもつ伊吹町式 の無文土器
58	深胴 鉢部	RL縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の石英粒	伊吹町式土器の胴部
59	無文深鉢 口縁	条痕 茶褐色	ナデ 茶褐色	金 雲 母 石 英 粒 長 石 粒	器壁が薄く、大きく外反する伊吹町式 の無文土器
60	無文深鉢 口縁	磨き 茶褐色	ナデ 茶褐色	金 雲 母 石 英 粒	伊吹町式の無文土器(断面三角形口縁端)
61	鉢 腹部	RL縄文 (下部ナデ) 茶褐色	ナデ 灰褐色	多量の金雲母 石 英 粒	平城上層式土器の腹部
62	無文深鉢 口縁	ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の金雲母 石 英 粒	口縁を内折し、端部を丸く調整した平城 上層式の無文土器
63	深胴 鉢部	LR縄文 橙色	横ヘラ磨 橙色	多量の石英粒	平城上層式土器の上胴部
64	深胴 鉢部	LR縄文 黒褐色	ナデ 橙色	多量の金雲母	垂下する連続曲線文は、平城Ⅲ式土器胴 部文様のひとつのモチーフである
65	深鉢 波状口縁	LR縄文 (下部ナデ) 暗褐色	ナデ 橙色	金 雲 母	伊吹町式の範疇で把えることも可能であ るが、波長部先端の2個の米粒状施文の 押圧はV字状切り込みの粗形となること や、平城上層式のS字付文からの系譜が 認められることから、両者の移行期とさ れる西南四国の広瀬上層式土器とする

第6表 A-1グリット出土土器観察表 (2)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
67	深鉢 波状口縁	ナデ LR縄文 橙色	ナデ 橙色	金雲母 長石粒	広瀬上層式土器波状口縁深鉢の口縁部
68	深口 鉢縁	ナデ RL縄文 暗褐色	ナデ 暗褐色	金雲母	平城上層式土器の口縁部
69	深鉢 波状口縁	ナデ LR縄文 暗褐色	ナデ 暗褐色	金雲母 石英粒	口縁下でくの字状に内折し、頸部は弓状に外反する平城上層式の深鉢・波状口縁の波頂部に蛇行状の粘土紐貼布がなされる。
70	深鉢 波状口縁	ナデ 顔料(朱) 赤褐色	ナデ 赤褐色	金雲母 石英粒	同上
71	深鉢 波状口縁	ナデ LR縄文 橙色	ナデ 暗褐色	多量の金雲母 石英粒	波頂部が低く広瀬上層式の範疇で抱えられる。
72	深口 鉢縁	ナデ LR縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の石英粒	拓図には図示し得ぬが、2線目の沈線内に列点が付され、伊吹町式土器の特徴を持つ
73	深口 鉢縁	ナデ LR縄文 灰褐色	ナデ 灰褐色	石英粒	縁帯部が伊吹町式より広く、4本の沈線が横走する。 平城上層式土器の口縁部
74	深胴 鉢部	LR縄文地に斜 行沈線 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の金雲母	平城上層式土器の胴部。図番号68の胴部と考えられる。
76	無文深鉢 口縁	ナデ 赤褐色	ナデ 灰褐色	石英粒	器壁が薄く、大きく外反し、端部外面を調整した伊吹町式の無文土器
77	深口 鉢縁	ナデ LR縄文 明るい朱色	ナデ 明るい朱色	多量の金雲母	口縁の沈線の末端を丸くおさめて左右に対向させ、口縁端部内面の直下に押引状の刺突を施す手法は、広瀬上層式の特徴である。
78	深胴 鉢部	ナデ LR縄文 暗褐色	ナデ 暗褐色	多量の金雲母	広瀬上層式の胴部。平城上層式の胴部の斜行沈線の傾斜より緩く、縦位の短直線はあとで付される。
79	深胴 鉢部	ナデ RL縄文 黄褐色	ナデ 黄褐色	多量の石英粒	平城上層式土器の胴部
80	深胴 鉢部	ヘラ磨 暗灰色	ヘラ磨 褐色	金雲母 石英粒	鎌崎式III期の精製深鉢の胴部
81	深胴 鉢部	ナデ LR縄文 黄褐色	ナデ 黄褐色	石英粒	平城上層式土器の胴部
82	深胴 鉢部	素縄文(羽状) 土器 灰色	磨き 黒褐色	多量の石英粒	波状縄文土器の胴部

第7表 A-1 グリット出土土器観察表 (3)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎 土	所 見
		外 側	内 側		
83	深 鉢 胴 部	素縄文 (RL) 土器 ヘラ磨 黄褐色	ナデ 黄褐色	多量の石英粒	
85	深 鉢 胴 部	LR縄文 暗褐色	ナデ 黒褐色	金 雲 母	広瀬上層式土器の胴部
86	深 鉢 口 縁 部	LR縄文 橙褐色	ヘラ磨 橙褐色	金 雲 母	広瀬上層式土器の口縁部
87	深 鉢 胴 部	LR縄文 赤褐色	ヘラ磨 暗褐色	金 雲 母 石 英 粒	平城上層式土器の胴部
88	浅 鉢 口 縁 部	RL縄文 暗灰色	ナデ 暗灰色	石 英 粒	伊吹町式の浅鉢の口縁部
90	深 鉢 口 縁 部	LR縄文 暗茶色	ナデ 褐色	金 雲 母	伊吹町式土器の口縁部
91	深 鉢 口 縁 部	素縄文 (RL) 土器 ヘラ磨 (頸部) 茶褐色	ヘラ磨 茶褐色	石 英 粒	
92	底 部	ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	長 石 石 英 粒	伊吹町式土器の底部
93	底 部	ヘラ磨 (横走) 赤褐色	ヘラ磨 赤褐色	長 石 石 英 粒	伊吹町式乃至平城上層式土器の底部
94	底 部	ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	長 金 石 雲 母 粒	伊吹町式土器の底部
95	底 部	ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	金 雲 母 石 英 粒	伊吹町式乃至平城上層式土器の底部
96	底 部	ナデ 朱色	ナデ 朱色	金 雲 母 石 英 粒	伊吹町式乃至平城上層式土器の底部

③ A2・A3グリットからの出土土器

A2グリットからは232点の出土土器を数えたが、この内、図示し得たものが39点(図番号98~139のうち132・133を除く)である。A3グリットからは、わずか2点の出土(図番号132・133)であった。注目すべき土器として貝層部分の下部の暗茶褐色シルト層からの中津式土器(図番号127)、北白川C式4期土器(132)、船元3式土器(131)が挙げられる。

第8表 A2・A3グリット出土土器観察表(1)

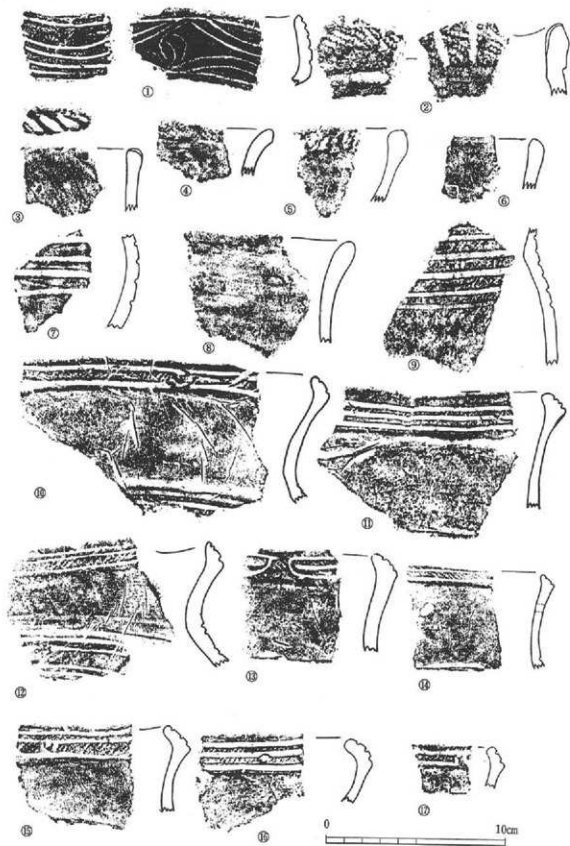
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
98	深口鉢 緑	素縄文(LR)土器 ヘラ磨(頸部) 橙色	ヘラ磨 橙色	多量の石英粒	典型的な伊吹町式土器の器形で、素縄文土器となるものが存在することが知れる。恐らくヘラ磨の頸部の下部にも素縄文が付される。
99	深口鉢 緑	素縄文(LR)土器 ナデ(頸部) 明るい橙色	ナデ 明るい橙色	多量の石英粒	口縁端部を肥厚させて縄文帯とし、下に段を持って、頸部ナデとする素縄文土器。平城上層式土器に伴う。
100	無文深鉢 口緑	条痕とナデ 凸凹を残す 黒褐色	条痕 黒褐色	多量の金雲母 石英粒	伊吹町式土器に伴う外反の無文土器
101	無文深鉢 口緑	ナデ 灰黒色	ナデ 灰黒色	金雲母 石英粒	伊吹町式土器に伴う外反の無文土器
102	深口鉢 緑	RL縄文 固いヘラ磨(頸部) 茶褐色	ナデ 灰黒色	石英粒	伊吹町式土器の口縁部
103	深胴 鉢部	LR縄文 暗褐色	ナデ 黒褐色	金雲母 石英粒	横位の平行沈線間に波状沈線を加する手法は、平城上層式の特徴であるが、波状沈線に連結する添加施文の様相から伊吹町式の範疇で扱いたい。
104	無文深鉢 口緑	ナデ (凸凹あり) 灰黒色	ヘラ磨 灰黒色	多量の金雲母 石英粒	厚手で外反する平城上層式に伴う無文土器
105	深鉢 波状口縁	条痕 赤褐色	磨き 赤褐色	多量の石英粒 金雲母	平城上層式に伴う粗製の波状口縁土器
106	無文深鉢 口緑	磨き 赤褐色	磨き 赤褐色	細かい胎土 多量の金雲母	平城上層式に伴う無文土器
107	深胴 鉢部	RL縄文 (磨消) 黒褐色	ナデ 黒褐色	多量の金雲母 石英粒	伊吹町式土器の胴部(磨消縄文)
108	深胴 鉢部	LR縄文 (磨消) 茶褐色	ヘラ磨 茶褐色	多量の金雲母 石英粒 長石	同上
109	深胴 鉢部	RL縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の金雲母 石英粒	広瀬上層式土器の胴部
110	深胴 鉢部	LR縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の金雲母 石英粒	平城上層式土器の胴部
111	深胴 鉢部	LR縄文 黒褐色	ナデ 黒褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の胴部
112	深胴 鉢部	LR縄文 橙色	ナデ 橙色	多量の金雲母	伊吹町式土器の胴部
113	深胴 鉢部	研磨地に沈線 灰褐色	ナデ 灰褐色	多量の石英粒 金雲母 長石	鐘崎III期土器の胴部

第9表 A-2・A-3グリット出土土器観察表 (2)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
114	深鉢部	R L 縄文 暗褐色	ナデ 茶褐色	金雲母	広瀬上層式土器の胴部
115	深鉢部	L R 縄文 茶褐色	ナデ 灰褐色	石英粒 金雲母	広瀬上層式土器の胴部
116	深口鉢縁	R L 縄文 (口縁部) 朱色	R L 縄文 (口縁裏面) 朱色	多量の金雲母	口縁部の先端が先細りとなり、内面にも縄文を付すものは、素縄文土器でも後出のものであり、平城上層式に伴う。
117	深波状口縁	R L 縄文 朱色	ナデ 朱色	石英粒 金雲母	緑帯部の下方で段を持ち、強く外反する深鉢、2本の横位沈線下に列点を付した平城上層式の口縁部。この手法は後続する広瀬上層式に踏襲される。
118	深鉢部	L R 縄文 (部分磨消) 黄褐色	ナデ 黄褐色	多量の金雲母	平城上層式土器の胴部。恐らく図番号69系列の口縁部に対応していると考えられる。
119	浅口鉢縁	L R 縄文 (部分磨消) 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の石英粒	平城上層式の浅鉢
120	深口鉢縁	ナデ 暗灰色	R L 縄文 ナデ 暗灰色	石英粒 金雲母	口縁部内面に縄文と沈線が直線で全周すると考えられる。広義の彦崎K2の古段階(岡大IV群土器)に比定し得よう。広域的な視点から重要である。
121	深鉢部	羽状縄文 朱色	ナデ 朱色	多量の金雲母 石英粒	素縄文土器の胴部
122	深鉢部	凸凹の激しい 横ナデ 灰暗色	ナデ 灰暗色	多量の金雲母 石英粒	器壁の薄い無文土器(粗製)
123	鉢部	R L 縄文 朱色	ナデ 灰暗色	多量の金雲母 石英粒	素縄文土器の胴部
124	深波状口縁	L R 縄文 朱色	ナデ 朱色	極めて細粒の 金雲母	頸部で強く外反する平城上層式土器の口縁部。波頂部に蛇行状の粘土紐貼布を付す。
125	深ゆるい波状口縁	L R 縄文 朱色	ナデ 朱色	石英粒 金雲母 長石	口縁端を丸く納める平城上層式の口縁部
126	深波状口縁	R L 縄文 朱色に近い赤褐色	R L 縄文 ナデの後、横位 条痕 赤褐色	金雲母 長石 石英粒	平城I式土器の口縁部。山形突起に巻き付けた状態に沈線が施され、その集約部外面に刺突状施文が添加されていることから、この部分のみで独立した施文となる。
127	深口鉢縁	ナデ 斜行押し引き 褐色	ナデ 暗褐色	石英粒 金雲母	鎌木・西田によって第4類土器として分類されたものの中の一群の土器で、九州側との相関が説かれている。
128	深口鉢縁	ナデ 橙色	ナデ 橙色	細かい胎土 金雲母 石英粒	口縁端を外側に肥厚させ、そこに刻み目を付す手法は平城上層式の粗製土器の範疇とし得る。
129	深鉢部	ナデ後条痕 茶褐色	巻員の尾部による 条痕 灰暗色	多量の金雲母	文様を形成する沈線は、幾度もナゾリが行われ太くて深い。中津式土器の範疇で扱えられる。

第10表 A-2・A-3 グリット出土土器観察表 (3)

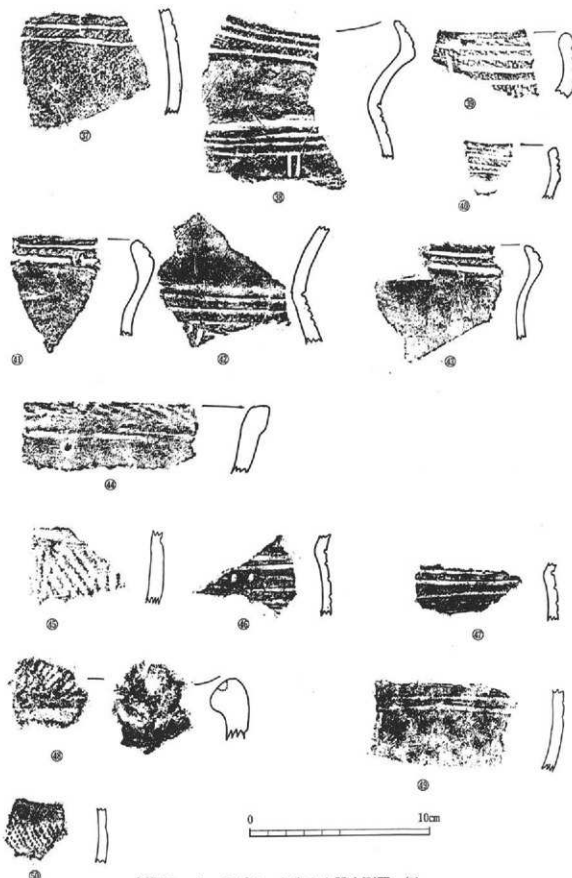
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
130	底部	ナデ 茶褐色	ナデ 黒褐色	石英 金雲母	平城上層式土器の底部
131	深胴 鉢部	竹管施文 暗灰色	ナデ 暗灰色	多量の石英粒 赤色チャート	竹管様工具によって細い沈線を多用する 縄文中期船元3式土器の範疇で捉えられる。 隆帯に沿っての施文が窺える。
132	深口 鉢縁	L R縄文 (ところどころ 赤色顔料) 暗黒色	ナデ 暗黒色	石英 金雲母	頸部でゆるやかに外反し底部にすぼまる 器形が想定される。中期末、北白川C式 4期の土器
133	底部	ナデ 朱色	ナデ 朱色	石英 金雲母	伊吹町式土器の底部
134	無文深鉢 胴部	横位の条痕 茶褐色	ナデ 暗灰色	石英 石	伊吹町式の無文土器
135	深口 鉢縁	口縁部 R L縄文 朱	ナデ 暗黒色	石英 金雲母	口縁部外側を肥厚させて縄文を付し、頸 部無文で、胴部を縄文を付す。平城上層 式の素縄文土器
136	深 ゆるい 波状口縁	L R縄文 明るい赤褐色	ナデ 赤褐色	細かい胎土 金雲母 石英	平城上層式土器の口縁部
137	深口 鉢縁	R L縄文 (磨消) 茶褐色	ナデ 茶褐色	石英 金雲母	平城上層式の深鉢形土器では、その類例 が少ない磨消縄文が付されたもの。
138	深胴 鉢部	L R縄文 明るい赤褐色	ナデ 赤褐色	細かい胎土 金雲母 石英	図番号136の胴部を成すものと考えられる。
139	深胴 鉢部	L R縄文 朱色	横走する条痕 黒褐色	石英 金雲母	平城上層式土器の胴部



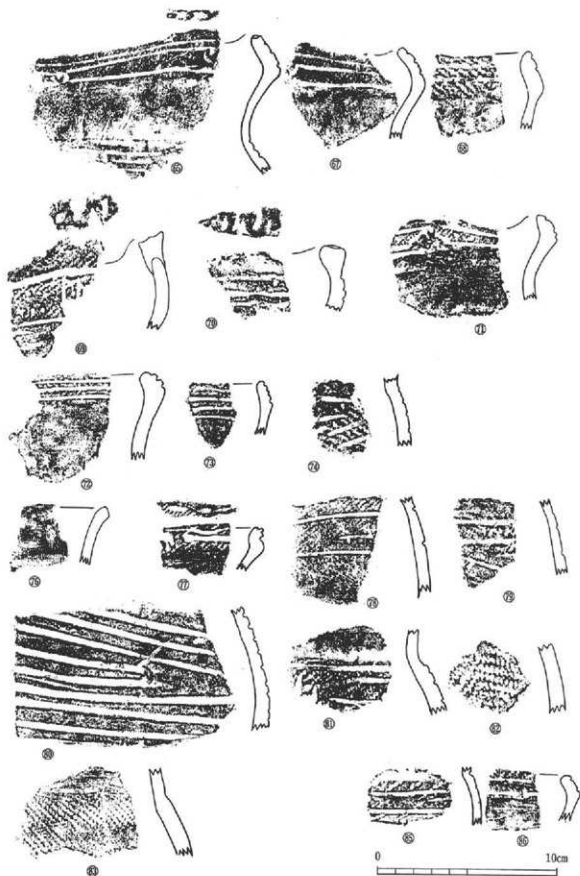
挿図7 A-0グリット出土土器実測図 (1)



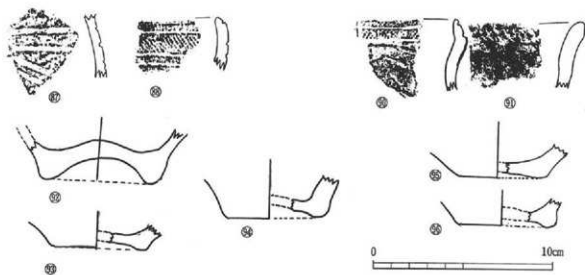
挿図8 A-0グリット出土土器実測図(2)



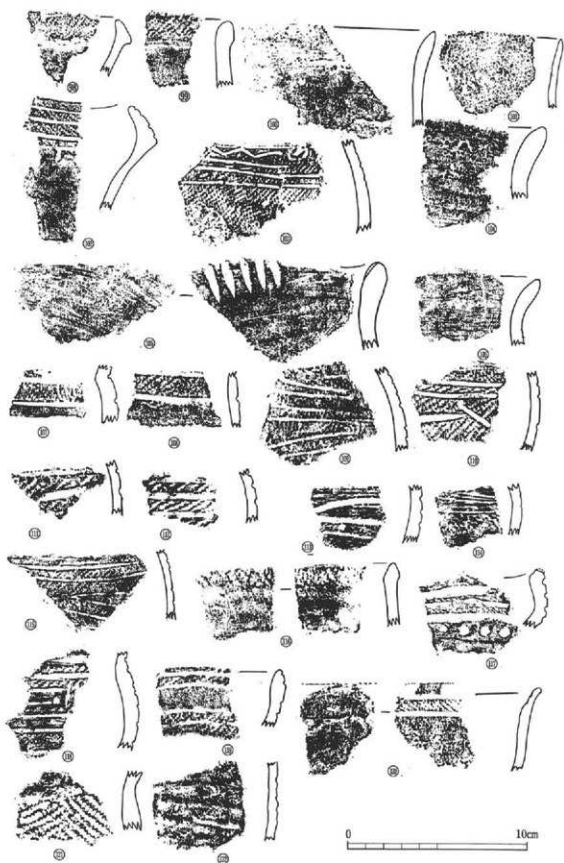
挿図9 A-0グリット出土土器実測図 (3)



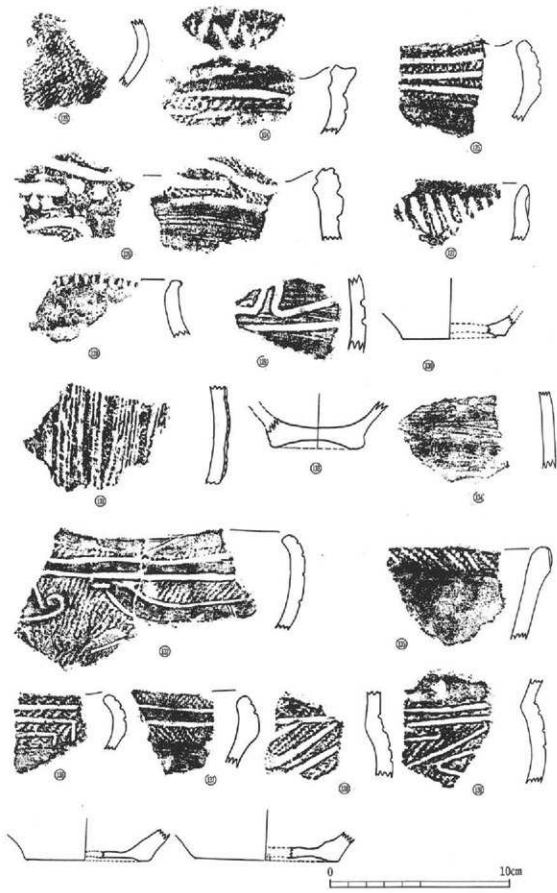
挿図11 A-1グリット出土土器実測図 (2)



挿図12 A-1グリット出土土器実測図 (3)



挿図13 A-2グリット出土土器実測図 (1)



挿図14 A-2 A-3グリット出土土器実測図 (2)

(2) Bブロック (B-0、B-1、B-2、B-3、B-4グリット) からの出土土器

① B-0グリットからの出土土器

出土土器点数は135点を数えた。この内、拓図として図示し得たのは38点である。

第11表 B-0グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
140	深鉢 口縁 (上胴部)	端正なヘラ磨 明るい赤褐色	端正なヘラ磨 赤褐色	石英粒 長石 金雲母	口径約30cm程の大型の伊吹町式土器。上胴部に3本、中胴部に3本の平行沈線、これを繋ぐ \curvearrowright の添加要素が観取できる。
141	深鉢 口縁	LR縄文 ナデ(頸部) 茶褐色	ナデ 茶褐色	金雲母 長石	沈線間を列点で飾る手法は、伊吹町式土器のひとつの特色である。
142	浅鉢 口縁	ナデ 黄褐色	ナデ 黄褐色	多量の長石粒	伊吹町式の浅鉢土器 (平城上層式よりさらに口縁が湾曲する)
143	浅鉢 口縁	ヘラ磨 暗茶色	ナデ 暗茶色	金雲母	同上
144	深鉢 口縁	ヘラ磨 茶褐色	ヘラ磨 茶褐色	金雲母	伊吹町式土器の口縁部
145	深鉢 口縁	LR縄文 ナデ 朱色	ナデ 朱色	金雲母	平城上層式土器の口縁部
146	深鉢 ゆるい 波状口縁	LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	石英粒	広瀬上層式土器の口縁部 (波頂部に米粒状の2つの押点)
147	浅鉢 口縁	無文(ナデ)の 浅鉢 赤褐色	ナデ 赤褐色	石英粒	伊吹町式土器の口縁部
148	深鉢 口縁	LR縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	金雲母 石英粒	伊吹町式土器の口縁部
149	深鉢 波状口縁	LR縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	金雲母 石英粒	平城上層式土器の口縁部。波状口縁の文様集約部。蛇行状の貼布や規格状の文様で特色づけられる。
150	深鉢 口縁	RL縄文 ナデ(頸部) 暗褐色	ナデ 暗褐色	多量の金雲母 石英粒	伊吹町式土器の口縁部
151	無文深鉢 口縁	ナデの後磨き 朱色	ナデ 朱色	石英粒	伊吹町式の無文土器の口縁部
152	深鉢 口縁	RL縄文 ナデ 朱色	条痕 朱色	多量の金雲母	平城上層式の素縄文土器の口縁部
153	深鉢 口縁	ヘラ磨の後に沈 線 灰褐色	ヘラ磨 灰褐色	金雲母	図番号1の土器とともに、今回の出土土器の中で明確に縄文晩期の土器とし得る。九州側で、御領式の系列にある古閑式土器の範疇で扱えられる。
154	無文深鉢 口縁	ナデ 灰褐色	ナデ 灰褐色	金雲母	平城上層式の無文土器

第12表 B-0 グリット出土土器観察表 (2)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
155	深鉢 口縁	ナデ 灰暗色	研磨 灰暗色	多量の金雲母	口縁端部を断面三角形形状に調査した伊吹町式の無文土器
156	浅腹鉢 鉢部	ナデの地に沈線 灰暗色	ナデ 灰暗色	金雲母	伊吹町式の浅鉢の腹部
157	無文深鉢 口縁	ナデ 茶褐色	ナデ 黒褐色	石英粒 金雲母 長石	伊吹町式の無文土器
158	浅腹鉢 鉢部	ナデ地に沈線 赤褐色	ナデ 灰暗色	石英粒 金雲母	伊吹町式の浅鉢の腹部
159	深腹鉢 鉢部	LR縄文 朱色	研磨 朱色	石英粒 金雲母	広瀬上層式土器の胴部
160	深胴鉢 鉢部	RL縄文(0段 3条) 灰暗色	ナデ 灰暗色	細かい胎土 多量の金雲母	伊吹町式土器の下胴部
161	深胴鉢 鉢部	研磨地に沈線 黒褐色	研磨 黒褐色	金雲母 石英粒	広瀬上層式土器の胴部
162	深胴鉢 鉢部	LR縄文 下部ナデ 灰暗色	ナデ 灰暗色	石英粒 金雲母	伊吹町式土器の胴部
163	深胴鉢 鉢部	LR縄文 黒褐色	ナデ 黒褐色	金雲母 石英粒	広瀬上層式土器の胴部
164	深胴鉢 鉢部	LR縄文 下部ナデ 明るい赤褐色	ナデ 明るい赤褐色	細かい金雲母 石英粒 長石	伊吹町式土器の胴部
165	深胴鉢 鉢部	LR縄文 黒褐色	ナデ 朱色	金雲母	伊吹町式土器の胴部
166	浅腹鉢 鉢部	RL縄文 磨消(研磨) 灰暗色	ナデ 灰暗色	多量の金雲母	平城上層式土器(浅鉢)の腹部
167	深上胴鉢 鉢部	ナデ 灰暗色	ナデ 灰暗色	金雲母	伊吹町式土器の上胴部
168	深胴鉢 鉢部	RL縄文 朱色	ナデ 朱色	多量の石英粒 金雲母	伊吹町式土器の胴部
169	深胴鉢 鉢部	羽状縄文 明るい赤褐色	ナデ 灰暗色	多量の金雲母 石英粒	素縄文土器の胴部
170	深胴鉢 鉢部	LR縄文 黒褐色	ヘラ磨 黒褐色	多量の石英粒	伊吹町式土器の胴部 平行沈線に併走する波線は、伊吹町式土器のひとつの特徴である。

第13表 B-0グリット出土土器観察表 (3)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎 土			所 見
		外 側	内 側				
171	深 鉢 胴 部	羽状縄文 朱色	ナデ 朱色	金 石	雲 英	母 粒	素縄文土器の胴部
172	深 鉢 上 胴 部	RL縄文 朱色	ナデ 朱色	金 石	雲 英	母 粒 とも 少量	広瀬上層式土器の上胴部
173	浅 鉢 口 縁 部	口縁部は研磨調 整 RL縄文 灰暗色	ナデ 灰暗色	金 石	雲 英	母 粒	伊吹町式の浅鉢の口縁部
174	深 鉢 上 胴 部	縄文を持たず研 磨地に沈線 橙色	ナデ 橙色	石 金	英 雲	粒 母	研磨地に沈線を横走する手法は、伊吹町式としては後出的様相として扱えられるが、今後の究明が必要となる。
175	底 部	ナデ 朱色	朱色	石	英	粒	平城上層式土器の底部
176	底 部	ナデ 灰暗色	灰暗色	石 金	英 雲	粒 母	上げ底の様相から伊吹町式土器の底部
177	底 部	ナデ 朱色	朱色	石 金	英 雲	粒 母	同上

② B-1・B-2グリットからの出土土器

B-1グリットからは18点の出土点数であった。この内、6点(図番号179~184)を図示する。
また、B2グリットからは54点の出土点数であった。この内11点(図番号185~195)を図示する。
なおB3グリットは、完全に破壊され遺物の採集はない。

第14表 B-1・B-2グリット出土土器観察表

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
179	深鉢口縁	L R縄文 ナデ(頸部) 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
180	深鉢口縁	R L縄文 ナデ 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の石英粒	口縁部の外面に肥厚部を作成し、そこに縄文を付す素縄文土器の口縁部。平城上層式に伴う。
181	深鉢上胴部	R L縄文 条痕(頸部) 灰暗色	条痕 灰暗色	石英粒	素縄文土器の上胴部
182	深鉢胴部	ナデ地に沈線 明るい橙色	ナデ 橙色	多量の金雲母	伊吹町式土器の胴部 (縄文地を持たず、ナデ地に沈線を付すものとして注目したい。)
183	深鉢胴部	羽状縄文 朱色	ナデ 朱色	多量の石英粒 金雲母	素縄文(羽状)土器の胴部
184	深鉢口縁	R L縄文 ナデ(下部) 朱色	ナデ 朱色	石英粒	図番号180の如く、器外面の肥厚部に沈線を横走させ、下部と区画する。
185	深鉢口縁	L R縄文 ナデ(下部) 朱色	条痕 朱色	多量の金雲母 石英粒	素縄文土器の口縁部、外反し端部を調整するこの手法は、平城Ⅲ式乃至平城上層式に併出する。
186	深鉢波状口縁	R L縄文 ナデ(下部) 朱色	ナデ 朱色	金雲母 石英粒	口縁外面に縄文、内面に円状の押しきり点文(図版参照)が付される平城上層式の深鉢。南九州の北久根山Ⅱ期との相関が強い。
187	深鉢胴部	L R縄文 朱色	ナデ 朱色	多量の金雲母	素縄文土器の胴部片
188	深鉢ゆるい波状口縁	R L縄文 ナデ(下部) 暗褐色	ナデ 暗褐色	細かい胎土 金雲母 石英粒	外反する深鉢形土器で、図番号186と同様の手法が窺える。
189	深鉢口縁	L R縄文 ナデ(下部) 灰暗色	磨き 黄褐色	石英粒 金雲母	図番号180に準じる手法を持つ。
190	深鉢口縁	L R縄文 朱色	L R縄文 朱色	黄褐色 長	外反する器形で、先端をやや尖がらせ、表裏に縄文を持つ素縄文土器
191	深鉢口縁	ナデ地に沈線 淡い朱色	ナデ 淡い朱色	多量の石英粒 金雲母	混貝土層下部からの出土であるが、この期に、鐘崎式の終末期の土器が客体として混在することを示唆する。
192	深鉢ゆるい波状口縁	L R縄文 ナデ(頸部) 暗茶色	ナデ 暗茶色	多量の金雲母 石英粒	波長部が緩やかで広瀬上層式の範疇でも扱える得るが、広瀬のそれは大きく湾曲し、頸部にまで縄文地が広がる。ここでは、伊吹町式土器とする。
193	浅鉢口縁	R L縄文 研磨 黄褐色	磨き 黄褐色	石英粒 長石	施文は竹管ではない。斜行の2本の平行沈線でデザインされている。平城上層式の浅鉢口縁部
194	浅鉢口縁	R L縄文 へら磨(腹部) 黒褐色	磨き 橙色	細かい金雲母 石英粒	口縁の湾曲の形態から平城上層式の浅鉢とする。
195	深鉢胴部	L R縄文 黒褐色	ナデ 黒褐色	多量の金雲母 石英粒	斜行沈線に囲まれた空間にS字状文を付す平城上層式の胴部

③ B4グリットからの出土土器

貝層は安定しており、分層発掘が成されたグリットである。(挿図6のB4区西壁参照) I層(表土)、IIa層(黒褐色混貝土層-崩壊した小貝片)には土器の出土はなく、IIb層(黒褐色混貝土層)以下から出土した。IIb層から9点を拓図に示している。(図番号176~204) IIc層(純貝層)からは21点を示した。(図番号205~255)。II d層(黒褐色混貝土層)は、円礫を敷く骨層で形成され、土器の出土を見ていない。他のグリットで認められるIII層をこのグリットでは欠き、つづくIV a層(赤茶褐色混貝土層)上面から16点が図示し得た。(図番号226~241)、IV a層中から2点(図番号242~243)、IV b層(赤褐色砂質シルト層)から1点(図番号244) IV c層(明褐色砂質シルト)から1点(図番号245)、V層(黄褐色砂質シルト)から1点(図番号246)が出土した。このグリットからの出土土器総点数は343点である。

第15表 B-4グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土		所見
		外側	内側			
196	鉢 口縁～ 腹部	R L縄文 軟かい磨き 黒褐色	ヘラ磨 黒褐色	長石 金	石英 粒 母	伊吹町式の素縄文土器の腹部に福岡県四箇遺跡で見られる階段状の施文を持つ土器で、黒崎貝塚第II類土器に対比される。今後の究明が必要であろう。
197	無文鉢 口縁	(口唇 R L縄文) 横位磨き 黒褐色	条痕 灰褐色	金	雲母	伊吹町式の素縄文精製鉢
198	深口鉢 口縁	L R縄文 横ナデ(頸部) 暗茶褐色	L R縄文 条痕 暗茶褐色	金	雲母	伊吹町式の縄文土器口縁部。(口唇部ナデ)平城上層式からの系譜を持ち(図番号99)口縁外面肥厚部下に沈線を付す。
199	深口鉢 口縁	R L縄文 ナデ 赤褐色	ナデ 黒褐色	金	雲母	伊吹町式の素縄文土器。図番号99参照。
200	鉢 口縁	R L縄文 ヘラ磨(頸部) 赤褐色	ヘラ磨 暗褐色	チャート 長石	石英	伊吹町式の素縄文精製鉢
201	深胴鉢 胴部	ヘナタリ擬縄文 巻貝条痕 黒褐色	横位削り 黒褐色	チャート 長石	石英 母	胴最大径の部位に R L 方向のヘナタリ擬縄文、その下部は縦位の巻貝条痕。瀬戸内の彦崎 K II 式と相関する伊吹町式土器とする。
202	深胴鉢 胴部	羽状縄文 茶褐色	ヘラ磨 黒褐色	金	雲母	素縄文土器の胴部片
203	深口鉢 口縁	R L縄文 ヘラ磨 橙褐色	R L縄文 横位巻貝条痕 黒褐色	金	雲母	伊吹町式の素縄文土器の口縁部
204	底部	ナデ 橙褐色	軟かい磨き 黒灰色	石 金	石英 粒 母	弱い凹底を呈する。
205	深口鉢 口縁	L R縄文 ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	チャート 長石	石英	素縄文土器の口縁部

第16表 B-4 グリット出土土器観察表 (2)

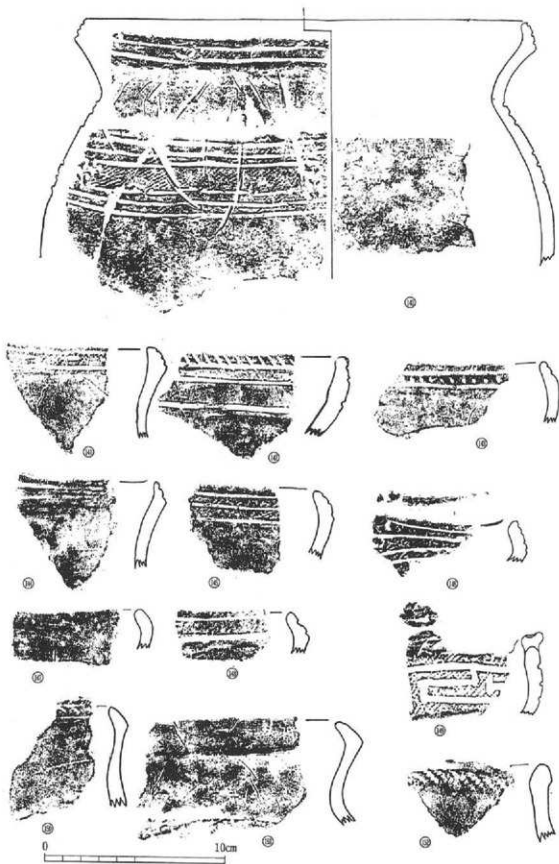
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見	
		外側	内側			
206	深口鉢縁	横ナデ 明るい赤褐色	ナデ 明るい赤褐色	石長 英雲	粒石 石母	鎌木、西田報告での第4類土器 (巻目による押しき沈線)
207	深口鉢縁	L R縄文 丁寧なナデ (頸部) 橙褐色	ナデ 橙褐色	石長	英粒 石	素縄文土器。口唇面上にもL R縄文を付す。
208	深胴鉢部	羽状縄文 橙褐色	ナデ 橙褐色	長	石	素縄文土器の胴部
209	深上胴部	(頸部) ナデ L R縄文 橙褐色	ナデ 橙褐色	石長	英粒 石	素縄文土器の上胴部
210	深上胴部	(頸部ナデ) 羽状縄文 橙褐色	軟かい磨き 橙褐色	チャート 石長	英粒 石	素縄文土器の上胴部
211	深胴鉢部	羽状縄文 茶褐色	軟かい磨き 灰褐色	石長	英粒 石	素縄文土器の上胴部
212	深胴鉢部	R L縄文 (磨消) 黒褐色	条痕 明るい橙褐色	石長 金雲	英粒 石母	平城上層式土器の範疇で扱えられるが、 縄文地の反転がなされておらず、今後、 究明が必要になる。
213	深胴鉢部	軟かい磨きの地 文 黒褐色	ナデ 黒褐色	石長	英粒 石	鐘崎III期の深鉢 (精製) の胴部
214	深胴鉢部	L R縄文 (磨消) 明るい橙褐色	ナデ 明るい橙褐色	石長	英粒 石	伊吹町式土器の範疇で扱えられるが、磨 消縄文であること、小破片であることか ら、今後の究明が必要である。
215	無文浅鉢胴部	磨き 橙褐色	磨き 橙褐色	長金	石雲 母	精製無文浅鉢の胴部
216	無文深鉢下胴部	削り 灰褐色	荒いナデ 黄褐色	花崗岩 長金雲	片石 石母	無文深鉢の下胴部
217	底部	軟かい磨き 赤褐色	軟かい磨き 黒褐色	長石	石英	精製鉢か浅鉢の底部
218	底部	ナデ 茶褐色	ナデ 黒褐色	長石 チャート	石英 ト	深鉢の底部
219	鉢口縁部	R L縄文 ヘラ磨 赤褐色	ヘラ磨 黒褐色	長	石	外反した端部に縄文を付す素縄文の精製 鉢形土器
220	深口鉢縁	L R縄文 ナデ (頸部)	ナデ	長石	石英	素縄文深鉢形土器の口縁

第17表 B-4 グリット出土土器観察表 (3)

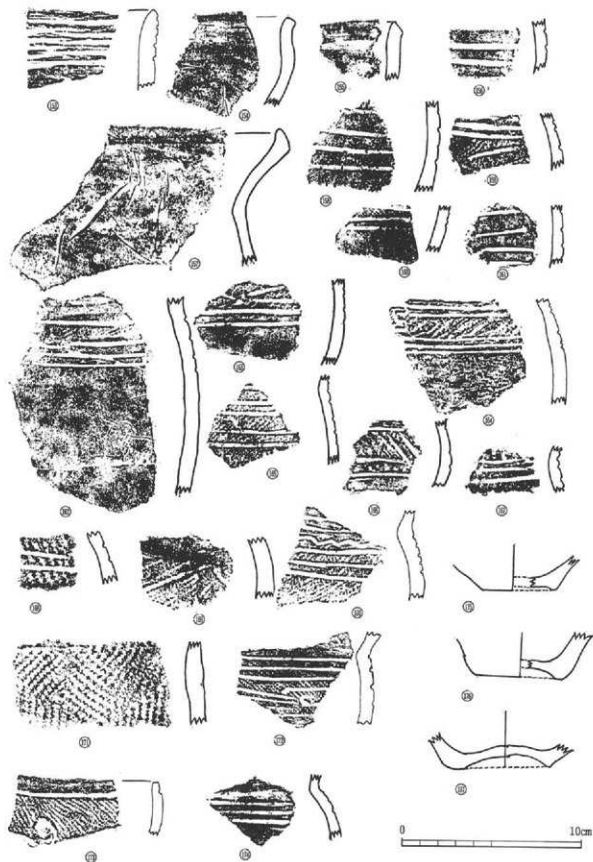
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見	
		外側	内側			
221	浅口 鉢 緑	短節のRL縄文 下部は軟かい磨き 黒褐色	軟かい磨き 黒褐色	極めて細かい 長石	素縄文の浅鉢土器の口縁	
222	浅口 鉢 緑	ナデ地に沈線 明るい橙褐色	ナデ 橙褐色	金雲母	精製の沈線文の浅鉢土器の口縁。口縁端部の様相から、平城上層式に比定し得る。	
223	深胴 鉢 部	横位巻貝条痕の 後にナデを地文 とする 黒褐色	条痕の後にナデ 暗褐色	細かい石英粒 長石	鐘崎沈線文土器(III期)の胴部	
224	深胴 鉢 部	巻貝条痕の後ナ デ 明灰色	条痕の後ナデ 黒褐色	石英粒 長石	鐘崎沈線文土器(III期)の胴部	
225	深口 鉢 縁部	RL縄文 (口唇部) ナデ 明るい黄褐色	軟かい磨き 黄褐色	金雲母	平城上層式の素縄文土器	
226	浅口 鉢 縁部	RL縄文 (下部) 軟かい 磨き 茶褐色	RL縄文 軟かい磨き 暗灰色	石英粒	鎌木・西田報告では浅鉢形土器は一括して第3類土器とされたが、そこでは当然ながら第1類に伴う浅鉢、第2類に伴う浅鉢として分類されるべきである。この土器は第2類の浅鉢とし得る。	
227	深波状口縁	丁寧なナデに明 確な沈線 茶褐色	ナデ 茶褐色	良好な胎土	有文深鉢の口縁部	
228	深口 鉢 縁部	LR縄文 (下部) ナデ 明るい橙褐色	軟かい磨き 黒灰色	長雲母	器の内面にいわゆる内文を付す。広義の彦崎KII式に対比し得るものである。平城上層式の素縄文土器	
229	深口 鉢 縁部	RL縄文 (下部) ナデ 暗褐色	軟かい磨き 明るい橙褐色	長石 雲母	石粒 母	素縄文土器の口縁部
230	深口 鉢 縁部	RL縄文 (下部) 巻貝条痕 灰褐色	巻貝条痕 灰褐色	長石 石英 チャート	石粒	口唇面上に沈線を付す素縄文土器で、松の木〜津雲A期に比定される。
231	深口 鉢 縁部	浅い沈線 丁寧なナデ 淡い橙褐色	ナデ 淡い橙褐色	石英粒 長石 金雲母	石粒 母	口唇面を弱く面取りを施す。
232	深口 鉢 縁部	短節のRL縄文 磨き 赤褐色	軟かい磨き 黒褐色	石英粒 長石 金雲母	石粒 母	素縄文土器の口縁部
233	深口 鉢 縁下 (残欠)	RL縄文 軟かい磨き 淡い黄灰色	横位条痕 黄灰色	細かい長石 石英 金雲母	石粒 母	平城I式土器の櫛状把手基部(残欠) 平城I式には胎土に細粒のSandの 外、長石、石英粒を含むことが知れる。
234	浅口 鉢 縁部	RL磨消縄文 暗茶褐色	軟かい磨き 暗茶褐色	長石 雲母	石英 母	平城I式の浅鉢の口縁部

第18表 B-4 グリット出土土器観察表 (4)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土		所見
		外側	内側			
235	浅鉢 腹 部	R.L磨消縄文 暗茶褐色	軟かい磨き 暗茶褐色	長石	石英	平城I式の浅鉢の腹部
236	無文深鉢 口 縁	ナデ 暗茶褐色	ナデ 暗茶褐色	チャート 長石 金雲	石英 祖母	内面に弱い段を持つ。 無文深鉢の口縁
237	深胴 鉢 部	ナデ 明るい橙色	ナデ 黒褐色	石英 長石	粒石	平城I式の沈線文土器
238	深胴 鉢 部	R.L磨消縄文 明るい橙色	条痕 明るい橙色	石英 長石 黒雲	粒石 母	平城I式の深鉢胴部
239	深胴 鉢 部	磨き 暗茶褐色	磨き 暗茶褐色	石英 長石 雲	粒石 母	沈線文土器(平城式)の胴部
240	深胴 鉢 部	ナデ(横走) 暗茶褐色	条痕 暗茶褐色	石英 金雲	粒石 母	鎌木・西田報告の第4類土器の胴部
241	深口 鉢 縁	丁寧な磨き 暗茶褐色	磨き 暗茶褐色	石英 長石 雲	粒石 母	松ノ木式(四ツ池)段階の深鉢の口縁
242	深胴 鉢 部	R.L縄文 黒褐色	ナデ 茶褐色	石英 長石 金雲	粒石 母	焼成が悪く、器質がもろい。 素縄文土器の胴部
243	深胴 鉢 部	条痕 灰褐色	条痕 灰褐色	石英 チャート	粒石	器の内外面に明瞭な横位の巻貝条痕を付した深鉢土器の胴部
244	浅口 鉢 縁	R.L縄文 赤褐色	磨き 黄褐色	長石 金雲	石母	平城式に伴う浅鉢の口縁部
245	無文土器 胴 部	条痕 黄褐色	条痕 黄褐色	細かい長石		
246	深口 鉢 縁	二枚貝条痕紋 暗茶褐色	剝離	花崗 チャート 雲	岩 ト母	縄文前期、大分県国東町羽田遺跡出土の 貝殻条痕土器(乙VII類)に対比し得る。



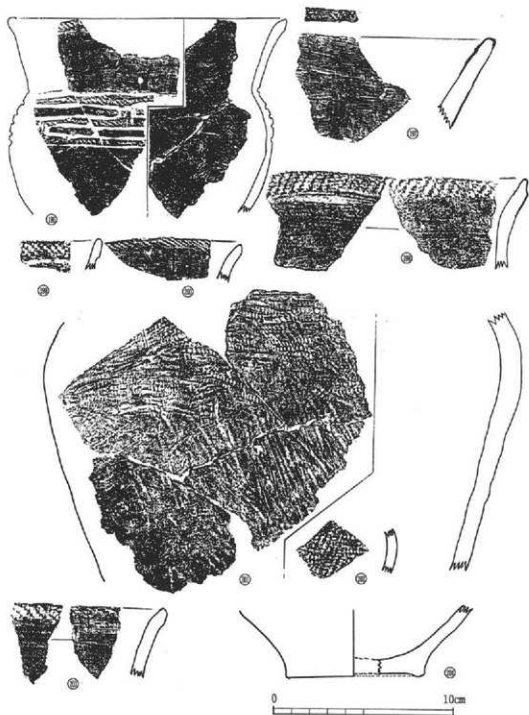
挿図15 B-0グリット出土土器実測図 (1)



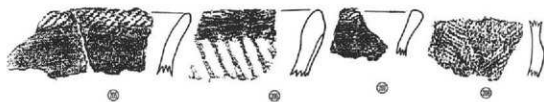
挿図16 B-0グリット出土土器実測図 (2)



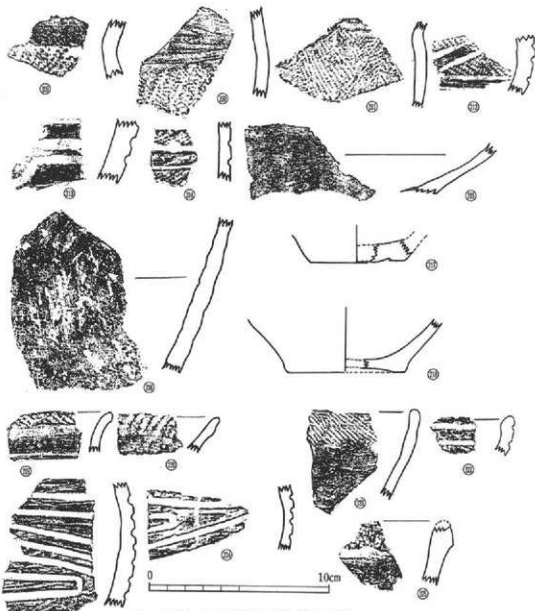
挿図17 B-1・B-2グリット出土土器実測図



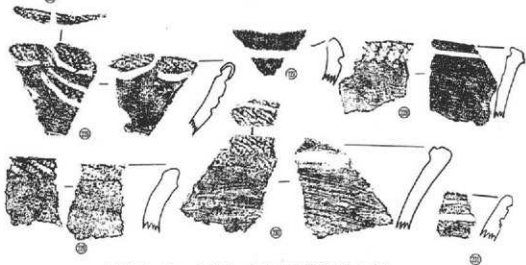
B-4グリットII層出土土器 (176~204)



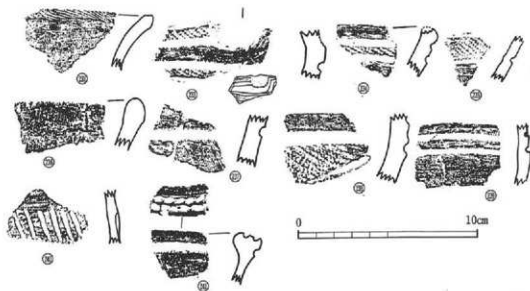
挿図18 B-4グリット出土土器実測図 (1)



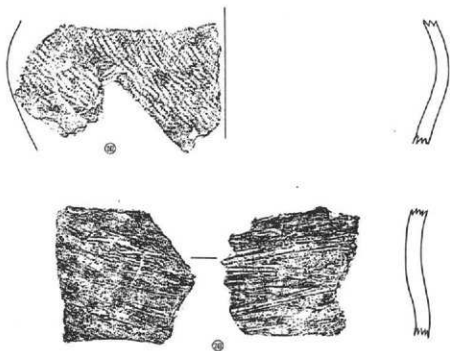
B-4グリットII C層出土土器 (205~225)



挿図19 B-4グリット出土土器実測図 (2)



B-4グリットIV層上面出土土器 (226~241)



B-4グリットIV a層出土土器 (242~243)



B-4グリットIV b層・(244) IV c層 (245) 出土土器

挿図20 B-4グリット出土土器実測図 (3)

(3) Cブロック (C0・C1・C2・C3・C4グリット) からの出土土器

① C0・C1・C2・C3グリットからの出土土器

C0グリットから74点の出土をみたが、図示し得たもの11点(図番号247~257)、C1グリットから24点の出土から図示し得たもの8点(図番号258~265)となる。この内図番号263は御手洗C式(市来系)土器の検出が目される。C2グリットからは132点の出土点数をみたが、27点(図番号266~292)を図示し得た。ここでは宿毛式土器(図番号290・292)が出土したが、貝層層の下からの出土であった。C3グリットからは30点のうち10点(図番号293~302)を図示し得た。

第19表 C-0・C-1グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
247	深鉢 口縁	L R縄文 ナデの後糸痕 暗茶褐色	ナデ 茶褐色	石英粒 金雲母	伊吹町式土器の口縁部
248	深鉢 口縁	L R縄文 ナデ 暗茶褐色	ナデ 暗茶褐色	多量の金雲母	伊吹町式土器の口縁部
249	無文深鉢 口縁	ナデ 黄褐色	ナデ 黄褐色	細かい胎土 石英粒	
250	深胴 鉢部	L R縄文 黒灰色	ナデ 朱色	石英粒 金雲母	伊吹町式土器の胴部
251	深鉢 波状口縁	波状縄文 軟かい磨き 明るい橙色	磨き 灰褐色	石英粒 長金雲母	口縁部を肥厚させ内傾する。頸部でくびれ、縄文地を持つ胴部でふくらむ。波長部に数個のやや深めのきざみを付す素縄文土器(平城上層式の新段階)
252	深鉢 口縁	R L縄文 ナデ 明るい茶褐色	ナデ 茶褐色	石英粒 長金雲母	口縁端外面を肥厚させ縄文を付す平城上層式の素縄文土器
253	深胴 鉢部	軟かいナデ地に 沈線 茶褐色	ナデ 黒褐色	石英粒 金雲母	沈線土器の胴部
254	深胴 鉢部	L R縄文 黒灰色	ナデ 朱色	石英粒 金雲母	伊吹町式土器の胴部
255	浅口 鉢縁	細かいR L縄文 黄褐色	ナデ 灰褐色	長石 石英粒	素縄文の浅鉢の口縁部
256	深鉢 口縁	荒いR L縄文 ナデ 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の石英粒 金雲母	口唇部を丁寧に調整した素縄文土器
257	深鉢 口縁	ナデ一部糸痕 竹管施文 暗褐色	ナデ 暗褐色	多量の石英粒 金雲母	宿毛式土器の中の口縁がほとんど直口するものを型とする。口端部をわずかに肥厚させる。円形の刺突は竹管用具である。編年の位置は平城I・II式に先行する。
258	深鉢 口縁	R L縄文 軟かい磨き 明るい茶褐色	磨き 茶褐色	石英粒 長金雲母	素縄文土器の口縁部
259	深鉢 口縁	L R縄文 ナデ 明るい茶褐色	ナデ 暗褐色	石英粒	素縄文土器の口縁部
260	深鉢 口縁	軟かい磨き地に 沈線 明るい茶褐色	磨き 茶褐色	多量の金雲母 石英粒	縄文地を持たない沈線のみ平城上層式の口縁部
261	深胴 鉢部	羽状縄文 明るい茶褐色	ナデ 茶褐色	石英粒 長金雲母	素縄文土器の胴部
262	深鉢 波状口縁	R L縄文 ナデ後にヘラ磨 暗褐色	ナデ 暗灰色	石英粒 金雲母	平城上層式の口縁内部施文の素縄文土器の口縁部

第20表 C-0・C-1グリット出土土器観察表 (2)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
263	深口鉢 鉢縁	押しき連続沈線 ナデ 灰褐色	ナデ 灰褐色	荒い砂粒 石 英 母 金 雲 母	九州側から搬入土器 御手洗C式(市来系)の口縁部
264	深胴鉢 鉢部	糸痕 淡い灰白色	糸痕 灰白色	多量の金雲母 石 英 粒	鐘崎III期の深鉢形土器の胴部
265	深胴鉢 鉢部	RL縄文(磨消) 暗灰色	磨き 暗灰色	石 英 粒	福田K2式期の(新)小松川式土器の深鉢形土器の胴部

第21表 C-2・C-3グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
266	無文深鉢 口縁～ 上 胴	凸凹面が残る軽 いナデ 暗灰色	ナデ 暗灰色	多量の石英粒	平城上層式期の無文土器のひとつの器形 が窺える好資料。次第に器壁が薄くなる 傾向で推移する。図番号267の素縄文土器 の器形と対応すると云える。
267	深上胴部 鉢部	RL縄文-羽状 縄文(頸部)へら磨き 赤褐色	ナデ 赤褐色	細かい石英粒 金 雲 母	素縄文土器の上胴部
268	深胴鉢 鉢部	RL縄文 (頸部)へら磨き 橙色	ナデ 橙色	多量の金雲母 石 英 粒 石 長	素縄文土器の胴部
269	鉢 口縁	RL縄文-羽状 縄文 研磨 黒灰色	ナデ 黒灰色	同 上	素縄文土器の口縁部
270	深口鉢 鉢縁	LR縄文 ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	同 上	素縄文土器の口縁部
271	無文深鉢 口縁	軟かいナデ 黒灰色	軟かいナデ 黒灰色	金 雲 母 石 英 粒	図番号266を参照
272	深口鉢 鉢縁	LR縄文 (頸部) ナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	同 上	素縄文土器の口縁部
273	深口鉢 口縁	RL縄文(磨耗) 赤褐色	ナデ 赤褐色	多量の石英粒 雲 母	平城上層式の口縁部
274	無文深鉢 口縁	丁寧なナデ 灰褐色	ナデ 灰褐色	細かい胎土 石 英 粒	無文深鉢の口縁部
275	無文浅鉢 口縁	磨耗しているか 口縁外面に縄文 をころがす 淡い黄色	軟かいナデ 淡い黄色	同 上	無文鉢の口縁部
276	深口鉢 鉢縁	LR縄文 ナデ 暗灰色	LR縄文 ナデ 暗灰色	金 雲 母	素縄文土器の口縁
277	深胴鉢 鉢部	ほぼ直交する縄 文施文 朱色	ナデ 朱色	石 英 粒	素縄文土器の腹部
278	深胴鉢 鉢部	細かいRL縄文 丁寧な磨き 淡い黄灰色	磨き 淡い赤灰色	石 英 粒	深鉢の胴部
279	深胴鉢 鉢部	荒いRL縄文 暗茶色	ナデ 朱色	多量の石英粒 金 雲 母	平城上層式の胴部
280	鉢 腹部	LR縄文 (一部磨消) 茶褐色	磨き 茶褐色	多量の金雲母 石 英 粒	平城上層式の浅鉢の腹部
281	深胴鉢 鉢部	羽状縄文 朱色	ナデ 朱色	金 雲 母 石 英 粒	

第22表 C-2・C-3グリット出土土器観察表 (2)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土		所見
		外側	内側			
282	鉢 胴部	LR縄文 軟かいナデ 橙色	ナデ 橙色	金 石	雲 英 母 粒	広瀬上層式乃至伊吹町式土器の下胴部
283	無文深鉢 口縁	硬質工具による ナデ 暗灰色	ナデ 灰褐色	石 長	英 粒 石	外反がゆるく、ほぼ直口する器形を成す 無文土器。外面条痕が激しい。
284	鉢 腹部	羽状縄文 磨き 黒灰色	磨き 黒灰色	石 雲	英 粒 母	素縄文(羽状縄文)の鉢形土器の腹部
285	鉢 腹部	RL縄文 朱色	条痕 朱色	多量の石	英 粒	素縄文土器の腹部
286	無文土器 胴部	条痕 暗灰色	条痕 暗灰色	石 金	英 雲 母	上胴部に屈曲部を持ち、口縁部は伊吹町 式の器形となろう。無文土器。
287	深鉢 胴部	羽状縄文 暗灰色	ナデ 暗灰色	石 英	粒	素縄文土器の胴部
288	深鉢 胴部	RL縄文 朱色	ナデ 朱色	石 金	英 雲 母	素縄文土器の胴部
289	底部	ナデ 朱色	磨き 暗灰色	金 雲	母	平城式土器の鉢形土器の底部
290	浅鉢 口縁	RL縄文(磨消) 灰褐色	磨き 灰褐色	石 金	英 雲 母	宿毛式土器の磨消縄文を持つ土器である。 その図柄は、南九州の指宿式の中の成川 タイプと関連する。
291	深鉢 波状口縁	RL縄文 暗褐色	ナデ 朱色	金 石	雲 英 母 粒	平城Ⅱ式として把握されるもので、基調と して素縄文土器が考えられている。恐らく 胴部も縄文地が付されるであろう。波長部 施文には、岡大276層との相関を想定してよい。
292	深鉢 口縁	ヘラ磨き 茶褐色	条痕 茶褐色	金 石	雲 英 母 粒	宿毛式土器の(新)として把握するべき土器 である。頸状の口縁部帯に1紋様帯を付す手 法は、平城Ⅰ式土器へと踏襲されていく。
293	深鉢 口縁	ナデ 茶褐色	ナデ 茶褐色	長	石	拓図に明示し得ぬが、口唇一条の沈線内 に列点が付けられる。広瀬上層式土器の深 鉢形土器の口縁として把える。
294	深上 胴部	RL縄文 明るい茶褐色	ナデ 暗茶色	石 金	英 雲 母	素縄文土器の上胴部
295	深鉢 胴部	羽状縄文 明るい橙色	研磨 褐色	石 金	英 雲 母	素縄文土器の胴部
296	深鉢 胴部	RL縄文 淡い茶色	ナデ 茶褐色	同	上	平城上層式土器の胴部
297	深鉢 胴部	条痕 茶褐色	条痕 茶褐色	同	上	条痕文土器の胴部
298	深鉢 胴部	RL縄文 条痕 黒褐色	磨き 黒褐	金 長 石	雲 母 石 英	縄文施文と条痕地が併用された深鉢形土 器の胴部
299	深鉢 胴部	荒いLR縄文 赤褐色	磨き 灰褐色	多量の石 金	英 雲 母	素縄文土器の胴部
300	深鉢 胴部	巻貝尾部条痕 茶褐色	ナデ 暗褐色	金 石	雲 英 母	巻貝尾部の条痕であるが、鋭さに欠け、 縄文後期以前には比定できない。
301	底部	軟かい磨き 茶褐色	ナデ 茶褐色	同	上	平城上層式以前に比定
302	底部	軟かい磨き 茶褐色	ナデ 茶褐色	同	上	平城上層式以前に比定

② C-4グリットからの出土土器

このグリットは、貝層が安定しており(貝層厚35cm)、10cmレベルで区切って掘り下げを実施した。貝層上層(図番号303~313)貝層中層(図番号314~328)、貝層下層(図番号329~345)、貝層最下層(図番号346~359)、貝層下(図番号360)として図示する。なお、このグリットからは153点の出土土器を数えた。図示し得たものは58点である。このグリットからは鐘崎III期土器、平成I・II式土器をはじめ、中期の船元系土器の出土をみている。

第23表 C-4グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
303	深口鉢縁	荒いLR縄文 ナデ 暗茶色	荒いLR縄文 ヘラ磨き 暗茶色	金雲母 石英粒	口縁内外、口唇部にも縄文を付す素縄文土器
304	無文鉢縁	ナデ 朱色	ナデ 朱色	多量の金雲母 石英粒	先端を尖らせた無文土器
305	深口鉢縁	RL縄文 軟かいナデ 暗茶色	ナデ 暗茶色	同上	端部を調整する素縄文土器
306	深口鉢縁	LR縄文 ナデ 橙色	ヘラ磨き 橙色	同上	素縄文土器の口縁部
307	深胴鉢部	羽状縄文 暗灰色	磨き 暗灰色	同上	素縄文(羽状)土器の胴部
308	深胴鉢部	荒いRL縄文 ナデ 暗褐色	ヘラ磨き 暗褐色	同上	外面と口唇部に縄文を付す素縄文土器の口縁部
309	深口鉢縁	LR縄文 軟かい磨き 朱色	軟かい磨き 朱色	金雲母 石英粒	同上 (口唇面は、LR、RLと交互に施文)
310	深胴鉢部	研磨 黄褐色	ナデ 黄褐色	石英粒	沈線土器の胴部
311	深口鉢縁	LR縄文 軟かい磨き 朱色	荒い縦位縄文 ヘラ磨き 朱色	石英粒	内外面に縄文を付す素縄文土器の口縁部
312	深口鉢縁	荒いRL縄文 灰暗色	条痕 灰暗色	石英粒	素縄文土器の口縁部
313	鉢縁 (上胴)	細かいRL縄文 赤色顔料を含む 橙色	ヘラ磨 橙色	金雲母 石英粒	ほぼ器形の全容が観取される素縄文の鉢形土器(胴部のみ羽状縄文となる)
314	鉢縁 (上胴)	LR縄文(口唇 口縁) 羽状縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	細かい金雲母 石英粒	素縄文土器の口縁及び上胴部
315	鉢縁	荒いLR縄文 ヘラ磨き 暗茶色	荒いLR縄文 ヘラ磨き 暗茶色	金雲母 石英粒	素縄文土器の口縁部
316	深胴鉢部	羽状縄文 暗灰色	ヘラ磨き 暗灰色	石英粒	素縄文土器の胴部
317	深口鉢縁	LR縄文 軟かい条痕 黒褐色	RL縄文 軟かい条痕 黒褐色	多量の金雲母 石英粒	口縁端部を尖りざりに作る。内文の様相は瀬戸内側の彦崎KII式期に比定し得るものである。
318	深下胴部	羽状縄文 暗灰色	磨き 暗灰色	石英粒	素縄文(羽状)土器の口縁部

第24表 C-4 グリット出土土器観察表 (2)

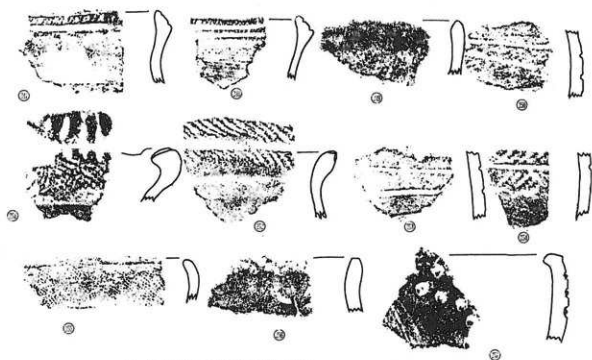
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
319	深鉢 刷部	ナデ 茶褐色	ナデ 茶褐色	多量の金雲母 長石 石英粒	沈線文土器の胴部
320	無文浅鉢 口縁	軟かいへら磨き 赤褐色	軟かいへら磨き 赤褐色	石英粒	無文浅鉢の口縁部
321	深鉢 上刷部	LR縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	石英 金雲母	素縄文土器の上刷部
322	深口 鉢縁	荒く固いRL縄文 条痕 灰暗色	ナデ 灰褐色	同上	素縄文土器の口縁部
323	無文浅鉢 口縁	軟かい磨き 暗褐色	軟かい磨き 暗褐色	多量の金雲母 長石	無文浅鉢の口縁部
324	不 腹 明部	LR縄文 淡い黄褐色	ナデ 淡い黄褐色	石英 金雲母	器種は不明であるが、その文様は縄文地に円弧状の施文の様相が窺える。
325	底 部	ナデ 褐色	ナデ 褐色	多量の金雲母	伊吹町期の底部と考えられる。
326	底 部	ナデ 褐色	ナデ 褐色	多量の金雲母	鉢・乃至は浅鉢の底部と考えられる。
327	底 部	弱い条痕 灰褐色	弱い条痕 朱色	石英粒	
328	底 部	ナデ 灰褐色	ナデ 灰褐色	石英粒	伊吹町式期の底部と考えられる。
329	無文深鉢 口縁	軟かいナデ 灰褐色	磨き 灰褐色	石英 金雲母	無文深鉢の口縁部
330	深口 鉢縁	RL縄文 ナデ 橙色	RL縄文 ナデ 橙色	石英粒	岡大25 a層出土の深鉢B類に対比し得る土器。平城上層式(新)の編年の位置を広域的に示す好資料である。
331	深口 鉢縁	荒いRL縄文 ナデ 朱色	ナデ 朱色	金雲母 石英粒	素縄文土器の口縁部
332	深口 鉢縁	荒いRL縄文 暗褐色	荒いRL縄文 暗褐色	同上	口唇部を調整し、表裏に縄文を付す素縄文の口縁部
333	深口 鉢縁	荒いRL縄文 暗褐色	荒いRL縄文 暗褐色	同上	素縄文土器の口縁部
334	深刷 部	RL縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	細かい胎土 石英粒	

第25表 C-4グリット出土土器観察表 (3)

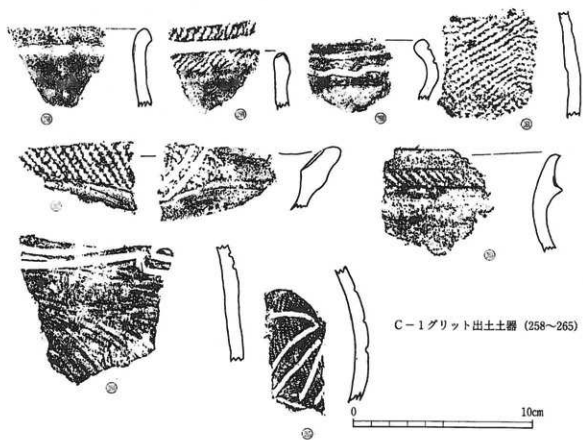
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土		所見
		外側	内側			
335	深鉢 上胴部	R L縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	石 金	英 雲 粒 母	素縄文土器の胴部
336	鉢 腹部	R L縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	同	上	同上
337	鉢 口縁	R L縄文 灰暗色	条痕 灰暗色	石 長	英 粒 石	口唇部を円く調整し、頸部横走の条痕、腹部はR L縄文の素縄文の鉢形土器。
338	深口 鉢縁	R L縄文 (頸部) 条痕 淡い朱色	ナデ 朱色	同	上	直口ぎみの口縁部に縄文を周らせる深鉢形土器で、平城上層式の素縄文土器のひとつのタイプとして挙げられる。
339	深胴 鉢部	R L縄文 赤褐色	ナデ 褐色	金	雲 母	素縄文土器の胴部
340	鉢 口縁 上胴部	荒いR L縄文 (頸部) ナデ 赤褐色	磨き 赤褐色	石 金	英 雲 粒 母	素縄文土器の口縁～上胴部
341	胴部	L R縄文 灰褐色	磨き 灰褐色	石	英 粒	深鉢の胴部と推定されるが、円盤状の凸部の周辺に弧状の沈線で囲む施文が窺える。
342	深胴 鉢部	荒いR L縄文 赤褐色	ナデ 灰褐色	同	上	素縄文土器の胴部
343	深口 鉢縁	R L縄文 (口唇) L R縄文 灰暗色	磨き 赤褐色	金 石	雲 英 母 粒	素縄文土器の口縁部
344	鉢 口縁	R L縄文 軟かいナデ 赤褐色	へら磨き 赤褐色	同	上	口縁端の内面を、硬い工具でふち取りをした素縄文の鉢形土器
345	無文深鉢 口縁	軟かい磨き 赤褐色	磨き 赤褐色	同	上	口唇部に縄文をめぐらし、波頂部に押点を付す無文の平城上層式の無文土器。
346	深口 鉢縁	R L縄文 (頸部) ナデ 暗褐色	ナデ 黒褐色	多量の金雲母		平城II式の深鉢形土器の口縁部。沈線末端を押圧ぎみにかまさせる手法が観察できる。
347	深口 鉢縁	R L縄文 (頸部) 軟かい 磨き 暗褐色	磨き 暗褐色	多量の金雲母 石 英 粒		素縄文土器(頸部との界に沈線)の口縁
348	深口 鉢縁	ナデ 暗い茶褐色	ナデ 赤褐色	長石 金 雲	石 英 母	平城I式(沈線文)土器の口縁部
349	深口 鉢縁	R L縄文 幅広の沈線 暗灰色	ナデ 暗灰色	長石	石 英	平城II式の深鉢形土器の口縁部
350	深口 鉢縁	口縁沈線の上は 磨き、下はR L 縄文 暗灰色	軟かい磨き 灰褐色	同	上	平城I式の深鉢形土器の口縁部

第26表 C-4グリット出土土器観察表 (4)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土			所見
		外側	内側				
351	鉢 口縁	RL縄文(0段3条) (頸部)軟かい ナデ 黒褐色	磨き 黒褐色	石 金	英 雲	粒 石 母	口縁部裏面に極めて低い立ち上がりを持つ、素縄文土器の口縁部
352	浅腹 鉢部	RL縄文 灰褐色	磨き 灰褐色	石 長	英	粒 石	平城II式の浅鉢形土器の腹部
353	浅口 鉢部	RL縄文(磨消) 淡い黒褐色	磨き 淡い黒褐色	同		上	平城I式(新)の浅鉢形土器の口縁部 (口唇部内面を一段肥厚させる)
354	深口 鉢部	荒い磨きと沈線 淡い黄褐色	巻貝条痕後荒い 磨き 灰褐色	同		上	文様集約部は緩く波状とする。そこから 胴部、橋状把手が降りる。時期的には鐘 崎II期(新)とし得る。
355	深胴 鉢部	磨きと沈線 黒褐色	磨き 灰褐色	同		上	東九州的な鐘崎式III期の深鉢の上胴部
356	深胴 鉢部	磨きと沈線 黒褐色	磨き 灰褐色	同		上	鐘崎式III期の深鉢の胴部
357	底 部	ナデ 淡い朱色	ナデ 朱色			〃	
358	底 部	研磨 淡い朱色	条痕 朱色	石 長 金	英 雲	粒 石 母	
359	底 部	ナデ 淡い朱色	ナデ 朱色	石 長	英	粒 石	
360	深胴 鉢部	縦走縄文 淡い灰黄色	条痕の後ナデ 淡い灰黄色	荒 石	い 英	砂 粒 粒 石	器表全面に荒い縄文を縦走させ、凸帯上 に円状工具で連続的に施文する。縄文中 期船元II式土器A類に比定し得る。

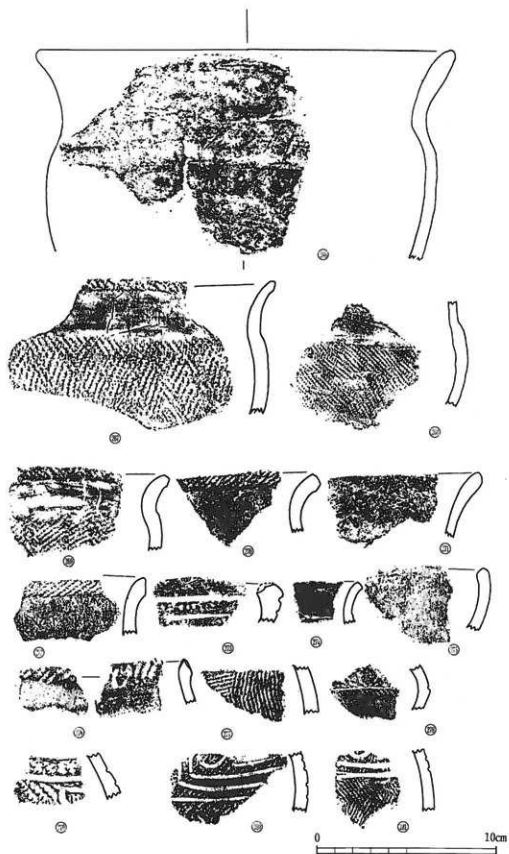


C-0 グリット出土土器 (247~257)

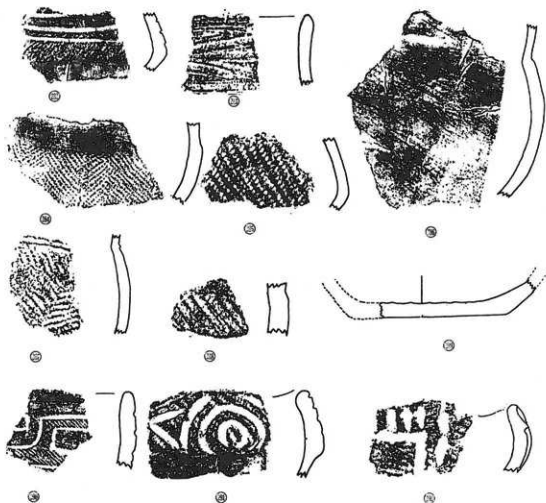


C-1 グリット出土土器 (258~265)

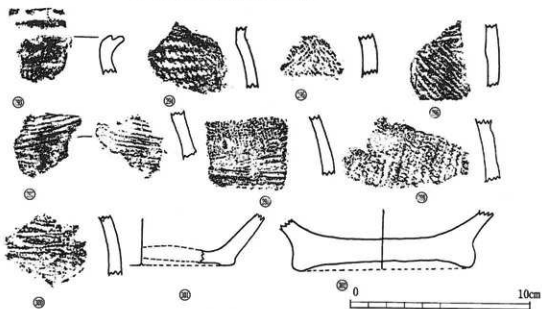
挿図21 C-0・C-1グリット出土土器実測図



挿図22 C-2グリット出土土器実測図

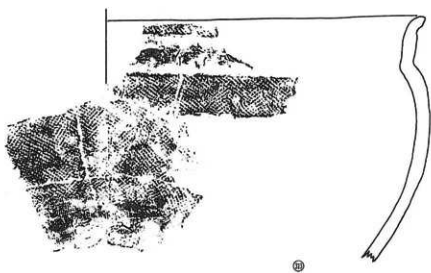
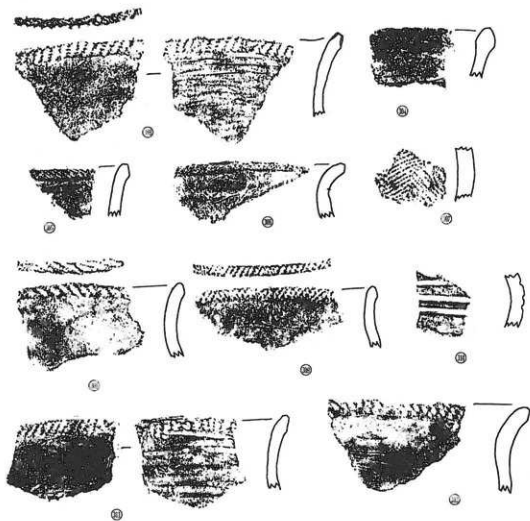


C-2 グリット出土土器 (282~292)



C-3 グリット出土土器 (293~302)

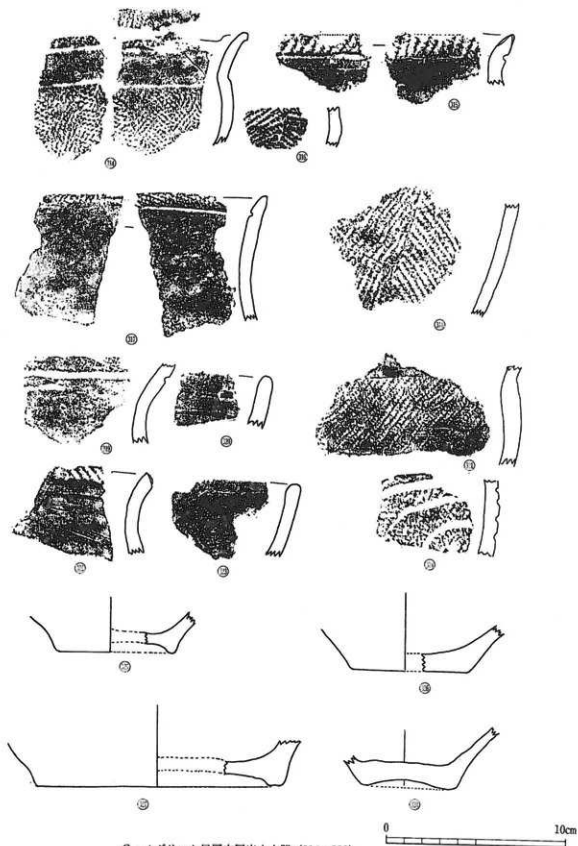
挿図23 C-2・C-3グリット出土土器実測図



C-4グリット貝層上層出土土器 (303~313)

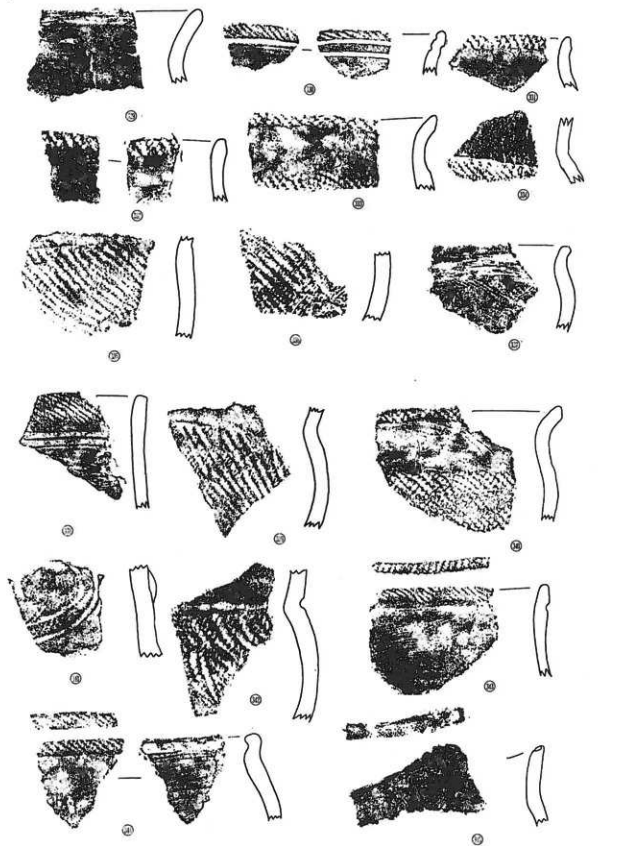


挿図24 C-4グリット出土土器実測図 (1)



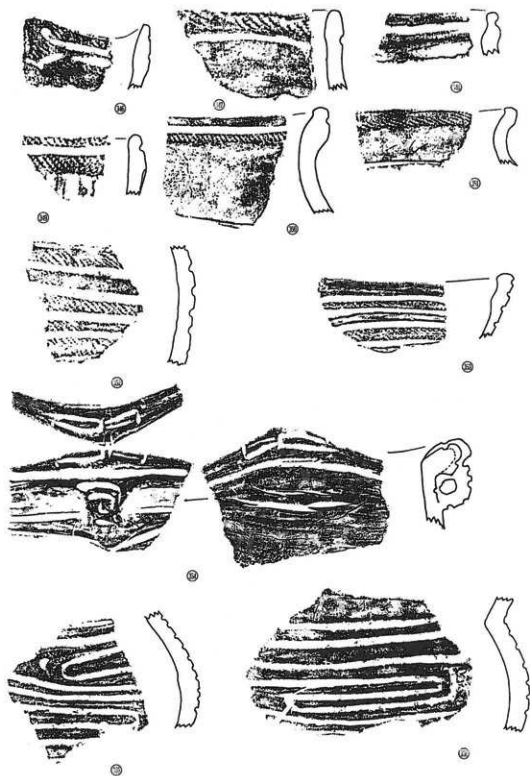
C-4 グリット貝層中層出土土器 (314~328)

挿図25 C-4 グリット出土土器実測図 (2)



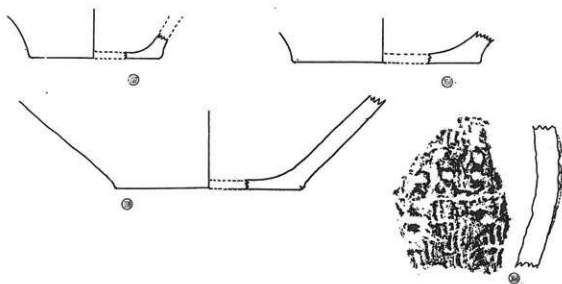
C-4 グリット貝層下層出土土器 (329~345)

挿図26 C-4 グリット出土土器実測図 (3)



C 4 グリット貝層最下層出土土器 (346~356)

挿図27 C-4 グリット出土土器実測図 (4)



C-4 グリット貝層下出土土器 (図番号360)

0 10cm

挿図28 C-4 グリット出土土器実測図 (5)

(4) Dブロック(D-0・D-1・D-2・D-3・D-4グリット)からの出土土器

D0グリットからは47点の出土をみたが、17点を図示した。D1グリットは70点から12点、D2グリット92点から34点、D3グリットから140点から17点、D4グリットから197点から19点を図示し得るところとなった。図番号417の平城I式土器、421の宿毛式土器などは、貝層下であり、今後の調査の貝塚形成期の主体が、平城上層式期にあったことを証するものであった。

第27表 D-0グリット出土土器観察表

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
361	深鉢口縁	L R縄文 暗灰色	軟かい条痕 暗灰色	石英 金雲母	広瀬上層式の深鉢形土器の口縁部。広瀬上層式が瀬戸内の四元式に併行することを示唆する好資料である。
362	深鉢口縁	L R縄文 明るい橙色	軟かい磨き 灰褐色	石英 石	伊吹町式土器の口縁部
363	深鉢口縁	L R縄文 灰褐色	ナデ 灰褐色	金雲母 石英	伊吹町式土器(古)の口縁部
364	深鉢口縁	R L縄文 灰褐色	凸凹部を残すナデ 灰褐色	金雲母	平城I式土器の上胴部
365	深鉢口縁	L R縄文 淡い褐色	ナデ 淡い褐色	金雲母 長石	伊吹町式土器の口縁部
366	深鉢口縁	L R縄文(磨耗 が激しい) 黒褐色	ナデ 黒褐色	金雲母 石英	口縁端外面を肥厚させて、縄文を施文する素縄文土器の口縁部
367	無文深鉢胴部	軟かいナデ 褐色	ナデ 灰褐色	大きめの石英 粒 金雲母	無文土器の口縁部。貝層最下部からの出土。D0グリットの全体像か、伊吹町式土器を主体とするものだけに、ほぼその時期のものと考えられる。
368	深鉢口縁	R L縄文 橙褐色	ナデ 橙褐色	石英 金雲母	伊吹町式土器の口縁部
369	深鉢口縁	L R縄文 朱色	ナデ 朱色	同	上 伊吹町式土器の口縁部
370	深鉢口縁	R L縄文 ナデ 灰暗色	条痕の後にナデ 灰暗色	同	上 平城II式土器の口縁部
371	深鉢口縁	L R縄文 (下部)磨き 茶褐色	磨き 茶褐色	同	上 平城上層式土器の口縁部
372	深鉢上胴部	L R縄文 橙褐色	磨き 橙褐色	同	上 伊吹町式土器の上胴部
373	深鉢口縁	L R縄文 (下部)ナデ 橙褐色	ナデ 橙褐色	金雲母	伊吹町式土器の口縁部
374	深鉢口縁下部	ナデに沈線 黒褐色	ナデ 黒褐色	石英 石長	粒 鐘崎式III期の深鉢形土器(残欠)
375	深鉢胴部	磨きに沈線 灰褐色	磨き 灰褐色	石英 金雲母	粒 平城上層式土器の胴部
376	深鉢口縁部	L R縄文(磨耗) ナデ 灰褐色	荒いL R縄文 ナデ 灰褐色	同	上 素縄文土器の口縁部
377	深鉢口縁部	L R縄文 黒褐色	ナデ 赤褐色	同	上 口縁を外面に肥厚させ、そこに縄文を付す素縄文土器の口縁部

第28表 D-1グリット出土土器観察表

図番号	器種等	器面調整・色調		胎 土	所 見
		外 側	内 側		
378	深 鉢 口 縁	羽状縄文(口縁) 磨き(頸部) 橙色	磨き 橙色	金 雲 母 石 英 粒	素縄文土器の口縁部
379	深 鉢 胴 部	R L縄文 灰褐色	ナデ 灰褐色	同 上	素縄文土器の胴部
380	深 鉢 口 縁	磨き 沈線下LR縄文 黒灰色	軟かい磨き 灰褐色	石 英 粒 金 雲 母	鐘崎系土器の口縁部
381	深 鉢 胴 部	細かい羽状縄文 磨き(頸部) 黒灰色	磨き 黒灰色	同 上	素縄文土器の胴部
382	深 鉢 胴 部	羽状縄文 淡い朱色	ナデ 灰褐色	同 上	素縄文土器の胴部
383	深 鉢 胴 部	羽状縄文 黒灰色	条痕 黒灰色	多量の石英粒	素縄文土器の胴部
384	深 鉢 胴 部	細かいLR縄文 褐色	磨き 暗褐色	金 雲 母 長 石	平城I式土器の胴部
385	深 鉢 胴 部	羽状縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	石 英 粒	素縄文土器の胴部
386	深 鉢 胴 部	羽状縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	同 上	素縄文土器の胴部
387	深 鉢 胴 部	R L縄文 赤褐色	ナデ 灰褐色	多量の石英粒 金 雲 母	素縄文土器の胴部
388	深 鉢 胴 部	R L縄文 淡い朱色	ナデ 黒褐色	石 英 粒 金 雲 母	素縄文土器の胴部
389	深 鉢 胴 部	LR縄文 淡い朱色	ナデ 淡い朱色	石 英 粒	平城上層式土器の胴部

第29表 D-2 グリット出土土器観察表 (1)

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
390	深胴 鉢部	L R縄文 赤褐色	ナデ 赤褐色	石 英 粒 金 雲 母	素縄文土器の胴部
391	深上 鉢部	荒いL R縄文 茶褐色	ナデ 灰黒色	石 英 粒	素縄文土器の上胴部
392	深胴 鉢部	荒いL R縄文 淡い朱色	ナデ 朱色	同 上	素縄文土器の胴部
393	深胴 鉢部	R L縄文 (胴部) ナデ 淡い朱色	R L縄文 朱色	金 石 雲 母 石 英 粒	素縄文 (口唇ナデの後に縄文) 土器の口縁部
394	深胴 鉢部	L R縄文 (縄文か磨耗) 淡い朱色	ナデ 朱色	同 上	伊吹町式土器の胴部
395	深口 鉢縁	L R縄文 淡い朱色	ヘラ 朱色	同 上	素縄文土器の口縁部
396	深胴 鉢部	羽状縄文 淡い朱色	ヘラ 朱色	同 上	素縄文 (羽状縄文) 土器の胴部
397	深胴 鉢部	R L縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	同 上	伊吹町式土器の胴部
398	深口 鉢縁	L R縄文 条痕 淡い朱色	磨き 灰褐色	同 上	素縄文土器の口縁部
399	深胴 鉢部	R L縄文 淡い赤褐色	ナデ 赤褐色	同 上	素縄文土器の胴部
400	浅口 鉢縁	R L縄文(磨消) 茶褐色	ヘラ 茶褐色	同 上	平城上層式の浅鉢口縁
401	深口 鉢縁	L R縄文 赤褐色	L R縄文 赤褐色	同 上	器壁が薄く、口縁が外反する伊吹町式土器の素縄文土器
402	深口 鉢縁	R L縄文 橙色	ナデ 茶褐色	多量の金雲母 石 英 粒	平城上層式の素縄文土器の口縁部
403	深胴 鉢部	R L縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	同 上	素縄文土器の胴部
404	浅腹 鉢部	R L縄文(磨消) 褐色	ナデ 褐色	同 上	平城上層式の浅鉢の腹部
405	深口 鉢縁	R L縄文 条痕の後にナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	石 英 粒	素縄文土器の口縁部

第30表 D-2グリット出土土器観察表 (2)

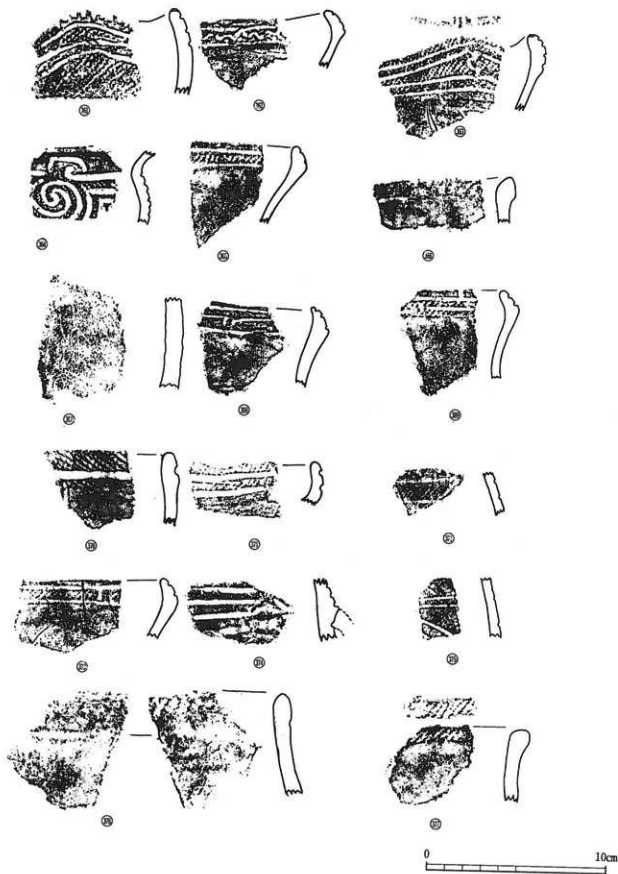
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
406	深鉢 下部	羽状縄文 磨き 茶褐色	磨き 茶褐色	多量の金雲母 石英粒	素縄文土器(羽状縄文)の下胴部(裏面 全体に白い粉状が付着している。)
407	深口 鉢縁	LR縄文(磨減) 軟かいナデ 赤褐色	ナデ 赤褐色	石英粒	伊吹町式土器の口縁部
408	浅腹 鉢部	RL縄文部分に 赤色顔料と塗入 (磨消) 濃い赤褐色	研磨 褐色	細かい胎土 石英粒	宿毛式土器(福田KII系)浅鉢の腹部
409	無文深鉢 口縁	条痕 淡い朱色	条痕 朱色	金雲母 石英粒	無文深鉢の口縁部
410	深胴 鉢部	RL縄文 軟かい磨き 灰黒色	磨き 灰黒色	同上	素縄文土器の胴部
411	深胴 鉢部	LR縄文 淡い朱色	磨き 朱色	同上	広瀬上層式の胴部
412	無文深鉢 口縁	条痕 淡い朱色	条痕 朱色	同上	無文深鉢の口縁部
413	鉢 口縁	LR縄文 赤褐色	ナデ 黒褐色	同上	無文鉢の口縁部
414	深口 鉢縁	LR縄文 淡い朱色	磨き 朱色	多量の金雲母	素縄文土器(平城上層式)の口縁部
415	深口 鉢縁	LR縄文 磨き 淡い朱色	LR縄文 磨き 朱色	同上	素縄文土器の口縁部
416	深鉢 波状口縁	RL縄文 茶褐色	ナデ 灰暗色	同上	素縄文土器の口縁部
417	深上胴 鉢部	沈線内の縄文施 文の方向は一定 しない 灰褐色	ナデ 灰褐色	石英粒 石長	平城I式土器の上胴部
418	深口 鉢縁	LR縄文 灰暗色	磨き 灰暗色	石英粒 石長	素縄文土器の口縁文
419	底部	磨き 淡い朱色	磨き 朱色	多量の金雲母	
420	底部	磨き 淡い朱色	磨き 朱色	多量の石英粒	
421	深口 鉢縁	磨き 淡い朱色	磨き 朱色	大きめの石英 粒	宿毛式土器(福田KII系)土器の口縁部。 平城I式の祖型としての属性を持つもの として注目される。

第31表 D-3 グリット出土土器観察表

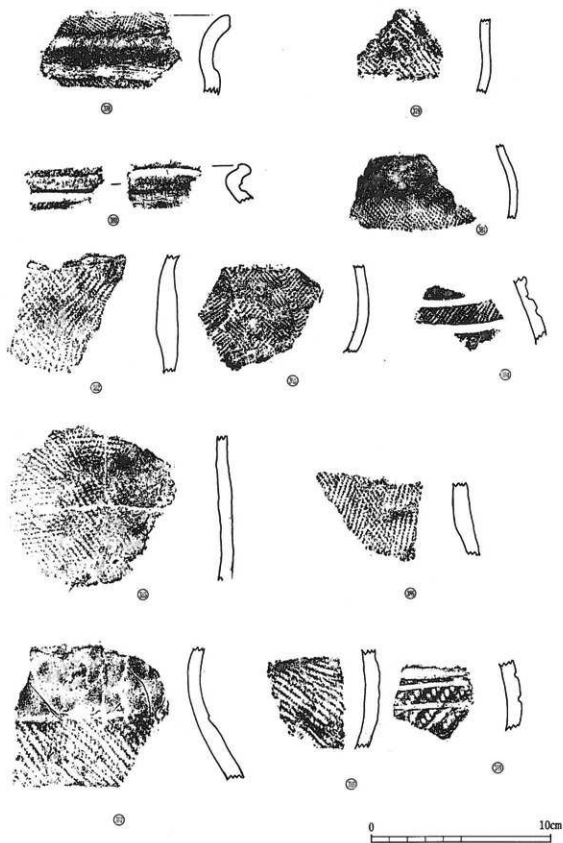
図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
423	深鉢部	磨きに沈線 橙色	磨き 橙色	多量の金雲母	平城上層式の深鉢土器の胴部。(沈線文系) 鐘崎式III期に対比される。
424	深口鉢縁	R L縄文(頸部) 条痕 淡い朱色	条痕 暗褐色	金雲母 石英粒	縄文部と頸部を区画する沈線を付す素縄文土器
425	無文浅鉢口縁	軟かい磨き 淡い朱色	磨き 朱色	多量の金雲母	
426	口鉢縁	(口縁) R L縄文 (腹部) L R縄文 灰暗色	ナデ 灰暗色	石英粒	素縄文の鉢形土器の口縁部
427	深胴鉢部	羽状縄文 黒褐色	ナデ 黒褐色	石英粒 金雲母	素縄文土器の胴部
428	深胴鉢部	ナデの後部分的 に擦痕 淡い灰色	ナデ 灰褐色	同上	鐘崎III期の深鉢形土器の胴部
429	深口鉢縁	L R縄文 黒褐色	L R縄文 黒褐色	多量の石英粒 金雲母	素縄文土器の口縁部
430	深口鉢縁	条痕の後ナデ 赤褐色	ナデ 暗褐色	石英粒 金雲母	左傾の刻み同施文。中津式期、福田K II式期のものと比べ、鋭さに欠ける。平城式期の刻み目施文とし得る。
431	深口鉢縁	L R縄文 ヘラ磨き 茶褐色	L R縄文 ナデ 茶褐色	同上	素縄文土器(表・裏・縄文)の口縁部
432	深胴鉢部	磨き後に沈線 褐色	磨き 褐色	石英粒 長石	鐘崎III期の深鉢形土器の胴部
433	深胴鉢部	R L縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	石英粒 金雲母	素縄文土器の胴部
434	鉢腹部	L R縄文 淡い朱色	ナデ 朱色	同上	素縄文鉢形土器の胴部
435	深胴鉢部	R L縄文 暗茶色	軟かい磨き 黄褐色	同上	伊吹町式土器の胴部
437	底部	ナデ 茶褐色	ナデ 茶褐色	石英粒 金雲母	
438	底部	ナデ 茶褐色	ナデ 暗褐色	同上	

第32表 D-4 グリット出土土器観察表

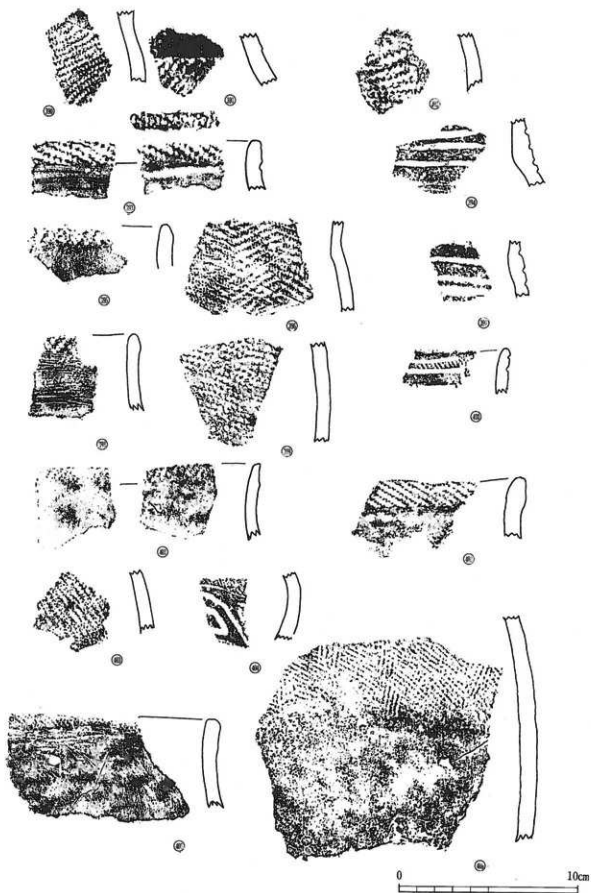
目番号	器種等	器面調整・色調		胎土		所見
		外側	内側			
440	深口鉢 鉢縁	(口縁)LR縄文 (胴部)羽状縄文 明るい橙色	LR縄文 黒褐色	石金	英雲 粒母	素縄文土器の口縁部
441	深胴 鉢部	荒い羽状縄文 淡い朱色	磨き 淡い朱色	同	上	素縄文土器の胴部
442	深口 鉢縁	LR縄文 軟かい磨き 黒褐色	磨き 橙色	同	上	素縄文土器の口縁部
443	浅腹 鉢部	LR縄文 灰褐色	磨き 黒褐色	同	上	磨きに擦痕と細い縄文地を持つ浅鉢の腹部
444	深口 鉢縁	RL縄文 軟かいナデ 黒褐色	ナデ 橙色	同	上	口唇面にも縄文を付つ素縄文土器の口縁部
445	深口 鉢縁	RL縄文 赤褐色	RL縄文 赤褐色	同	上	器内面に広い縄文帯を持つ素縄文土器の口縁部
446	深口 鉢縁	細かいLR縄文 ヘラ磨き 灰黒色	磨き 灰黒色	同	上	素縄文土器の口縁部
447	深口 鉢縁	RL縄文 軟かいナデ 淡い朱色	ナデ 淡い朱色	多量の石英粒 長石 金雲母		内文を持つ土器で、広義の彦崎KII期に対比できる。広域的な視点から重要な土器とし得る。
448	深口 鉢縁	LR縄文 赤褐色	LR縄文 ナデ 赤褐色	同	上	素縄文土器の口縁
449	深口 鉢縁	LR縄文 淡い朱色	LR縄文 暗褐色	石金	英雲 粒母	素縄文土器の口縁部
450	深口 鉢縁	LR縄文 淡い朱色	ナデ 朱色	同	上	平城上層式の口縁部
451	深胴 鉢部	RL縄文(磨消) 茶褐色	磨き 茶褐色	同	上	0段3条の縄文施文、沈線の太さから平城I式とし得る。その深鉢形土器の胴部
452	深胴 鉢部	LR縄文 茶褐色	白い粉が付着	同	上	平城II式土器の胴部
453	深胴 鉢部	RL縄文 茶褐色	灰褐色	同	上	平城II式土器の胴部
454	無文深鉢 口縁	凸凹を残す 黄褐色	ナデ 黄褐色	赤色チャート 金雲母		無文深鉢の口縁部
455	深胴 鉢部	LR縄文 黒褐色	磨き 赤褐色	石金	英雲 粒母	広瀬上層式土器の胴部
456	底部	磨き 黒褐色	磨き 赤褐色	同	上	
457	底部	磨き 茶褐色	磨き 茶褐色	同	上	
458	底部	磨き 茶褐色	磨き 茶褐色	同	上	



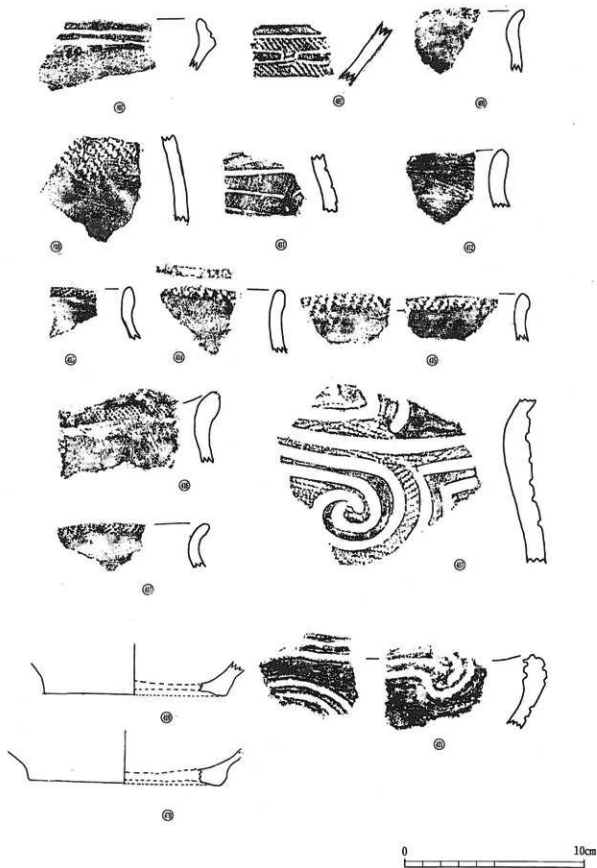
挿図29 D-0グリット出土土器実測図



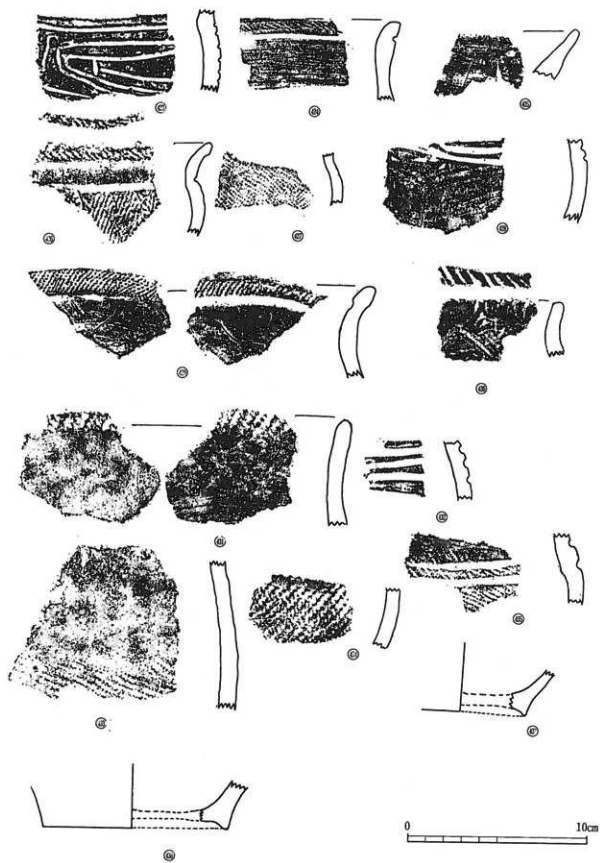
挿図30 D-1グリット出土土器実測図



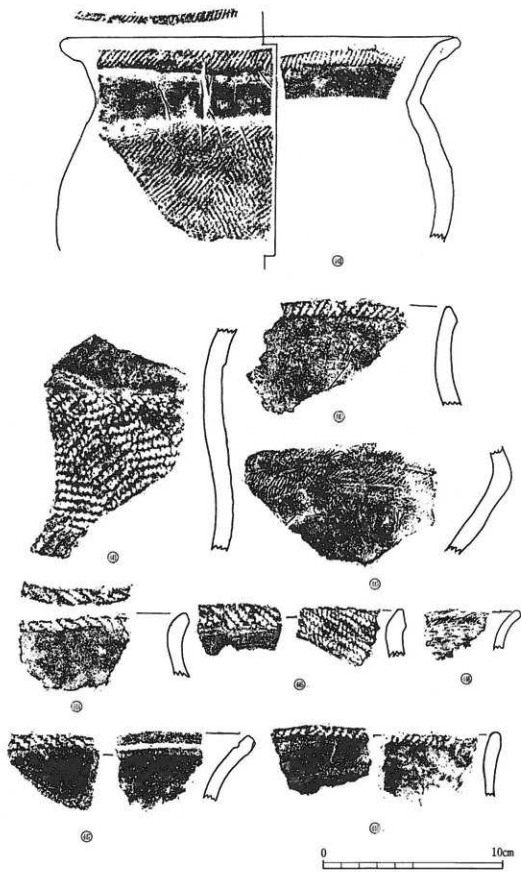
挿図31 D-2グリット出土土器実測図 (1)



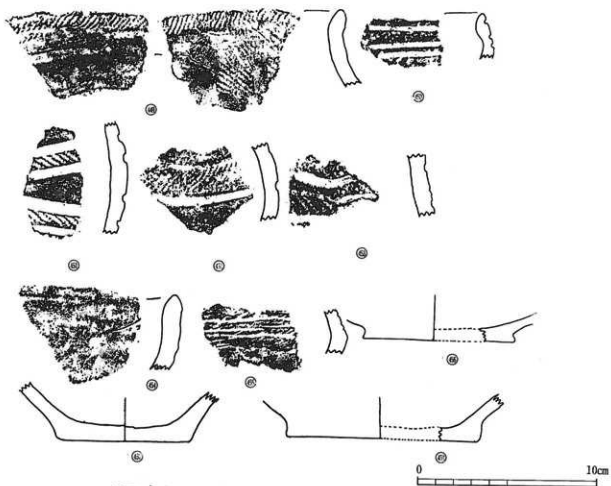
挿図32 D-2グリット出土土器実測図 (2)



挿図33 D-3グリット出土土器実測図



挿図34 D-4グリット出土土器実測図 (1)



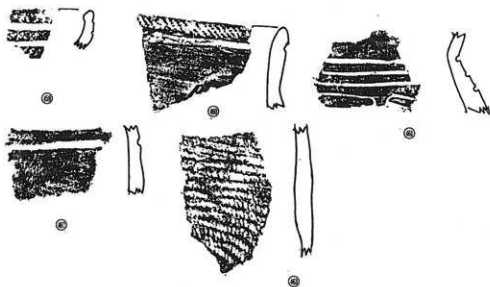
挿図35 D-4グリット出土土器実測図 (2)

(5) その他のブロック (F-1・F-2・F-3・I-1グリット) からの出土土器

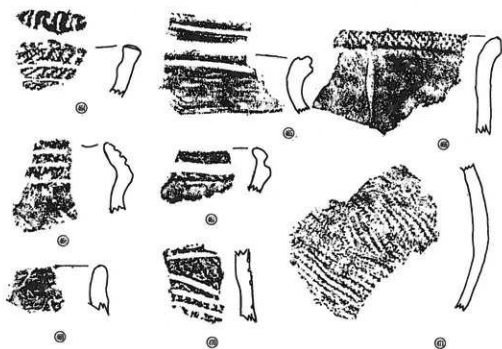
Eブロックを攪乱を受け出土土器の検出が不可能であり、F・G・H・Iブロックも遺物は弱少であった。その中で19点の土器を拓図として示すことができた。F1区は図番号459~463、F2区は464~471、F3区は472~474、I1区は475~447である。

第33表 F-1・F-2・F-3・I-1グリット出土土器観察表

図番号	器種等	器面調整・色調		胎土	所見
		外側	内側		
459	深口鉢 鉢縁 緑赤褐色	L R縄文 赤褐色	磨き 赤褐色	石英粒 金雲母	平城上層式土器の口縁部
460	深口鉢 鉢縁 緑黒褐色	R L縄文 黒褐色	磨き 黒褐色	同上	素縄文土器の口縁部
461	深上胴部	軟かい磨きに沈線 明るい黄褐色	黄褐色	同上	広瀬上層式の胴部
462	深胴部 鉢部	ナデ 黄褐色	ナデ 黄褐色	石英粒 長石母	沈線文土器の胴部
463	深胴部 鉢部	R L縄文 淡い朱色	磨き後ナデ 朱色	同上	素縄文土器の胴部
464	深波状口縁	L R縄文 淡い朱色	ナデ 朱色	石英粒 金雲母	平城上層式の口縁部 (波頂部に蛇行状の粘土紐貼布)
465	深口鉢 鉢縁 緑	磨きに沈線 明るい橙褐色	磨き 橙褐色	同上	小池原上層式の深鉢形土器口縁部
466	深口鉢 鉢縁 緑	R L縄文 軟かい磨き 茶褐色	磨き 茶褐色	同上	素縄文土器の口縁部
467	浅口鉢 鉢縁 緑	研磨に沈線 茶褐色	ナデ 茶褐色	同上	沈線文土器の口縁部
468	深口鉢 鉢縁 緑	L R縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	同上	平城上層式の口縁部
469	無文深鉢 口縁	磨き 黒褐色	磨き 黒褐色	多量の石英粒	無文土器の口縁部
470	深胴部 鉢部	L R縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	金雲母 石英粒	平城上層式の胴部
471	深胴部 鉢部	R L縄文 茶褐色	ナデ 茶褐色	同上	素縄文土器の胴部
472	深口鉢 鉢縁 緑	R L縄文 灰褐色	磨き 灰褐色	同上	素縄文土器の口縁部 (口唇部に沈線)
473	深口鉢 鉢縁 緑	R L縄文 黄褐色	磨き 黄褐色	同上	素縄文土器の口縁部
474	深胴部 鉢部	R L縄文 淡い朱色	ナデ 朱色	同上	素縄文土器の胴部
475	深胴部 鉢部	R L縄文 (磨消) 暗灰色	磨き 暗灰色	同上	平城I式土器の胴部
476	深胴部 鉢部	L R縄文 淡い朱色	ナデ 朱色	同上	素縄文土器の胴部
477	浅口鉢 鉢縁 緑	L R縄文 (巻貝 の尾部で沈線) 淡い朱色	ナデ 黒褐色	同上	平城II式の浅鉢の口縁部



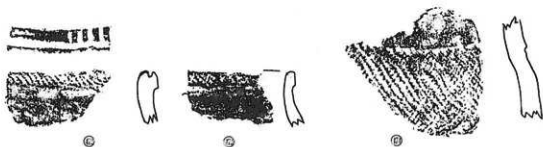
F-1グリット出土土器



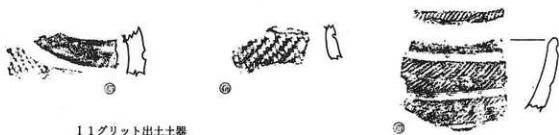
F-2グリット出土土器



挿図36 F-1・F-2グリット出土土器実測図



F3グリット出土土器



I1グリット出土土器

挿図37 F-3・i-1グリット出土土器実測図

3 出土石器

今回の発掘調査で出土した石器群の総点数は106点である。その内訳は、第44表に示した。

石材については、遺跡のすぐ近くに流れる僧都川で豊富に獲得される頁岩を主体的に用いている。また、剥片の中に大分県姫島の黒曜石が2点認められることも興味深い。以下、各器種について述べてみたい。

(1) 石 斧 (1~11)

石斧は、11点出土し石器組成に占める割合は、約10.3%である。出土した11点の石斧は、その形態的特徴から1類から3類までに細分される。以下、各類ごとに説明を加えていきたい。

1類 (1~7)

1類は、いわゆる礫石斧と考えられる。偏平な自然石を素材とし、器面に対する調整は、ほとんど認められず刃部のみを数回の加撃で作出するものである。器体の形状としては、基部側の幅が最も狭く、刃部に向うほど末広がりに幅が広がるのが基本形と考えられる。

2類 (8)

2類は、磨製石斧であり、1点のみの出土である。欠損により基部のみしか残っておらず本来の正確な形状は不明である。なお、石材は結晶片岩である。

3類 (9~11)

3類は、偏平打製石斧と考えられ3点出土している。9は、刃部を欠損しているため本来の形状は不明である。10及び11も基部のみであり、本来の形状は不明である。

(2) 石 錘 (11~22)

石錘は、11点出土し石器組成に占める割合は、約10.3%で、本貝塚での漁撈手段の重要性が観取される。出土した石錘には、形態的特徴や重量から3分類が可能である。以下、各類ごとに説明を加えたい。

1類 (12~18)

やや偏平な自然石を素材とするものであり、長軸に対し上下両端ないし一端に、打撃によって紐掛部を作出するものである。なお、18は下部に紐掛けの際の磨耗痕が認められる。重量は、大きいもので300gを越え、小さくても100gを越える。

2類 (19、20)

2類は、1類と同様、やや偏平な自然石を素材とし、擦り切りにより紐掛部を作出するものである。重量は、1類とほぼ同様といえよう。

3類 (21、22)

結晶片岩の板状の剥片を素材とするものである。器形を整えるためか、素材の表裏面の縁辺に調整を施したのち、上下両端に紐掛部を作出するものである。重量は、70g前後であり

1類、2類の2分の1以下といえよう。

(3) スクレイパー (23~31)

スクレイパーの出土点数は、9点であり、石器組成の約8.5%である。スクレイパーは、その素材の形状や刃部の位置等、多様な形態が認められるが、点数が少ないことや、細分する明確な区分が難しいことから、あえて分類しないこととする。

23は、やや横長の剝片を素材とし、その末端部を中心に刃部を作出している。24及び25もほぼ同様の形態と考えられる。なお、26は素材の形状が上記のものとは違うものの素材の末端を中心に刃部を作出するところは類似している。29は、礫面を打面とする剝片を素材とし、裏面右側辺に刃部を作出している。なお、素材は表面の剝離面構成から単設の打面を有する石核から剝離されたものと考えられる。27・28・30も礫面打面を有すること、素材獲得の際の打面転移の痕跡が、素材からは認められないこと、素材の末端ではなく、側辺に刃部を作出することなどから大きさの違いがあるものの類似点が多いと考えられる。31は、欠損により本来の形状は不明であるが両側辺に抉入ぎみに刃部を作出している。

(4) 石 鏃 (32~35)

石鏃は、未製品を含めて4点出土し、石器総点数の中で約3.8%である。32は、基部が尖る形態であり、33は、全体形が二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。34及び35は、未製品と考えられる。なお、4点中3点がB-4区出土である。

(5) 磨 石 (36~38)

磨石は、3点出土しており石器組成に占める割合は、約2.8%である。36は、上下を欠損するが、本来は偏平で楕円形を呈していたと考えられる。磨痕は、表裏面に認められる。38は、小形の偏平な礫を用いており、37は、さらに小形で丸状の礫を用いている。

(6) 敲 石 (42、43)

敲石は、2点出土しており、石器組成の約1.9%を占める。42は、拳大の大きさの礫を利用した敲石である。打痕は、表裏中央部及び側辺部に認められる。43は、卵形を呈する礫を利用した敲石である。打痕は、中央部及び側辺部に認められる。

(7) 凹 石 (39~41)

凹石は、3点出土している。石器組成に占める割合は、約2.8%である。40は、偏平で楕円形を呈する礫を用いている。凹部は、表裏両面に認められる。39、41は、小形で偏平な礫を利用しており、39は、両面、41は、一面に凹部が認められる。

(8) 二次加工剝片 (44~52)

二次加工剝片は、9点出土しており石器組成に占める割合は、約8.5%である。44は、素材のほぼ全辺にわたり大まかな調整を施している。46は、素材の末端に数回の調整を施したものである。48は、素材の打面を除去するように二次加工が認められる。45は、素材の打面部を折断により除去したのち二次加工を施している。47は、素材の打面部を二次加工により除

去している。なお、二次加工は、尖頭部を作出するように施されている。49は、折損により本来の形状は不明である。二次加工は、素材の末端の表裏面に連続的に施されている。50は、礫面を除去するための石核整形剥片を素材としたものと考えられる。二次加工は、主要剥離面側に大まかに認められる。51は、板状の結晶片岩の一端に加工を施したものである。52は、裏面右側部に加工を施した後に、表面左側部に加工を施している。他に、上部にも二次加工を施している。先に述べた側辺の二次加工は、剥離痕が大きいことなどから石核とも考えられるが、断定し難く、ここでは二次加工剥片としておきたい。

(9) 石核 (53~57)

石核は、5点出土しており石器組成に占める割合は、約4.7%である。53は、厚みのある剥片を素材とし、素材の打面部を取り除くようにb面に剥離面を作出している。そして、この面を打面に設定し、小形のやや横長の剥片を剥離している。55は、偏平な礫を素材とし、a面に数回の剥離を施し、この面を打面として横長から寸づまりの剥片を剥離している。なお、この石核は、その形態的特徴から礫器と考えられるが、他の石核と剥片剥離行程が類似することや礫器と考えた場合の使用による小剥離痕が認められないこと、また、石材が剥片石器の素材として良質なことからここでは石核としておきたい。56は、厚みのある剥片を素材としb面左側部に剥離面を作出している。そして、この面を打面として横長から寸づまりの剥片を剥離している。また、c面も礫面を打面とし剥片を剥離している。54は、厚みのある剥片を素材とし、主要剥離面に2回の剥離を施し打面を作出している。下部が欠損により失われており、正確な作業面の状況は不明である。57は、厚みのある分割剥片を素材とするものである。剥片剥離は、b面方向からc面に4枚、a面に11枚の剥片を剥離している。そして、c面に打面を転移し、b面中央で1枚の剥片を剥離し最終的にa面を打面とし小形の剥片を剥離している。

(10) 剥片 (58~106)

剥片は、57点出土しており石器組成に占める割合は、約46.2%である。剥片は、その形状や剥離面構成から考えてグルーピングが可能であり、以下のように細分を行いたい。

1類 (58~62)

表面に大きく礫面を有するものであり、石核整形に関与するものと考えられる。

2類 (63~69)

大形でやや縦長の剥片であり、表面に一条の稜があるものである。これにより、打面の形状は、三角形を呈するものが多い。基本的に打面転移の痕跡は認められない。なお、打面は、単剥離ないし礫面である。

3類 (70~75)

長幅比が1:1に近く、5cm前後の剥片である。基本的に打面転移の痕跡は認められず、打面は、単剥離ないし礫面である。若干の頭部調整を有するものが多い。

4類 (76~89)

長幅比が1:2と横に長い剥片であり、基本的に打面転移の痕跡が認められない。打面は、調整打面のものも認められるが、単剥離のものが多い。

5類 (90~97)

小形でやや縦に長い剥片である。90~95は、頁岩を用いた単設打面の石核から剥離されたと考えられ、96、97は、チャートを用い、両設打面の石核から剥離されたものと考えられる。

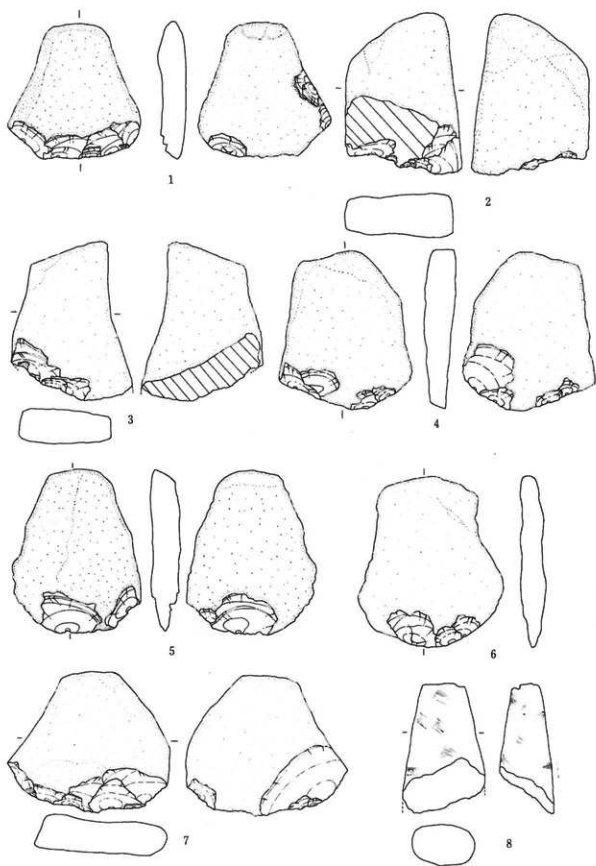
6類 (98~106)

小形で不定形なものをまとめて6類とした。石材は、チャートが主体で、姫島産黒曜石も認められる。

(1) 若干の考察

以上、本遺跡出土の各器種について述べたわけであるが、石核と剥片や剥片石器の結びつきなど若干の考察を加えたい。

本遺跡で出土した石核は、5点であり、チャートを用いた57以外の石核は、礫素材、剥片素材の違いがあるものの1回ないし数回の剥離で打面を作出し、基本的に打面転移を行わず、小形の横長から寸ぶりの剥片を生産している。また、打面と作業面のなす角度が鋭角なもの1つの特徴として挙げることができよう。剥片では、3類及び4類がほぼこの石核に対応するものと考えられる。剥片石器では、石鏃や小形のスクレイパー、二次加工剥片の一部が考えられるが、いずれにせよ、石鏃以外の剥片石器の素材としては、主体的とはいえない。なお、剥片、84、86、87は、肉眼的観察から打製石斧と同一母岩と考えられ、打製石斧製作に伴う調整剥片の可能性がうかがえる。剥片2類を剥離したと考えられる石核は、今回の調査では検出されなかった。素材として類似する石器は、スクレイパー、29、28、26が挙げられよう。剥片5類を剥離したと考えられる石核も検出されなかった。素材として類似する石器としては、石鏃、32があげられる。剥片6類については、基本的には石核、57のように1つの作業面で一定量剥片を剥離した後、打面と作業面をいれかえるなどの打面転移を行う石核から剥離されたものと考えられる。しかし、剥片、105、106から考えると上下両端に打面を作出し、細かな頭部調整を施し剥片を剥離する石核の存在も、垣間見ることができる。なお、6類とした剥片を素材として用いた石器は認められない。このように、本遺跡で出土した石核は5点と少なく、そのバリエーションも、53、54、55、56と57の二大別ができるのみであるが、剥片の剥離面構成から考えて、本来は、多様な石核が存在していたことが想定できる。



挿図38 石器実測図

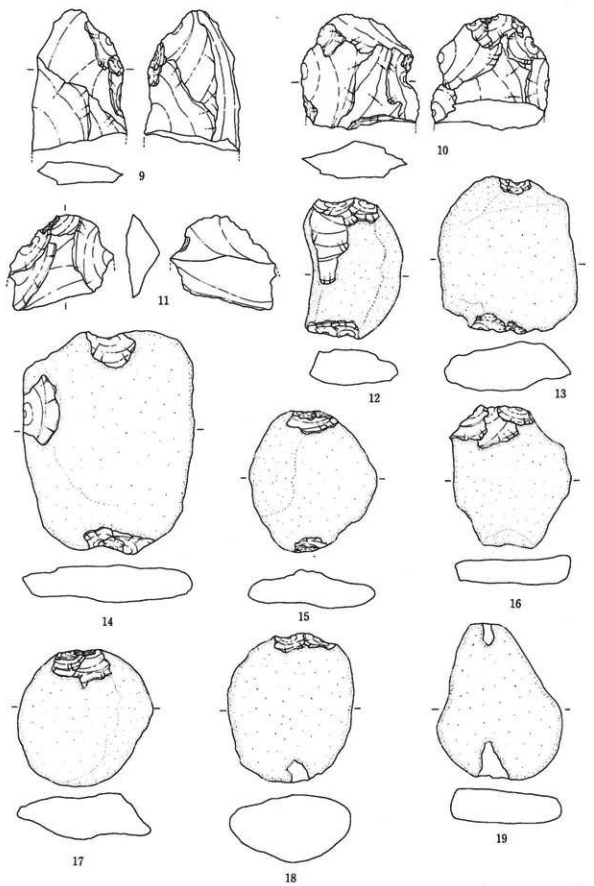


插图39 石器实测图

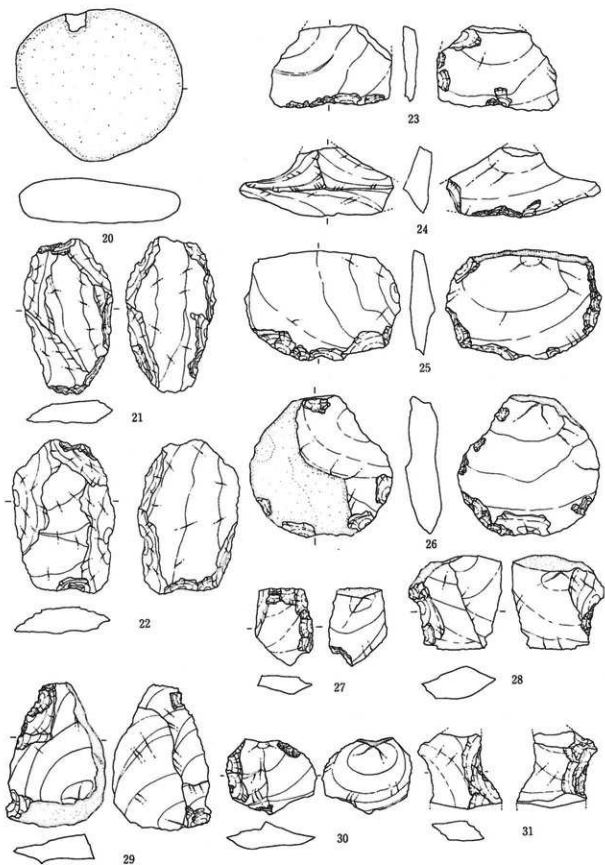


插图40 石器实测图

0 5 cm

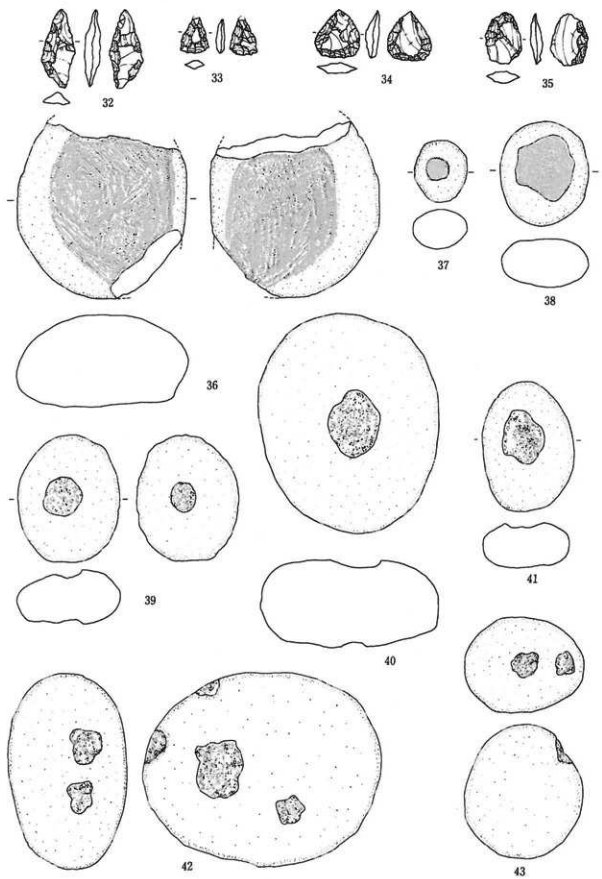


插图41 石器实测图

0 5 cm

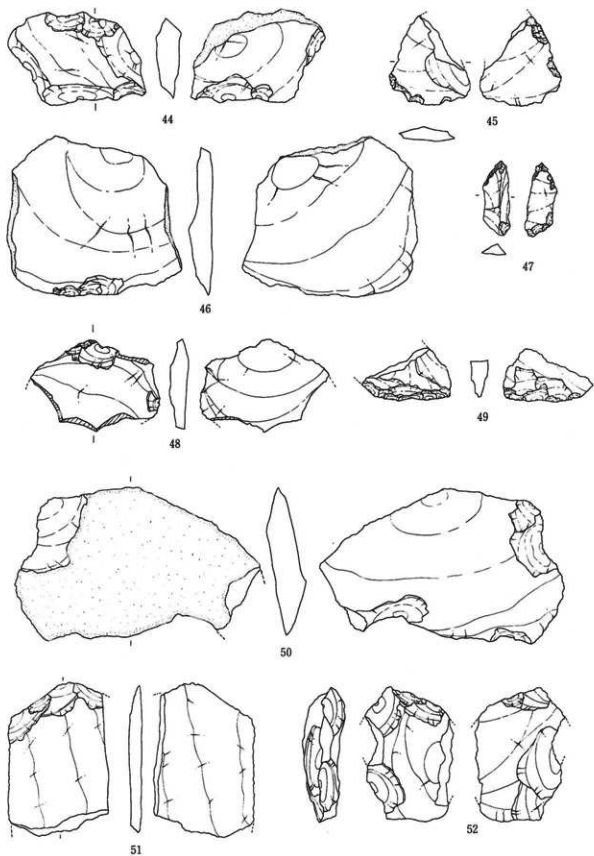


插图42 石器实测图

0 5 cm

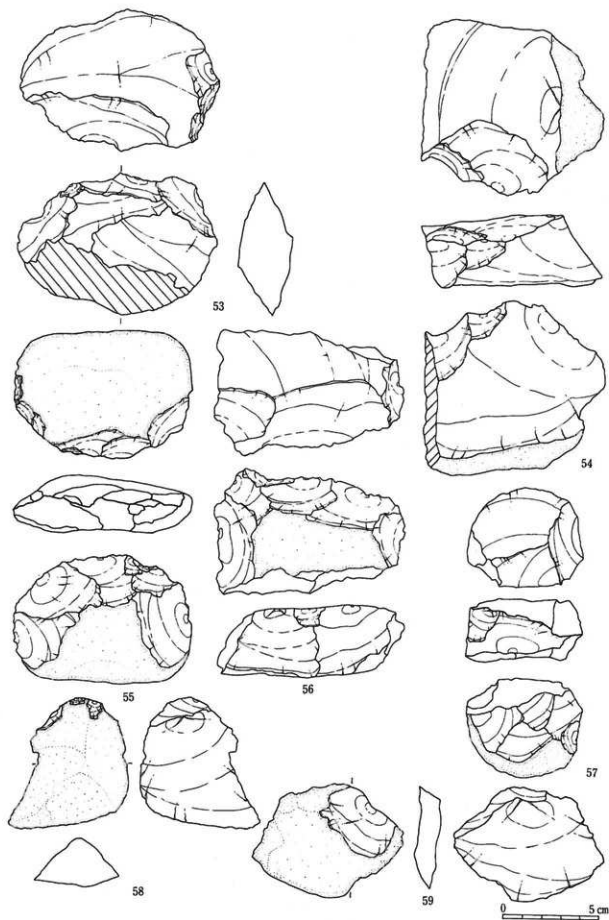


插图43 石器实测图

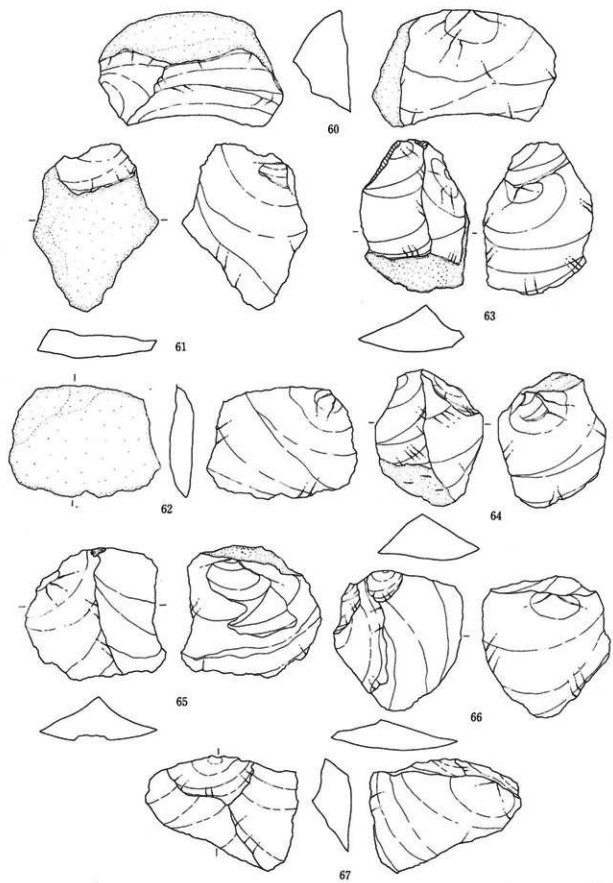


插图44 石器实测图

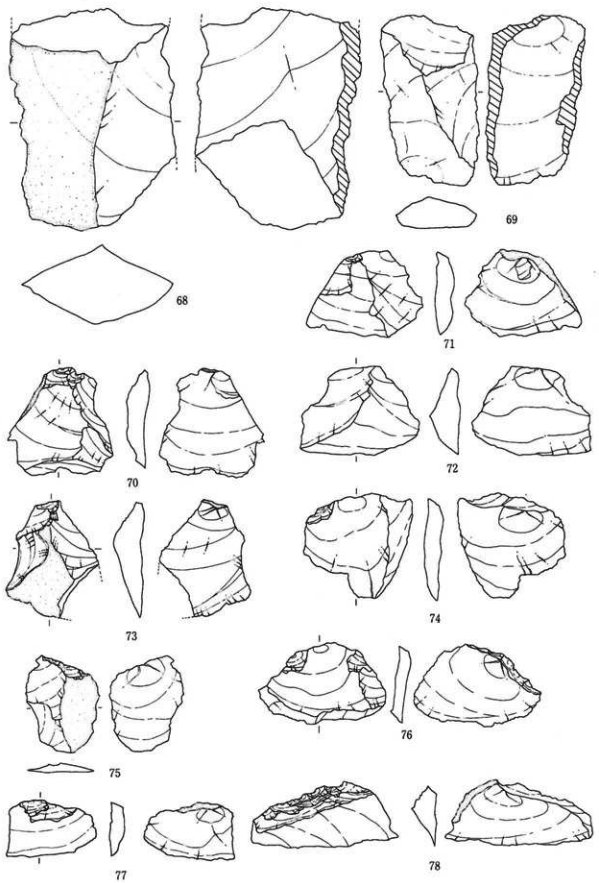


插图45 石器实测图

0 5 cm

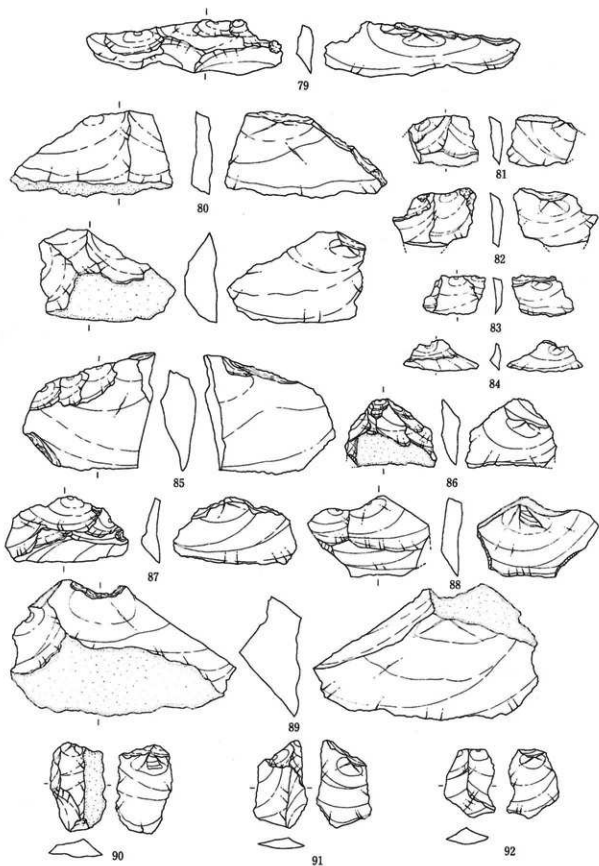


插图46 石器实测图

0 5 cm

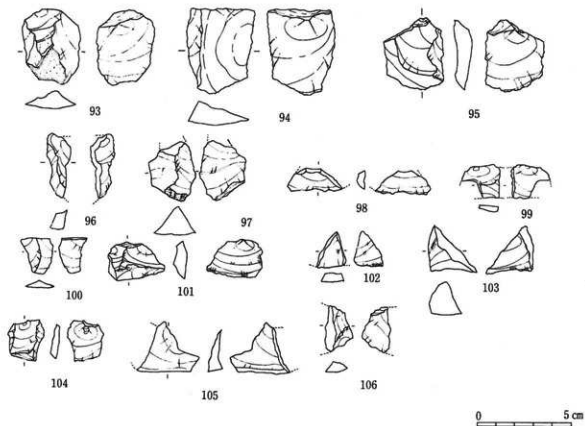


插图47 石器实测图

第34表 石斧観察表

番号	出土区	形態	層位	石材	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(g)	備考	遺物番号
1	A-0	1		頁岩	7.1	6.9	1.5	100.5		A-0-1
2	B-0	〃		〃	8.4	6.1	2.2	140.0		B-0-1
3	B-0	〃		〃	8.2	6.4	1.7	153.0		B-0-2
4	D-2	〃	II	砂岩	7.8	6.9	1.6	151.5		D-2-1
5	A-2	〃	II	〃	8.5	6.7	1.5	127.0		A-2-1
6	D-3	〃	II	〃	8.9	7.5	1.3	137.0		D-3-2
7	D-3	〃	II	頁岩	7.2	8.3	2.0	155.5		D-3-7
8	A-1	2		結晶片岩	6.9	4.6	3.0	103.5	下部欠損	A-1-1
9	C-2	3		頁岩	7.3	4.3	1.2	52.5	〃	C-2-3
10	E-1	〃		〃	6.0	6.1	1.9	80.5	〃	E-1-3
11	D-0	〃		〃	5.1	5.2	2.1	34.5	〃	D-0-6

第35表 石錘観察表

番号	出土区	層位	石材	形態	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(g)	備考	遺物番号
12	D-0		砂岩	1	7.4	5.1	2.7	123.5		D-0-3
13	A-2	II	〃	1	8.3	7.1	3.3	203.5		A-2-2
14	D-3	II	〃	1	11.6	8.0	2.4	331.0		D-3-3
15	D-4		頁岩	1	7.3	6.7	2.2	106.5		D-4-1
16	A-2	II	砂岩	1	7.5	6.5	1.9	108.5		A-2-6
17	D-0	II	〃	1	7.2	6.6	2.4	152.5		D-0-1
18	C-4		〃	1	7.6	6.4	4.1	258.0	紐掛けによる擦痕	C-4-7
19	B-0		〃	2	8.3	6.5	2.0	128.5		B-0-4
20	A-1		〃	2	7.6	8.4	2.6	225.5	紐掛け部錯交状	A-1-3
21	D-2	II	結晶片岩	3	8.1	4.8	1.4	63.0		D-2-2
22	A-1		〃	3	8.0	5.2	1.8	80.5		A-1-2

第36表 スクレイパー観察表

番号	出土区	層位	石材	長さ(m)	幅 (m)	厚さ(m)	重さ(g)	刃部角(°)	備 考	遺物番号
23	C-2		頁岩	4.2	6.4	1.0	28.0	48	打面部欠損	C-2-1
24	A-1		〃	3.7	8.0	1.6	35.3	61	打面部欠損	A-1-5
25	D-1	II	〃	5.6	7.9	1.5	79.2	62	礫面打面	D-1-1
26	B-2	II	〃	8.0	7.4	2.5	130.8	60	礫面打面	B-2-1
27	B-0		〃	4.2	2.8	1.5	15.5	58	礫面打面	B-0-5
28	B-1		〃	5.1	4.8	2.4	40.7	65	礫面打面	B-1-1
29	A-0		〃	7.6	5.0	2.9	107.3	68	礫面打面	A-0-2
30	A-2		〃	3.9	4.7	1.3	19.9	59	礫面打面	A-2-5
31	B-4	II d	〃	4.0	3.9	1.2	20.8	左側60 右側64	挟入気味の刃部	B-4-15

第37表 石鏃観察表

番号	出土区	層位	石材	長さ(m)	幅 (m)	厚さ(m)	重さ(g)	素 材	備 考	遺物番号
32	C-4	II	頁岩	4.2	1.8	1.9	5.3	やや鋭形 打面跡なし		C-4-3
33	B-4	II d	〃	1.9	1.4	0.5	1.2	打面 転移なし	尖端部欠損	B-4-7
34	B-4	II c	〃	2.6	2.3	0.7	3.8	打面 転移なし	未製品	B-4-6
35	B-4	II d	〃	2.8	2.0	0.6	3.1	鋭形 打面跡なし	未製品	B-4-11

第38表 磨石観察表

番号	出土区	層位	石材	長さ(m)	幅 (m)	厚さ(m)	重さ(g)	使用痕数	備 考	遺物番号
36	C-0		砂岩	9.8	9.4	5.2	632.5	2	裏面はやや平坦	C-0-1
37	B-4	II c	〃	3.3	3.0	2.6	28.7	1	受熱痕あり	B-4-4
38	D-2	II c	〃	5.7	5.1	2.9	106.9	1		D-2-10

第39表 凹石観察表

番号	出土区	層位	石材	長さ(m)	幅 (m)	厚さ(m)	重さ(g)	使用痕数	深さ(m)	備 考	遺物番号
39	A-1		砂岩	6.5	5.5	3.0	139.7	2	上 4 下 3		A-1-4
40	A-2		〃	11.4	9.1	5.4	814.5	2	上 5 下 2		A-2-8
41	B-4	II a	〃	6.6	5.1	2.4	112.4	1	3		B-4-3

第40表 敲石観察表

番号	出土区	層位	石材	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	使用回数	備考	遺物番号
42	B-4	II d	砂岩	10.3	12.4	6.2	1,256.7	5		B-4-9
43	D-0	II	//	7.2	6.5	5.0	304.4	2		D-0-2

第41表 二次加工剥片観察表

番号	出土区	層位	石材	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	備考	遺物番号
44	B-4	VII	頁岩	5.1	6.7	1.9	32.6		B-4-16
45	F-1		//	4.7	4.2	1.0	14.9	打面部欠損	F-1-4
46	D-3		//	8.7	9.0	2.0	130.0		D-3-1
47	C-4	II	//	3.9	1.4	0.7	3.5	尖端部作出	C-4-2
48	A-2		//	4.6	6.6	1.0	30.5		A-2-4
49	D-2	II	//	2.8	4.8	1.2	14.4		D-2-3
50	B-2	II	//	8.1	12.6	2.3	187.0		B-2-3
51	C-4	II	結晶片岩	8.0	5.4	0.8	55.8		C-4-6
52	D-0	II	頁岩	7.0	4.6	2.2	74.6	小形石核か?	D-0-4

第42表 石核観察表

番号	出土区	石材	層位	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	作業回数	割離角(°)	備考	遺物番号
53	C-3	頁岩	II	7.0	10.3	3.1	279.0	1	58	剥片素材	C-3-8
54	B-4	//	II d	9.5	9.7	4.0	356.2	1	65	剥片素材	B-4-13
55	A-0	//	7.42	6.5	9.0	3.2	216.5	1	60	礫器か?	A-0-3
56	A-2	//	7.44	6.2	10.0	3.7	300.0	2	b. 62 c. 82		A-2-3
57	A-1	チャート	7.44	5.2	6.1	3.3	130.5	3	a. 不明 b. 不明 c. 91	分割礫か素材	A-1-6

第43表 剥片観察表

番号	出土区	層位	石材	形態	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	打面形状	剥離角(°)	備考	遺物番号
58	D-3		頁岩	1	7.2	6.2	2.6	92.5	単剥離	121		D-3-5
59	D-4		頁岩	1	6.2	7.9	1.4	73.2	〃	119		D-4-2
60	C-4		頁岩	1	6.6	9.2	3.7	217.0	礫面	63		C-4-4
61	C-4		頁岩	1	8.4	6.5	1.8	62.5	点状	—		C-4-1
62	F-1		頁岩	1	6.0	8.0	1.4	78.5	点状	—		F-1-1
63	A-0		頁岩	2	8.2	5.9	2.5	130.5	単剥離	110	打面転移なし	A-0-4
64	D-3	II	頁岩	2	7.5	5.8	2.4	80.0	礫面	121	〃	D-3-4
65	C-0		頁岩	2	6.7	7.1	2.3	118.5	礫面	94	〃	C-0-2
66	D-2	II	頁岩	2	7.3	6.7	1.7	101.0	単剥離	110	打面転移あり	D-2-4
67	B-4	II d	頁岩	2	6.2	7.7	1.9	82.5	複剥離	102	打面転移なし	B-4-14
68	B-4	II d	頁岩	2	11.1	8.5	4.3	445.0	—	—	上下両端欠損	B-4-8
69	D-3	II	頁岩	2	8.6	5.2	1.6	88.5	—	—	両設打面	D-3-8
70	C-3	II	頁岩	3	5.6	5.5	1.5	30.5	単剥離	105	頭部調整あり	C-3-7
71	D-2	II	頁岩	3	4.6	6.1	1.3	24.0	礫面	119	打面転移なし	D-2-5
72	C-2		頁岩	3	4.7	6.4	1.6	38.5	点状	—	〃	C-2-2
73	A-1		頁岩	3	6.2	4.7	1.8	32.5	礫面	108	右側部欠損	A-1-8
74	B-2	II	頁岩	3	5.4	5.4	1.5	32.0	単剥離	119	打面転移なし	B-2-2
75	B-2		頁岩	3	5.2	4.0	1.0	12.0	点状	—	頭部調整あり	B-2-4
76	F-1		頁岩	4	4.1	6.9	1.4	28.5	調整打面	123		F-1-2
77	D-0	II	頁岩	4	2.9	5.0	1.4	14.5	礫面	118	頭部調整あり	D-0-3
78	C-4	II	頁岩	4	3.3	7.8	1.5	22.5	単剥離	140	頭部調整著しい	C-4-5
79	B-4	II d	頁岩	4	3.0	10.1	1.2	21.5	調整打面	105	頭部調整あり	B-4-10
80	C-2	II	砂岩	4	4.6	8.4	1.3	41.0	複剥離	120	打面転移なし	C-2-4
81	E-1	II	頁岩	4	2.9	3.6	0.7	7.0	礫面	—	〃	E-1-1
82	C-3	II	頁岩	4	3.1	4.7	1.2	6.5	単剥離	108	〃	C-3-5
83	B-4	II c	頁岩	4	2.2	3.3	1.0	5.0	〃	121	〃	B-4-5
84	D-0	II	頁岩	4	1.1	3.9	0.7	3.0	〃	110	石片10と同一母岩	D-0-5
85	E-1	II	頁岩	4	6.2	7.0	2.2	77.5	〃	—	打面転移なし	E-1-2
86	A-1		頁岩	4	3.6	4.8	1.0	12.5	〃	131	石片11と同一母岩	A-1-7
87	D-2	II	頁岩	4	3.5	6.3	1.7	21.5	複剥離	119	〃	D-2-9
88	A-0		頁岩	4	4.4	6.2	1.6	29.5	礫面	110	打面転移なし	A-0-4
89	C-3		頁岩	4	7.3	11.4	3.9	213.0	〃	112	〃	C-3-9
90	C-3		頁岩	5	4.7	3.0	1.4	14.5	複剥離	109	両設打面	C-3-1
91	D-3	II	頁岩	5	4.8	2.9	0.8	8.0	単剥離	120	〃	D-3-6

番号	出土区	層位	石材	形態	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	打面形状	剝離角(°)	備 考	遺物番号
92	F-1		頁岩	5	3.6	2.7	1.1	6.5	単剝離	125	打面転移なし	F-1-3
93	B-4	VII	泥岩	5	4.1	3.2	1.5	15.5	〃	121	〃	B-4-17
94	C-3	II	頁岩	5	4.6	3.7	1.8	20.5	〃	104	打面転移あり	C-3-4
95	A-2		〃	5	3.7	3.4	1.5	9.5	複剝離	108	打面転移なし	A-2-7
96	B-4	I	チャート	5	3.5	1.4	1.0	3.5	—	—	両設打面	B-4-1
97			〃	5	3.2	2.5	1.6	9.5	—	—	〃	C-3-2
98	D-4		〃	6	1.1	2.9	0.7	2.0	—	—	打面転移なし	D-4-3
99	C-5	II	〃	6	1.7	2.1	0.4	1.8	点状	—	〃	C-5-1
100	B-0		頁岩	6	1.9	1.6	0.3	0.9	—	—	〃	B-0-6
101	C-3		姫島ob	6	2.1	3.2	0.8	4.5	単剝離	95	打面転移あり	C-3-3
102	D-2	II	〃	6	2.0	1.5	0.6	1.5	—	—	〃	D-2-7
103	D-2	II	〃	6	2.6	2.5	2.0	7.5	—	—	〃	D-2-6
104	D-2	II	チャート	6	2.2	2.1	0.5	1.5	単剝離	119	打面転移なし	D-2-8
105	B-4	II d	〃	6	2.7	3.6	1.0	4.5	—	—	〃	B-4-12
106	B-4	I	〃	6	2.5	1.5	0.9	2.5	—	—	打面転移あり	B-4-2

第44表 石器組成表

出土区	石 斧	石 錘	スクレイパー	石 鏃	磨 石	凹 石	敲 石	二重工製石	石 核	剥 片	合計%
A-0	1		1						1	2	5(4.7)
A-1	1	2	1			1			1	2	8(7.5)
A-2	1	2	1			1		1	1	1	8(7.5)
B-0	2	1	1							1	5(4.7)
B-1			1								1(0.9)
B-2			1					1		2	4(3.8)
B-4			1	3	1	1	1	1	1	8	17(16.0)
C-0					1					1	2(1.9)
C-2	1		1							2	4(3.8)
C-3									1	7	8(7.5)
C-4		1		1				2		3	7(6.6)
C-5										1	1(0.9)
D-0	1	2					1	1		2	7(6.6)
D-1			1								1(0.9)
D-2	1	1			1			1		6	10(9.4)
D-3	2	1						1		4	8(7.5)
D-4		1								2	3(2.8)
E-1	1									2	3(2.8)
F-1								1		3	4(3.8)
合計%	11(10.3)	11(10.3)	9(8.5)	4(3.8)	3(2.8)	3(2.8)	2(1.9)	9(8.5)	5(4.7)	49(46.2)	106(100%)

4 出土貝類

(1) 出土した貝類

種類としては巻貝（腹足綱）が52種、二枚貝（二枚貝綱）が31種、計83種の貝類が出土した。（第45表）陸淡水から砂泥地、外洋系岩礁域に棲息するものまで広い環境域に棲むものが出土した。なお陸産貝の一種オナジマイマイも出土したが、この貝は外国からの移入種であり、現生のものの死殻が攪乱により紛れ込んだものと思える。

量的にはウミニナとマガキがその大半を占めている。外洋系岩礁に棲む貝は1ないし数個体の出土である。

(2) 非食料貝

ベンケイガイは貝輪として出土したが（後日に報告）現棲としては未だ愛媛県下で確認していない。半製品みたいなものも出土しているので九州あたりから貝輪の材料として運ばれたものではないだろうか。

ウチャマタマツバキガイは食料としても十分な貝であるが、笛として出土した1個体のみである。一応非食料貝としておく。

マツヤマウスレガイは殻長7センチ程になる貝で、食料とされる貝であるが、今回出土したのは殻長1センチたらずの幼貝1半片のみであり、偶然他の貝などと共に採集されたものであろう。

カワニナやマシジミはもちろん食料として出土することが多い貝であるが、出土数があまりにも少ない。マガキあるいはウミニナをまとめて採る時に死殻が紛れ込んだものと考え非食料貝とした。

その他はほとんどは小型の貝であり、数が少ない。まとめて採るときに死殻などが紛れ込んだり、他の貝に付着したものなどが採集されたものである。

1ないし数個体しか採集されていない貝で食料貝としたものもあるが、これらは偶然採集されたものが、大型のものであるので食料とされたであろう。

結局、巻貝21種、二枚貝9種、計30種については非食料貝と思える。

(3) 食料貝

量的にみると主として食料として採集されたものはマガキとウミニナであろう。食料貝の採集としては次の5つのパターンが考えられる。

① マガキの採集

マガキは河口域の岩などに固着する貝であるが、出土したのは5センチ以下の小型のものが多く、それも岩に固着するほうの殻（左殻）が深い鉢状になり、固着面が小さいものが多い。これは岩に密生して成長したときの特徴である。また、10センチ足らずの小石に付着したままの殻も出土した。こういう状況からみると、岩に密生したものを何かでかき落としてから集めたのではないだろうか。淡水、汽水産のカワニナやマシジミ、イシマキガイ、ヒロクチカノコガイなどは食料として集めたものとしては量が少なく、また小型である。これらの貝は流れてきた死殻がひっかかっていたもの、あるいはヤドカリ入りのも

のがマガキを採る際、同時に採集されたものであろう。

ヒメコザラガイも石や岩に付着する小型の笠型の貝である。時にマガキの間にも付着することがあり、マガキと同時に採集されたものであると思える。

② ウミナ類の採集

ウミナは河口の泥干潟に棲息する貝で、現在の僧都川河口では少なくなった貝であるが、当時は多産したものである。潮位の高いほうではフトヘナタリと、逆に潮位の低いほうではイボウミナと混生する貝であり、これら2種はウミナを採るときに同時に掻き集められ、種別することなく食料とされたものである。

一、ハマグリなどの砂泥の二枚貝の採集

マガキやウミナの採集時より、潮の干いたときでないと採集できない貝であり、大潮時に採集されたものであろう。同時に他の二枚貝類や巻貝のホソヤツメタガイなども採集されたものである。

アサリの出土量が少ないのは意外であり、より大型の二枚貝を重点的に採集したのかもしれない。

ハマグリの出土も今回の調査では意外と少なかった。第3次の調査では約1mの堆積の純ハマグリ層が確認されているところを見ると、環境の変化で細砂の干潟であった河口域が、泥干潟に変わり、ハマグリが激減したとも思える。あるいは第4次調査報告書に述べられているようにハマグリ調理加工の場が別にあったと解釈したほうがよいかもしれない。

一、転石地から岩礁域の採集

転石地や岩礁に棲息するスガイやニシキウズガイ科の諸種、あるいはレイシガイ類などの採集であるが、これら転石地の海岸は集落よりやや離れていたのではないだろうか。干潟の貝に比し、量的には少ないものである。

③ 外洋系岩礁域の採集

サンゴの生育するような岩礁での採集である。一覧表では外洋系岩礁の貝として13種をあげているが、これらは1ないし数個体が出土しただけで、偶発的な採集であろうし、大型の貝は食料にされたであろう。これらの貝は潮間帯には棲息しない貝だけで、さらにガンゼキボラやボウシュボラは10m以深にその生息域のある貝である。石錘が出土しているところより考えると網に偶然かかったものかもしれない。あるいはたまたま浅いところにいた貝が見つけれ、素潜りにより採集されたものかもしれない。

当然ここらにある貝としてはタカラガイ類が出土しなかった。城川町や美川村上黒岩などの山の中の遺跡ででているところより考えると、交易品として使われたものである。

(4) 当時の海岸の様子

当時の海の状況を想像してみよう。僧都川河口は汽水域より泥干潟が広く広がり、河口近くでは葦が茂り、そのあいだにヒロクチカノコガイが棲息していた。泥干潟は砂泥そしてその沖合いの砂地の干潟へと続く。泥干潟にはハイガイが棲息し、泥干潟から砂泥干潟が変わる辺でウミナが多産し、オキシジミやシオヤガイ、シオフキガイ、スダレハマグリなどの

二枚貝もいた。沖合いの砂干潟ではハマグリが多産し、ホソヤツメタガイやアカニシなどがいた。貝塚のすぐそばは岸に岩や石がならび、その上にマガキが所狭しと固着していた。その沖は砂泥干潟であり、目の前のマガキやウミナが一番食用として利用されたと思われる。

少し北寄りになると海岸は転石地でこのあたりではスガイやイシダタミガイ、クマノコガイ、アマオブネガイ、イボニシやレイシガイなどの巻貝、そしてカリガネガイやクジャクガイ、ケガキなどの二枚貝が岩に付着していた。さらに北に岩礁の海岸へと続き、ヘソアキクボガイやヒメクボガイ、サザエや岩礁の間の砂礫にはマガキガイが棲息していた。

御荘湾の湾口に近い辺では（あるいは湾の中央辺あたりまで入っていたかもしれない。）造礁性サンゴが生育する環境であったろう。外洋系のアナアキウス、ガンゼキボラ、シロレイシガイ、キナレイシガイ、ボウシュウボラやイモガイ類などはサンゴの生育するところにいる貝である。

(5) 絶滅した貝

ハイガイは縄文時代には日本に広く分布した貝であるが、現在は有明海だけに棲息している貝である。当時はこの付近にも多産したようである。

ヒロクチカノコガイは河口汽水域の泥干潟に棲息する貝であり、現在は棲息するような環境がなく、絶滅している。

カキの一種やヒメベッコウマイマイの一種は現生貝を見ていない。ヒメアカガイやスダレハマグリも絶滅したかもしれない。この2者はここ数十年の話である。

(6) 陸産貝

前に述べたオナジマイマイを除き8種の陸産貝が出土した。出土した中では大型のセウチマイマイもウスカワマイマイも殻が割られた様子はなく、次に大きなスグヒダギセルガイは殻長1.3センチ程、アズキガイは殻長8ミリ程度の細長い貝であり、ヒメベッコウマイマイの一種にいたっては殻径3ミリ程の平巻状の貝である。従ってこれらの貝は食料として採集されたものではない。セウチマイマイは樹上性、スグヒダギセルは半樹上性、ウスカワマイマイは草むらなどに、アズキガイは朽ちた木に、ヒメベッコウマイマイの類は朽ち葉の間によく見られる陸産貝である。これらのことから、この貝塚のそばに、あるいは貝塚が放棄された後この場に、灌木林などが茂っていたと思える。

(7) まとめ

83種とかなりの種数の貝が出土した。そのうち53種は食料とされたもので、他は貝輪の材料として持ち込まれたと思えるベンケイガイを省き、偶然紛れ込んだものと思える。食料貝の中では干潟の貝がよく利用され、ウミナとマガキが大半を占めたが、時に転石地や岩礁の貝も食料とされた。当時の御荘湾は広い泥干潟から転石地、そして造礁生サンゴが生育するような岩礁地までと現在より多彩できれいな環境があり、貝塚のそばに、あるいは貝塚が放棄された後この場に、灌木林が茂っていたと思われる。

第45表 出土貝類一覽表

() 内は生息地

種名の前の○は非食料と思えるもの

腹足綱(巻貝)		
ミミガイ科		イモガイ科
イボアナゴ(外洋系岩礁)		キヌカツギイモガイ(外洋系岩礁)
ユキノカサガイ科		○ハナワイモガイ(外洋系岩礁)
○ヒメコザラガイ(岩礁)		○サヤガタイモガイ(外洋系岩礁)
ニシキウスガイ科		キセルガイ科
イシダタミガイ(岩礁)		○スグヒダギセルガイ(陸産)
ヘソアキクボガイ(岩礁)		オカクチケレイガイ科
クマノコガイ(岩礁)		○ホソオカチョウジガイ(陸産)
バテイル(岩礁)		ベッコウマイマイ科
コシダカガンガラ(岩礁)		○ヒメベッコウマイマイの一種(陸産)
ヒメクボガイ(岩礁)		
アナアキウスガイ(外洋系岩礁)		オナジマイマイ科
ギンタカハマガイ(岩礁)		○セトウチマイマイ(陸産)
サザエ科		○ウスカワマイマイ(陸産)
サザエ(岩礁)		
スガイ(岩礁)		二枚貝綱
ウラウスガイ(岩礁)		フネガイ科
アマオブネガイ科		カリガネエガイ(岩礁)
アマオブネガイ(岩礁)		エガイ(岩礁)
○アマガイ(岩礁)		ベニエガイ(外洋系岩礁)
○ヒロクチカノコガイ(汽水産)		サトウガイ(砂地)
○イシマキガイ(汽水産)		ヒメアカガイ(砂泥)
ヤマタニシ科		ハイガイ(砂泥)
○ヤマタニシ(陸産)		タマキガイ科
○ヤマクルマガイ(陸産)		○ペンケイガイ(砂地)
○アズキガイ(陸産)		イガイ科
ムカデガイ科		○クジャクガイ(岩礁)
オオヘビガイ(岩礁)		○ムラサキインコガイ(岩礁)
ウミナナ科		○クログチガイ(岩礁)
フトヘナタリガイ(砂泥)		イタヤガイ科
○ヘナタリガイ(砂泥)		イタヤガイ(砂地)
イボウミナ(砂泥)		ナミマガシワガイ科
ウミナナ(砂泥)		ナミマガシワガイ(岩礁)
○カワアイ(砂泥)		イタボガキ科
カニモリガイ科		マガキ(岩礁)
○コグツノブエガイ(砂泥)		イワガキ(岩礁)
カワニナ科		ケガキ(岩礁)
○カワニナ(淡水産)		カキの一種(岩礁)
ソデボラ科		キクザルガイ科
マガキガイ(砂泥)		ヒトエギクガイ(岩礁)
タマガイ科		○キクザルガイ(岩礁)
○ウチヤマタマツバキガイ(砂泥)		ザルガイ科
ホソヤツメクガイ(砂泥)		ナガザルガイ(外洋系砂地)
フジツガイ科		バカガイ科
ボウシュウボラ(外洋系岩礁)		シオフキガイ(砂泥)
ホネガイ科		ミルクイガイ(砂地)
ガンゼキボラ(外洋系岩礁)		ニコウガイ科
アカニシ(砂泥)		○イチョウシラトリガイ(砂泥)
キナレイシガイ(外洋系岩礁)		シジミ科
シロレイシガイ(外洋系岩礁)		○マシジミ(淡水産)
ウニレイシガイ(外洋系岩礁)		フナガタガイ科
クリフレイシガイ(岩礁)		○タガソデガイモドキ(岩礁)
レイシガイ(岩礁)		マルスダレガイ科
イボニシ(岩礁)		シオヤガイ(砂泥)
○ヒメヨウラクガイ(岩礁)		カガミガイ(砂泥)
フトコロガイ科		アサリ(砂泥)
○フトコロガイ(岩礁)		スダレハマグリ(砂泥)
エソバイ科		○マツヤマワスレガイ(砂地)
イソニナ(岩礁)		ハマグリ(砂泥)
イトマキボラ科		オキシジミ(砂泥)
ヒメイトマキボラ(外洋系岩礁)		
腹足綱(巻貝)	52種(汽水産2種、淡水産1種、陸産8種)	
二枚貝綱	31種(淡水産1種)	
計	83種(汽水産2種、淡水産2種、陸産8種)	

第46表 試掘（平成6年11月）第2トレンチの貝

巻貝	ウミニナ	7880個
	フトヘナタリ	443個
	スガイ	208個
	イボウミニナ	201個
	レイシ	51個
	イボニシ	42個
	イシマキガイ	26個
	マガキガイ	15個
	クリフレイシ	14個
	ヒメクボガイ	11個
	ヤマタニシ	5個
	ヘナタリ	4個
	アマオブネガイ	4個
	イソニナ	4個
	アズキガイ	3個
	ウラウズガイ	2個
	ホソヤツメタガイ	2個
	コシダカガンガラ	2個
	オオヘビガイ	2個
	カワニナ	2個
	ヒロクチカノコガイ	2個
	ヘソアキクボガイ	1個
	アカニシ	1個
	ガンゼキボラ	1個
	ヤマクルマガイ	1個
	ハナワイモガイ	1個
	ウスカワマイマイ	1個
二枚貝	マガキ	約7500片（重量より推定）
	ハマグリ	59片147破片
	ハイガイ	22片2破片
	ナミマガシワガイ	11片5破片
	ヒメアカガイ	10片8破片
	オキシジミ	7片4破片
	マシジミ	6片
	アサリ	4片18破片
	シオフキガイ	5破片
	カリガネエガイ	4片
	スダレハマグリ	3片2破片
	シオヤガイ	3片
	カガミガイ	2片15破片

第47表 D2グリット出土の貝の種類 (混貝土層 厚さ20センチ中)

巻貝	ウミニナ	約1200個 (重量より推定)
	フトヘナタリ	49個
	スガイ	35個
	レイシガイ	14個
	アズキガイ	13個
	クリフレイシガイ	10個
	イボウミニナ	9個
	イボニン	8個
	ホソヤツメタガイ	4個
	イシマキガイ	2個
	ヒメコザラガイ	2個
	ヤマタニシ	2個
	マガキガイ	1個
	カワニナ	1個
	ヒロクチカノコガイ	1個
二枚貝	マガキ	約3000片 (重量より推定)
	ハマグリ	26片破片多
	ナミマガシワガイ	19片
	ハイガイ	6片2破片
	ヒメアカガイ	4片
	カリガネエガイ	2片1破片
	スダレハマグリ	1片7破片
	オキシジミ	1片5破片
	アサリ	1片3破片
	シオヤガイ	1片

5. 貝製品

(1) 貝笛 (巻頭図版)

原材料は、ウチヤマタマツバキガイ(タマガイ科) (*Polinices sagamiensis*)。殻高4.7cm、殻径4.6cmを測る。B4グリットII C層中からの収納である。II C層は、既に述べた如く20cm程度の層厚を持つ純貝層を形成する。この層からの出土土器は、平城式第4類土器、素縄文土器、九州側からの搬入とみられる鐘崎式III期の土器となる。

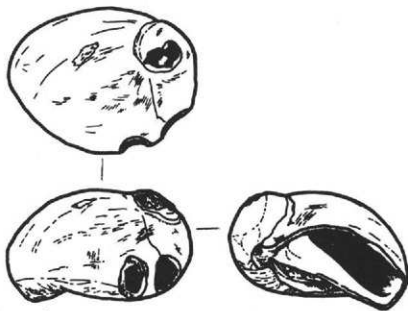
加工は、臍孔裏側の球状の殻背面に2孔が付される。直径6~8mmの2孔は極めて丁寧に貫通され、2孔の口唇は緩やかに傾斜を持って調整される。いまひとつの加工痕は、殻口の口唇部に存在する。口唇周縁が円滑に調整されている。

この2孔には、全く磨耗痕が存在せず、その用途の上で、首飾的な垂飾品とし得ないとするのが、発見当初からの見解であった。発掘調査主任の犬飼は、平成7年11月中旬、茨城県ひたちなか市での日本考古学協会の秋の大会にこの貝製品を持参し、多くの研究者に意見を求めた。貝笛とする積極的な肯定論者も多かったものの、不明として意見で保留する研究者も存在した。犬飼は、その後、東京在住の古代音楽研究者、美濃晋平氏を訪ね意見を求めた。美濃氏は、実際に吹いて確かめ「音色が美しい。音域が広く、半オクターブは出せる」とし、貝笛であることを肯定した。

その後、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの松井章主任研究官から以下の如きコメントを受領した。

なお、*Polinices sagamiensis*は、外海の細底、数m~50mの深さに棲息し、潮が干いたときでも、潜水しないと採集は困難だと考えられる。分布は房総~九州本土。暖海種である。

縄文時代の音の出る道具はこれまで余り知られていなかった。明確な笛としては、長崎県対馬の縄文後期の佐賀貝塚で、明治時代までつかわれていたとそっくりの鹿角製の鹿笛が出土している。(正林護1990「鹿笛考」『乙益重隆先生古稀記念論文集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行委員会編 83-98。)また、鳥類の長管骨の側面に穿孔したのも、音を出すことは可能なので笛の可能性はある。松井自身は、東北地方の後晩期の貝塚から出土するハマグリのうち、殻頂部に1~2ミリの孔を明けたものを貝笛ではないかと考えているが(たとえば須藤隆編『縄文晩期貝塚の研究2 中沢貝塚II』東北大学考古学研究会)、証明できないでいた。この例は、澄んだ音色が出ることから貝笛の可能性が高いと思われるが、「音が出る」からといって「楽器」であると直結して考えることは考古学的には危険性を伴う。貝に穿孔して音を出すという、現代人にとっては簡単な原理をどうして他の縄文貝塚人は思いつかなかったのか、あるいは知識としては知っていてもそれを作らなかったのか、謎は深まる。今後、こうした貝塚出土の貝類の注意深い観察によって類例が増え、時期的にも孔の位置にも共通性、普遍性が見られることがはっきりすれば、平城貝塚から出土したこの「貝笛」の意義もますます高まるであろう。



挿図48 貝笛実測図

0 5 cm

御荘の
平城貝塚

最古の貝笛出土

縄文後期祭祀に使用?

南守和郡御荘町にある奥は、殻が褐色で厚縁以南の指定区域・平城塚の第五水溝十〜五十坪の細砂層に穴掘調査で、わが国最古すむ、見つかった貝笛は、の貝笛が出土していたこと、厚さ四・七、直径が四・六でこの種の貝笛として、巻貝でタマガイ科のウチヤマタツバキガイとあら、時代は縄文後期中葉(三〇〇〇〜二〇〇〇年)と推定され、一二月二日、土が交じり、土を吹き込む、高く澄んカキやハマグリ、の貝笛、好で出土した。刃りを踏み、ウチヤマタツバキガイ、残らした様子もなかった。

(注) 本文二段目九行目からの

十一月二日は

十月三十一日の鎮記

貝塚からは大量の貝殻が出たが、ウチヤマタツバキガイはこの一個だけ。奈良国立文化財研究所歴史文化財センターの松井肇主任研究によると、縄文期に土器、石製(シカ)笛の出土はあるが、貝笛は確認されたものがなかった。今回は、きれいな音が出るうえ、貝輪やペンダントでもないため、笛と考えてよいという。

平城貝塚 御荘湾に注ぐ備前川の河口付近にある高地で、明治二十三年発見、戦後から五次の本掘、石製や土製、貝輪、骨製などが出土。昭和二十六年に奥の史跡に指定。

横笛型初めて見た
縄文の笛の研究者・東京大学平山幸三氏(東京大学文学部)の調査結果に吹込み音が、音程が広く、音がきれいで、半オクターブは出た。笛は単人(はやと)や阿曇(あす)など塩田民族と縁が深い、貝笛は極めて少ない。ホウ貝型など、横笛タイプは初めて見

た。横笛型初めて見た
縄文の笛の研究者・東京大学平山幸三氏(東京大学文学部)の調査結果に吹込み音が、音程が広く、音がきれいで、半オクターブは出た。笛は単人(はやと)や阿曇(あす)など塩田民族と縁が深い、貝笛は極めて少ない。ホウ貝型など、横笛タイプは初めて見

第3章 自然科学的な調査

はじめに

平城貝塚は御荘湾の河口に近い僧都川北岸の台地上に位置する。本貝塚の発掘調査はこれまでに第1次～第4次調査が実施されており、今回行われた第5次調査を含めて、縄文時代後期中葉の土器や貝・人骨・獣骨・魚骨・石器・骨角器などの遺物が確認されている。

今回の自然科学分析調査では、花粉分析により本貝塚周辺の当時の植生について検討することが目的とされた。しかし、送付された土壌試料を観察した結果、これまでの分析調査例から花粉化石が良好に含まれていないことが予測された。そのため、事前に概査を実施した結果、試料中には花粉化石などの微化石が全く含まれないことが確認された。そこで、御荘町教育委員会と協議の結果、土壌試料を水洗選別して、含まれる大型植物遺体（種実遺体）を抽出し、その種類を明らかにして当時の植生に関する資料を得る（種子遺体同定）とともに、VII層中に認められるテフラの種類を明らかにすること（テフラ分析）に調査課題と分析項目を変更することとなった。

本報告では、このような経緯により、その分析結果について述べる。

1. テフラ分析

(1) 試料

試料は、平城貝塚5次調査のVII層（黄褐色シルト）中に認められた鬼界-アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井，1978）と推測されている火山灰である。

(2) 分析方法

試料適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を実体顕微鏡下で観察、スコリア・火山ガラス・軽石の特徴や含まれる量の多少を定性的に調べる。

(3) 結果

試料中には無色透明および褐色のバブル型火山ガラスが中量含まれる。この火山ガラスは、その形態と色調および産出層準により、K-Ahに由来すると考えられる。K-Ahは約6,300年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した広域テフラである。VII層中からは縄文時代後期の土器が検出されているため、VII層中から検出されたK-Ahに由来する火山ガラスは一次的に降下したものがそのまま保存されたのではなく、再堆積したものと考えられる。

2 種実遺体同定

(1) 試料

試料は、平城貝塚第5次調査の土層断面より採取されたII b層の黒褐色混貝土、III層の黒褐色粘質土、およびVII層の暗黄褐色シルトの3試料である。

(2) 分析方法

土壌試料約100gを取り、0.5mmの篩にかけて水洗して残渣を集める。これを双眼実体顕微鏡下で観察して種実遺体を拾いだし、得られた種実遺体について同定・計数を行う。

(3) 結果

水洗選別の結果、いずれの試料からも種実および同定可能な植物遺体は検出されなかった。

植物遺体以外には、II b層の混貝土層からは、ウミミナ類とみられる巻貝5個体がほぼ完形で検出されたほか、カキの破片、魚骨、鱗、小動物の骨、陸産の貝などが多数検出された。III層・VII層からも、魚骨、小動物の骨、陸産の貝などが少数検出された。

3. 総 括

今回のように花粉化石などの微化石が全く検出されなかった原因としては、本貝塚の堆積物が好気的環境下で堆積したために分解・消失したものと推測される。このような場合には、微化石が比較的良好に保存される沖積低地の堆積物を対象として花粉分析を実施することにより、貝塚が形成された縄文時代後期頃の植生を復元することができるとと思われる。さらに、今回は検出されなかったが、土層中に含まれる種実遺体・材などの大型植物遺体も発掘調査時に検出された場合には、その種類を明らかにすることにより、当時の植生に関する情報が得られると考えられる。

<参考文献>

町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p. 143-163.

圖 版





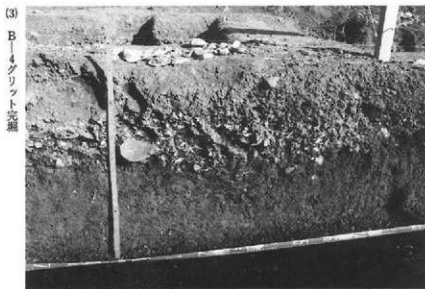
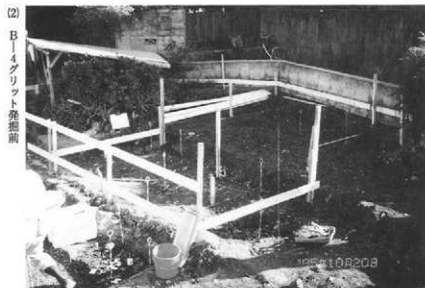
図版2 試料中の火山ガラス

図版3
航空
写真



図版3 遺跡周辺の航空写真

図版 4 発掘状況



図版5 出土遺物

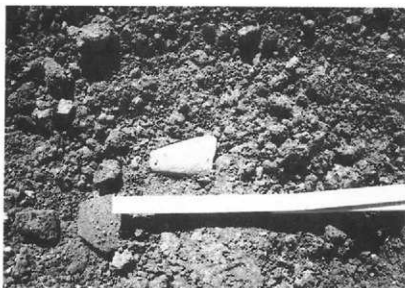
(1) A-1グリットからの出土土器



(2) B-0グリットからの出土土器

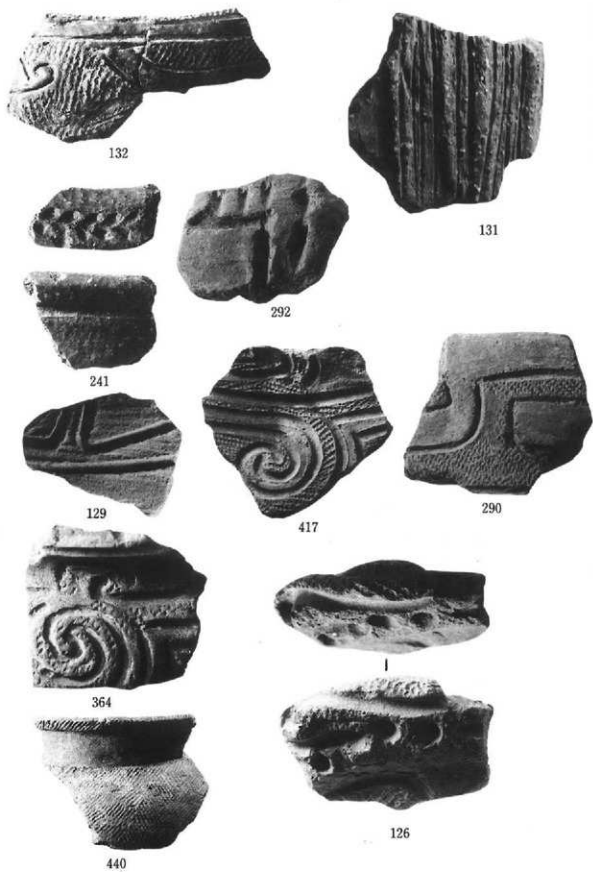


(3) A-1グリットからの出土石器



図版 6 貝層と獣骨





平城貝塚出土土器部分图 (尺度不同) (1)



127



263



196



186



291



149



140



423



123

平城貝塚出土土器部分图 (尺度不同) (2)



|



70



|



124



|



69



|



251



173

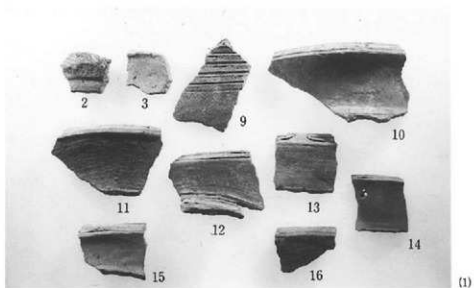


267

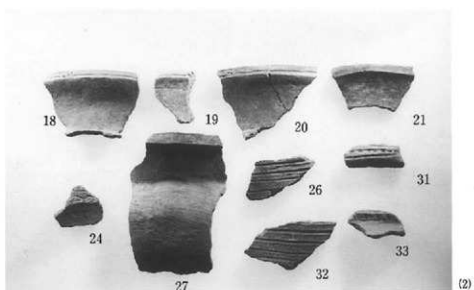


1

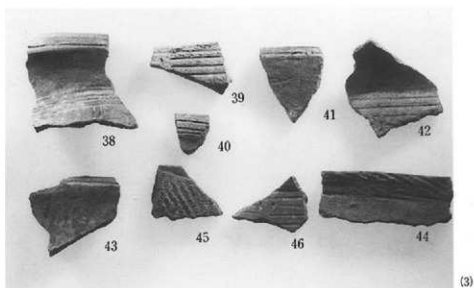
平城貝塚出土土器部分図（尺度不同）(3)



(1)

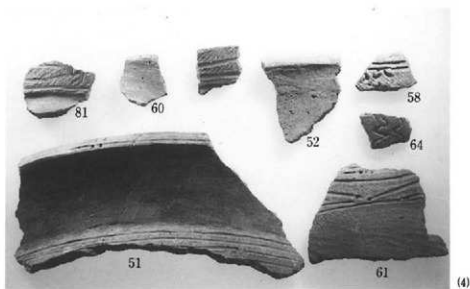


(2)

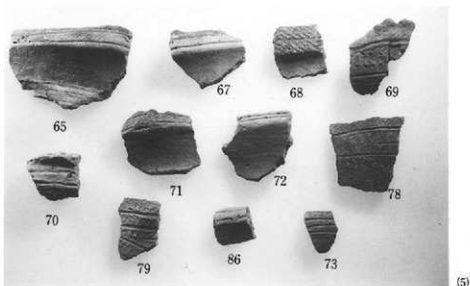


(3)

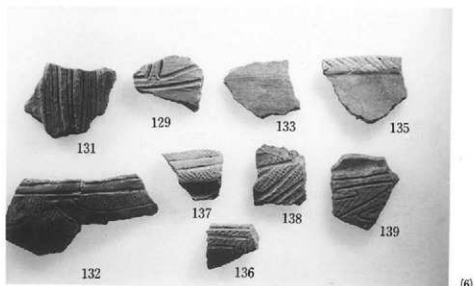
平城貝塚出土土器(1)



(4)

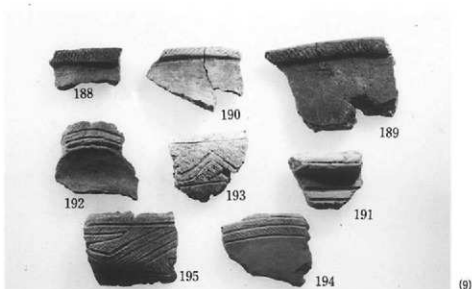
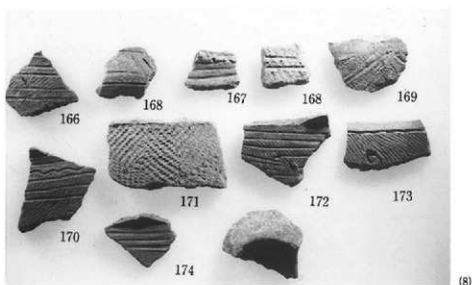
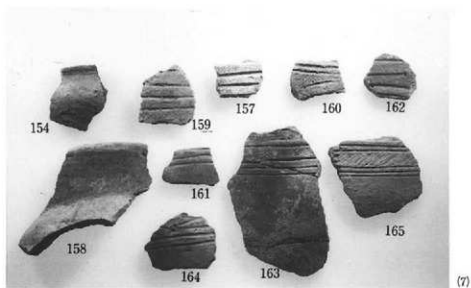


(5)

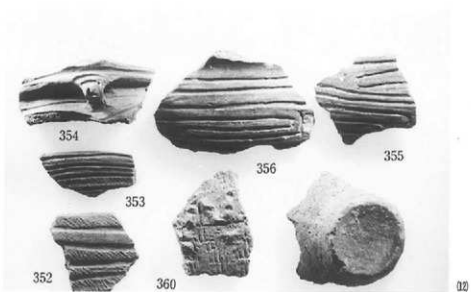
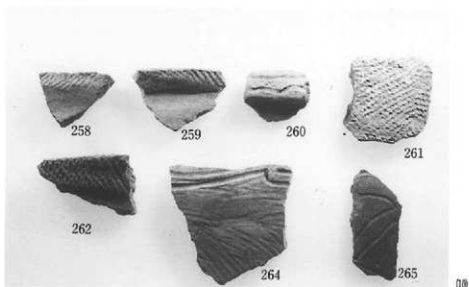


(6)

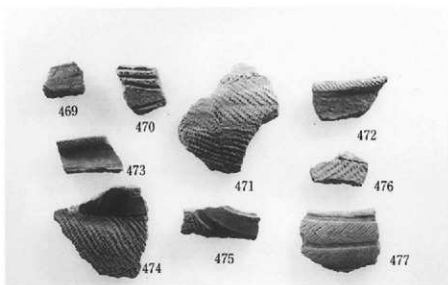
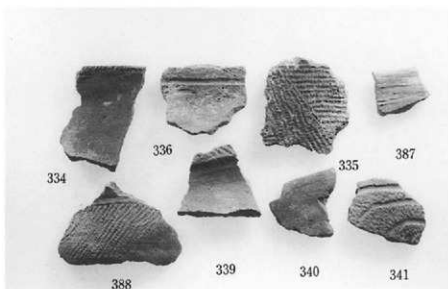
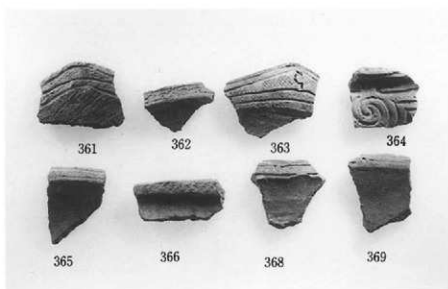
平城貝塚出土土器(2)



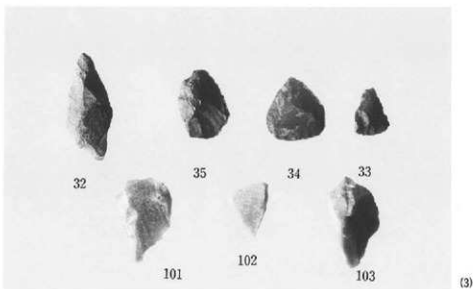
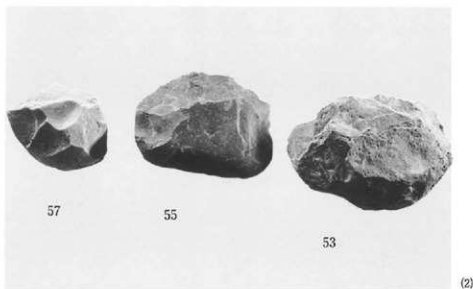
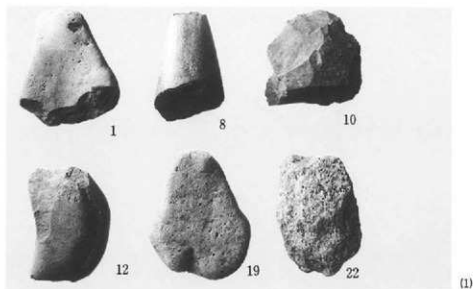
平城貝塚出土土器(3)



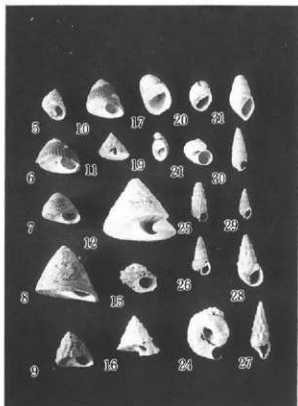
平城貝塚出土土器(4)



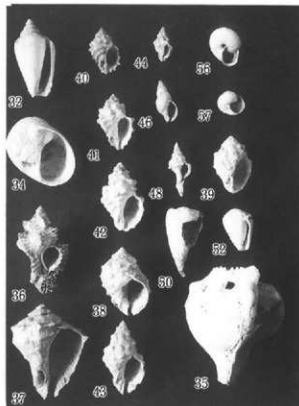
平城貝塚出土土器(5)



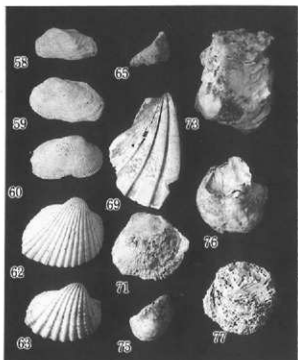
平城貝塚出土石器



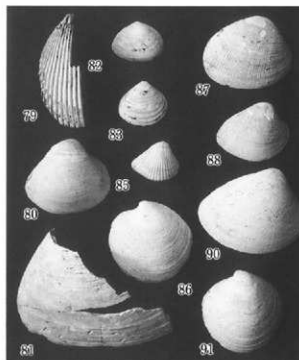
5. イシダミガイ 15. スガイ 26. ヘナタリガイ
6. ヘノキクボガイ 16. ウラウスガイ 27. イボウミナ
7. クマノコガイ 17. アマオブネガイ 28. ウミナ
8. ハチイラ 19. ヒロクチカノコガイ 29. カフアイ
9. コンダカガングラ 20. イシマキガイ 30. コゲツノブエガイ
10. ヒメクボガイ 21. ヤマトニシ 31. カフニナ
11. アナキウスガイ 24. オオヘビガイ
12. ギンタカハマガイ 25. フトヘナタリガイ



32. マガキガイ 41. クリアレイシガイ 56. セトウチマイマイ
34. ホソヤツメタガイ 42. レイシガイ 57. ワスカフマイマイ
35. ボウシュウボラ 43. イボニシ
36. ガンゼキボラ 44. ヒメヨウラクガイ
37. アカニシ 46. イソナ
38. キナレイシガイ 48. ヒメイトマキボラ
39. シロレイシガイ 50. キヌカギイモガイ
40. ウニレイシガイ 52. サヤガタイモガイ



58. カリガネエガイ 69. イタヤガイ
59. エガイ 71. ナミマガシワガイ
60. ベニエガイ 73. マガキ
62. ヒメアカガイ 75. ケガキ
63. ハイガイ 76. カモノアシガキ
65. クジャクガイ 77. ヒトエキクガイ



79. ナガザルガイ 86. カガミガイ
80. シオフキガイ 87. アサリ
81. ミルクイガイ 88. スダレハマグリ
82. イチヨウシラトリガイ 90. ハマグリ
83. マンジュ 91. オキシジミ
85. シオヤガイ

平 城 貝 塚

平城貝塚第V次発掘調査報告書

1996年3月31日発行

編 集 御 荘 町 教 育 委 員 会
発 行 御 荘 町 教 育 委 員 会
愛媛県南宇和郡御荘町平城3063番地1
TEL (0895) 73-1111(代)
印 刷 佐川印刷株式会社

